

2007年度

中国語における動補型複合動詞

千葉大学大学院  
社会文化科学研究科

木村恵介

# 目次

## 第一章 語形成と動補型複合動詞 1

- 1.1. 言語形式に関する基本概念 1
  - 1.1.1. 言語形式 2
  - 1.1.2. 独立形式 2
  - 1.1.3. 語 2
  - 1.1.4. 付属形式 2
- 1.2. 語形成の種類 4
  - 1.2.1. 屈折 5
  - 1.2.2. 派生と複合 5
- 1.3. 複合語の構成要素 6
- 1.4. 中国語における複合語 13
- 1.5. 複合語の語幹どうしの関係による分類 15
- 1.6. V-V 型複合動詞 18
  - 1.6.1. 並列関係 19
  - 1.6.2. 修飾－被修飾の関係 19
  - 1.6.3. 動詞－補語の関係 19
- 1.7. 動補型複合動詞の分類 22
  - 1.7.1. A類 23
  - 1.7.2. B類 23
  - 1.7.3. C類 24
- 1.8. 中国語における非対格性 24
  - 1.8.1. 形態論的根拠：N-V 型複合語と V-N 型複合語 25
  - 1.8.2. 統語論的根拠 1：能格動詞 26
  - 1.8.3. 統語論的根拠 2：存現文 27
  - 1.8.4. 統語論的根拠 3：疑似他動詞（半存現文） 28

## 第二章 先行研究 30

- 2.1. 動補型複合動詞の先行研究 30
- 2.2. 意味関係による分析 30
  - 2.2.1. 李臨定（1980） 30
  - 2.2.2. 呂叔湘（1986） 32
  - 2.2.3. 今井（1985） 34
- 2.3. GB理論による分析 38
  - 2.3.1. 望月（1990） 38
  - 2.3.2. 山口（1991） 40
- 2.4. 認知文法的分析 41
- 2.5. 項構造の組み合わせによる分析 43
- 2.6. 語彙概念構造による分析 45
- 2.7. 石村（2000） 48
- 2.8. 鈴木（2004） 50
- 2.9. 動補型複合動詞の分類 53
  - 2.9.1. 平行型 54
  - 2.9.2. 交差型 55

- 2.9.3. 評価型 55
- 2.10. 動補型複合動詞分類に関する若干の問題点 56

### 第三章 語の認定 61

- 3.1. 言語形式の独立性 61
- 3.2. 言語形式の同一性 62
  - 3.2.1. 同一性の形態的基準 63
  - 3.2.2. 同一性の意味的基準 16
- 3.3. 言語形式の〈類似性〉 64
  - 3.3.1. 類似性の形態的・機能的基準 64
  - 3.3.2. 類似性の意味的基準 65
- 3.4. 日本語における形態分析の問題 66
  - 3.4.1. 連濁 66
  - 3.4.2. アクセントの変異 67
  - 3.4.3. 語幹の異形態（被覆形） 68
- 3.5. 語と語より小さい単位との区別 69
- 3.6. 語と語より大きい単位との区別 73
  - 3.6.1. 内部の緊密性 74
  - 3.6.2. 外部からの孤立 78
- 3.7. V-V型複合動詞か派生形式か 80
- 3.8. 結論 82

### 第四章 動詞分類と範疇選択 83

- 4.1. 日本語における範疇選択の問題 83
- 4.2. 従来 of 動詞分類 85
  - 4.2.1. 日本語動詞 of アスペクト的 분류 86
  - 4.2.2. 中国語動詞 of アスペクト的 분류 87
- 4.3. 本稿における中国語動詞分類 92
  - 4.3.1. 状態動詞 93
  - 4.3.2. 变化動詞 94
  - 4.3.3. 静态動詞 96
  - 4.3.4. 動作動詞 97
- 4.4. 動詞範疇とV2 98
- 4.5. 中国語動詞の下位範疇分類に関する若干の問題点 100
  - 4.5.1. 状态動詞と变化動詞 100
  - 4.5.2. 動詞の意味範囲：結果の含意に関して 101
  - 4.5.3. 荒川 (1986) における動詞の意味の段階説 103
  - 4.5.4. 静态動詞と動作動詞 104

### 第五章 構文 105

- 5.1. 本章の目的 105
- 5.2. 自然被動文 105
- 5.3. SVO構文と処置文（“把”構文） 108
- 5.4. 重動文（動詞コピー構文） 115

第六章 結論 121

参照文献 123

# 第一章 語形成と動補型複合動詞

この論文は、中国語学や中国語を対象とした言語学において、従来、「動詞+結果補語（動補）構造」や「動詞+結果型複合動詞」などと呼ばれてきた言語形式（以下、動補型複合動詞と呼ぶ）の記述・分析を行うことを目的とする。特に、従来の研究においてあいまいにされがちであった、この形式がどの階層に属するか（語か句か）ということに対する分析を重視する。また、これらの記述・分析を通して、言語における「語らしさ（wordhood）」とは何かということを明らかにしたい。

この論文の構成は次の通りである。第一章では、現代中国語における語形成を概観し、そのなかに動補型複合動詞を位置づける。第二章では、この形式に関する先行研究を批判的に検討する。第三章では、前章までの内容をふまえて、語の認定における諸問題について日本語からの観点もまじえながら考察する。第四章と第五章では、動補型複合動詞をそれぞれ内側への視点と外側への視点とから考察する。つまり、第四章では、動補型複合動詞を構成する内部要素にはどのような動詞・形容詞（動詞性語幹・形容詞性語幹）が使われるかを明らかにする。また、第五章では、動補型複合動詞がどのような構造を持った文の述語として使用されるかを考察する。第六章では結論として、中国語の動補型複合動詞から見えてくる「語らしさ」について述べる。

この論文で用いる「〔現代〕中国語」は北京語（“北京话”）、“北京官话”、“普通话”などと同義に用いている。李林静氏（黒竜江省出身）、陳愛玲氏（北京市出身）、吳志剛氏（北京市出身）、楊祥氏（北京市出身）にネイティブ・チェックをお願いした。この場を借りてお礼申し上げる。

この章では、中国語の語形成、特に複合語のなかで、動補型複合動詞というものがどのような位置を占めるかを述べる。そして、動補型複合動詞をその構成要素どうしの結合度の強さから三つに分類する。また、動補型複合動詞の後部要素（V2）の意味的・機能的特徴を見る際に有効であると思われる「非対格性の仮説」を導入する。

## 1.1. 言語形式に関する基本概念

### 1.1.1. 言語形式

言語形式は、ある発話断片から文音調（イントネーション）と文音調の表す意味を捨象した抽象的概念である。ある話者Aがある場面で発した「〔君の言っていた本って〕ドノホン？」（「？」は上がり音調をしめす。）に対して、別の話者Bが「コノホン。」（「。」は下り音調をしめす。）と言った場合、両者の「ホン」は同一の言語形式に該当する。また、この話者Bが別の場面で「コノホンオモシロイヨ。」と発話した場合の「コノホン」は、さきほどの「コノホン」と同一の言語形式に該当する。

言語形式は次のようにも定義できる。言語形式は、（許される範囲の変異をとめない得る）一定の音形（=音素連続+アクセント）と意味を持ち、ある程度以上の独立性と結合度を持っているものである。独立性と結合度については第三章で述べる。

言語形式は、さまざまな大きさの単位をふくむ。だから、文も語も言語形式である。もちろん、語より小

さな言語形式もある。最小の言語形式を形態素 (morpheme) と呼ぶ。

厳密には、「ある言語形式が該当する発話」と書くべきであるが、煩雑さを避けるために、以下では「ある言語形式が発話される」というように書くことがある。

### 1.1.2. 独立形式

独立形式は、文として発話することのできる言語形式である。服部 (1949や1950 [1960: 3. と4.]) の「自立形式」、Bloomfield (1933 [1935]) の free forms におおよそ該当する。

コミュニケーションの基本的な単位は、文 (sentence) である。文は通常 (独立語文や省略文をのぞいて)、複数の言語形式からなる。文はいくつかの階層から成る。それぞれの階層に属する言語形式は、いくつかの範疇に属している。文における最上位の階層は文であり、最下位の階層は語である。文を分析していった語にいたるまでのあいだに、さまざまな中間的な単位がある。いまその中間的単位を便宜的に「文節」と呼んでおく。つまり、言語形式が属する階層には少なくとも次の三種類がある。文 (“那本书, 我给你 nài běn shū, wǒ gěi nǐ” ; 「その本、君にあげるよ」) ・文節 (“那本书” “我给你” “给你” ; 「その本」「君にあげるよ」「君に」「あげるよ」) ・語 (“那本 それ-類別詞” “书” “我” “给” “你” ; 「本」「君」「あげる」)。日本語の例で、「その」「に」「よ」は語ではあるのだが、つねにほかの語と結び付いてでなければ発話され得ない。このような語を付属語と呼ぶ (服部 1950)。

### 1.1.3 語

これまでさまざまな研究者によってさまざまに語が定義されてきたが、ここではそれらをいちいち検討しない。語はある程度以上の独立性を持った言語形式であり、もうそれ以上、同じ程度以上に独立性の高い言語形式に分析できない言語形式のことをいうと、とりあえず定義しておく。しかし、「ある程度」がどの程度か分からなければ、この定義に意味は無い。最初に確認しておくべきなのは、同一言語内においても「ある程度」は一定していないということである。これは、ほかの言語形式と結合してしか現れ得ない言語形式であっても、語と呼べるような言語形式が存在するからである (英語の冠詞 a, the など)。

### 1.1.4. 付属形式

付属形式は、それ単独では発話され得ず、しかも独立性もある程度以下に低く、したがって結合度がある程度以上強い言語形式である。下線部のような条件をつけるのは、単独では発話されなくても (語と呼べるほどに) ある程度以上独立性の高い言語形式が存在するからである。接語・倚辞 (clitic) や小辞・助詞 (particle) などと呼ばれている言語形式である。このような言語形式は、付属語あるいは付属語結合 (付属語のみが結合した言語形式) として付属形式から排除する。付属形式は、服部の「附属形式」に相当する。Bloomfieldの bound forms は、free forms ではない linguistic forms なので、私の付属形式・付属語・付属語結合に相当する。これを拘束形式と呼ぶ。服部の「非自立形式」に対応する。

日本語における付属形式には次のようなものがある (風間 1992, 宮岡 2002など)<sup>註1</sup>。

<sup>註1</sup> 異形態は、分節音の付加によるものは簡便にかっこに入れてしめた。音形交替によるものは「〜」で結んで並列させた。-i ~ -φ は、文中で文を中断させる機能をもった形式 (屈折的範疇) であり、ほかの屈折的範疇のような明確な意味をもたない。屈折接辞は[]で囲んでしめた。

- (1) 語幹 (語根の一部・擬似独立形式もふくむ)
- (2) 屈折接辞 (-r)u 《意志・断定》、-ta ~ -da 《完了・完成・過去》、-e ~ -ro ~ -yo 《命令》、-(y)oo 《勧誘・軽い意志》、-mai 《否定推量・意志》、-i ~ -φ)
- (3) 派生接辞 動詞をつくる派生接辞 (-s)ase[-ru] 《使役》、-(r)are[-ru] 《受身》、-(rar)e[-ru] 《可能》、-(i)mas[-u] 《丁寧》、-bur[-u]、-gar[-u]、-mek[-u]、形容詞をつくる派生接辞 -(a)na[-i] 《否定》、-(i)ta[-i] 《願望》、-rasi[-i]、-gamasi[-i]、-Qpo[-i]、名詞をつくる派生接辞 (-mi、-sa) 注2

概略的には、語幹とは、語を構成する成分(造語成分)のうち、接辞ではないものである。このような消極的な定義しかできないのは、接辞と語幹との境界があいまいなためである。また、ある造語成分が語幹なのか接辞なのか明確に判定するのが難しい場合もある。たとえば、「ひっぱる」「ひっぱたく」「ひっかく」「ひっさげる」の「ひっ-」は語幹か、接辞か。一般的には、造語成分のうち、開いた範疇に属するほうの形態素(つまり、そのメンバーが相対的に多数であるほうの言語形式)を語幹と呼んでいる。しばしば、語の中心的な意味を担う(「語彙的意味を持つ」とも言われる)ことが一般的である。そして、閉じた範疇に属する、つまりそのメンバーが相対的に少数であり、歴史的な変化をのぞいては増えることのない言語形式を接辞と呼んでいる。語幹がさらに形態素(語幹と接辞)に分析できる場合もある。もうそれ以上分析できなくなった形式を語根と呼ぶ。つまり、語根とはそれ以上形態素に分析できない最小の造語成分である。語幹が単一の形態素からできている場合、語根と語幹は等しくなる。一般的には、屈折接辞をのぞいた語構成要素を語幹と呼んでいるが、本稿では、屈折接辞・派生接辞の結合相手とともに語幹と呼ぶ。擬似独立形式は、語幹にふくまれる概念である。語幹(語根)のうち、同じあるいは似た音形、似た意味である語が存在する言語形式である。これを簡単に「対応する語が存在する」と表現する。一般的には、単独で語となることができない形態素を拘束形態素と呼び、単独で語となることができる形態素を自由形態素と呼ぶ。この用語法では擬似独立形式は自由形態素と呼ばれるべきである。本稿でも便宜上この名称を使うことがあるが、厳密には語とその構成要素とは異なるレベルに属するので、(拘束形態素・自由形態素という用語を使うにしても)あくまで「同じあるいは似た音形、似た意味である語が存在する(≒対応する語が存在する)」と考えるべきである。

中国語における付属形式には次のようなものがある。

- (4) 語根 (-房 fáng 《へや》、-民 mín 《人民》、-物 wù 《もの》、-室 shì 《へや》、-寒 hán 《寒い》… …)
- (5) 擬似独立形式 (冰 bīng 《氷》、油 yóu 《油》、人 rén 《人》、路 lù 《道》、菜 cái 《料理、野菜》、牛 niú 《牛》 ……)

注2 以下、本文やグロスで用いる記号・略号は次のとおり。

- : 語幹と接辞の境界、接辞どうし・語幹どうしの境界にも用いる。

= : 語幹と付属語の境界。

+ : 複合語内部の語幹と語幹の境界。

# : 語境界。

pfv : 完了相

exp : 経験相

dur : 継続相

- (6) 屈折接辞（-了 le 《実現・完了》，-着 zhe 《進行・持続》，-过 guo 《経験》，-得 de 《非述語化接辞》，-的 de 《名詞化接辞》）
- (7) 派生接辞（初- chū 《旧暦の上旬》，第- dì 《序数》，老- lǎo 《～さん、兄弟順、若干の動物名》，-儿 ér 《指小辞》，-子 zǐ 《指小辞》，-头 tóu 《指小辞》，-们 men 《人の複数》）

語根は Packard (2000) における bound root に相当する。同様に、擬似独立形式は (root) word に、屈折接辞は grammatical affix に、派生接辞は word-forming affix に相当する。Packard による中国語の形態素タイプの分類には、このほかにもうひとつ function word がある。これは、付属語に相当する。たとえば、終助詞（语气词）の“了 le 《変化、～になった》”“吗 ma 《質問》”“吧 ba 《推量・勧誘・命令・疑問など》”、接続詞（连词）の“和 hé 《と》”などである。注意すべきなのは、中国語においては、それ以上分析できない（一音節形態素、ほぼ漢字一字に相当する）形態素でも、そのままの音形で独立形式となり得るものがあることである（厳密には「対応する独立形式がある」と言うべきであるが）。そのような形態素は非常に多い。しかし、ここでは「語根」を付属形式に限り用いているので、対応する独立形式のあるものは擬似独立形式と呼ぶ（いわゆる「自由形態素」である）。Packard は (root) word と呼んでいるが、うえで述べたように語とは異なるレベルに属する形態素である。

語根に何か結合してさらに大きな単位になっても、独立形式になれない言語形式がある。“彩色 cǎisè 《カラーの》”“袖珍 xiùzhēn 《ポケットサイズの》”“野生 yěshēng 《野生の》”“国产 guóchǎn 《国産の》”“外来 wàilái 《外来の》”などである。これらは名詞や“的 de 《～の》”の前のみに現れる（動詞の前に現れて動詞と結びつくものもある）。研究者によっては、これらを限定用法（非述語用法）にだけ用いられる形容詞としたり、「区別詞」という品詞を立てたりしている（朱德熙 1982: 52-54）。つまり、〔付属〕語であるとみなしているのである。名詞と“的 de”というような異なる範疇に属する形式と結びつくことから、これらの形式の独立性は比較的高い。付属語としてもいい形式である。

## 1.2. 語形成の種類

前節で、語の構成要素となる形式について論じた。この節では、語根や語幹にそのような形式（接辞等）が付いてゆく過程（語形成過程）について述べる。語形成過程（あるいは語構造）は、その本質的な違いから二つに分けられる。屈折 (inflection) と派生 (derivation) ・複合 (compounding) である。派生と複合は、まとめて語形成 (word-formation) や造語などと呼ばれることがある。屈折は、語形（言語形式群）をつくる手段につけた名称ではない。機能（職能）につけた名称である。つまり、屈折によって語形をつくる手段としては、接辞形式の付加・音形交替・語形の交替（補充法 suppletion）・重複 (reduplication) などがある。逆に、派生と複合は、語彙素をつくる手段につけた名称である。語形成の手段としては、ほかに音形交替（「変える」 kae-ru : 「変わる」 kawar-u, 「起こす」 okos-u : 「起きる」 oki-ru）や重複（「山々」「人々」）などがある。だから、音形交替や重複も、派生・複合と同列に並べられる。しか

し、ここでは特に生産性の高い<sup>注3</sup> 派生と複合のみを扱う。

中国語の語形成の手段には、派生接辞の付加・複合・重複に加えて、縮約がある。縮約とは、派生や複合によって形成された語の一部を省いたり、語を並列させた句のうち共通部分を取り出したり省いたりして、語形の長さを縮める語形成過程である（工农业 gōngnóngyè ← 工业、农业 gōngyè nóngyè 《工業、農業》、初中 chūzhōng ← 初级中学 chūjí zhōngxué 《中学校》、四会 sìhuì ← 会听、会说、会读、会写 huìtīng huìshuō huìdú huìxiě 《聴ける、話せる、読める、書ける》）。

### 1.2.1. 屈折

ある範疇に属する言語形式が、原則的にすべて次のような状態にあるとする。音形の一部が共通であることによって同じ事象を意味として表し、ほかの部分が異なることによってその事象とほかの事象との関係やその事象のあり方を意味として表す語の集合がある。たとえば、「食べる tabe-ru」「食べた tabe-ta」「食べる tabe-ro」「食べよう tabe-yoo」である。tabe- が共通部分、-ru、-ta、-ro、-yooが異なる部分である。これらの語形群において、tabe- が意味として表す事象は共通していて、-ru、-ta、-ro、-yoo が表す意味によって tabe- の表す事象のほかの事象に対する関係や、tabe- の表す事象のあり方を表している。このような状態にあるとき、「食べる」「食べた」「食べる」「食べよう」等のあいだにある関係は少し複雑である。第三章でも述べるように、本稿ではこれらを異なる言語形式であるとする。しかし、このような一部が等しい諸形式間の関係を、等しい部分のまったく無い形式どうしの関係と同列に扱うのには抵抗を感じる。このような状態にある形式群は、たがいに異なる言語形式とするよりは、同一の言語形式としたほうが母語話者の直観に合うかもしれない。このような諸形式の集合を「言語形式群」と呼ぼう。また、「食べる」は「叙述法非過去形」とでも呼べるような範疇に属し、「食べた」は「叙述法過去形」、「食べる」は「命令法」、「食べよう」は「勧誘法」とでも呼べるような範疇に属する。このような範疇には、基本的にすべての動詞が属している。「叙述法非過去形」には「食べる」のほかに「走る」「動く」「飲む」「着る」「考える」……などが属している。このような範疇を「屈折的範疇」と呼ぶ<sup>注4</sup>。

中国語の場合、動詞から屈折接辞をのぞいた語幹部分があるまま文中で機能する（つまり、自由形態素である）。たとえば、“吃 chī 《食べる》” “吃了 chīle 《食べた》” “吃着 chīzhe 《食べている》” “吃过 chīguo 《食べたことがある》” である。このような場合、これら諸形式間の同一性は日本語よりもはるかに高くなる（「同一性」については第三章参照）。

### 1.2.2. 派生と複合

語幹と派生接辞が結合して語をつくる語形成手段を派生と呼ぶ。この際、語全体の文法範疇（品詞）が語幹が属する擬似範疇と同じである語もあるし、異なる語もある。語幹（語根・擬似独立形式をふくむ）どうしが結合して語をつくる語形成手段を複合と呼ぶ。複合は、語幹のみを構成要素とする語形成である。つま

<sup>注3</sup> ここでは、その語形成の手段によってつくられた語彙素が、当該言語の辞書（lexicon、語彙項目）のなかに多く存在し、現在でもその手段によって新しい語彙素をつくることのできる「生きた」手段を「生産性が高い」と呼ぶ。

<sup>注4</sup> このように語を言語形式群と屈折的範疇から分析する方法は、湯川（1971, 1999）によるが、これは Booij（2005: 11）の lexeme-based morphology に対応しているだろう。また、語を語幹（tabe-）と屈折接辞（-ru、-ta、-ro、-yoo）に分析する方法は、Booij の morpheme-based morphology に対応するだろう。

り、複合語は、「語幹+語幹」という語構造をしているということになる<sup>註5</sup>。これは一般的には、「語基」とか「基体」とか呼ばれるものである。「語根」「語幹」「語」を造語成分の単位の大きさとして規定する理論（いわゆる「レベル順序付け」）に関しては後で検討する。

しばしば、派生と屈折、派生と複合の境界はあいまいである。なぜなら、派生接辞と呼ばれる言語形式にふくまれるものは、その独立性にかなり大きなばらつきがあるからである。独立性のかなり低い付属形式もあれば、独立性のかなり高い付属語や自立語とっていいものまである。その場合、その形式を接辞と呼ぶのは適当ではないかもしれない。

派生は、派生接辞がどの語幹と結合するかが個別的に決まっているものである。これに対して、屈折の場合、屈折接辞は（結合不能であることが意味の上から説明される場合以外は）ある文法範疇に属するメンバーすべてと結合する。このように、結合相手の範疇があらかじめ決まっていて、結合できるかできないかが意味によって決まるという特徴は、独立形式どうしの結びつきと共通している。だから、派生形式の独立性が高くなればなるほど、その機能は屈折らしくなるのである。ただし、その形式の独立性や結合度は独立形式（語）に近づいていく。たとえば、派生接辞とされる *-mas[-u]* や *-(a)na[-i]* は動詞語幹につく際、かなり高い生産性をしめす。屈折接辞とされる《命令》の *-e* が動詞を選ぶのと対照的である（\**ir-e* 「要れ」風間 1992: 253）。また、屈折接辞とされる《過去・完了》の *-ta* は動詞以外の範疇にもつく（*samu-kaQta* 「寒かった」、*inu=daQ-ta* 「犬だった」、*sizukadaQ-ta* 「静かだった」）。この点で *-ta* は付属語に近い。

複合と派生の区別については、特に日本語の場合、接辞形式が歴史的に自立語から変化したものであったり、共時的に音形と意味がほとんど等しい自立語が存在したりする形式で問題が生じる。たとえば、動詞の連用形に続く「～始める」「～続ける」「～終わる」「～かける」「～だす」などや、動詞のテ形に続く「～いる」「～ある」「～おく」「～みる」「やる」「～もらう」などである。これらには、複合動詞の後成分（擬似独立形式、つまり付属形式）とみる見方、同様に複合動詞であるがほかの複合動詞と異なり統語的に派生されているとみる見方、補助動詞（付属語？）とみる見方、派生接辞とみる見方などがある。

このように、実際には屈折・派生・複合の境界は連続的で不明瞭なのであるが、概念としては明確に区別される。

### 1.3. 複合語の構成要素

複合語は、従来《二つ以上の単語が結びついて作られている語》と定義されることが多かった。例えば、Trask (1993: 53) は“compounding”の項で、複合を次のように定義している。

The process of forming a word by combining two or more existing words: *newspaper, paperthin, babysit, video game*. […略…]

Traskは、複合を過程（process）として捉えている。過程の前後では、階層が違っていることを前提にすれば、word（語）が結びついて word ができるという表現は何ら奇異ではない（ただし、語形成過程前の word と語形成過程後の word が異なる階層に属していることを、何らかの形で示す必要がある）。もし、

<sup>註5</sup> 三つ以上の成分が並んでいる場合でも、構造的にはまずどれか二つの成分が結び付き、その結び付いた成分ともう一つの成分が結び付く……というように、階層をつくっている。たとえば、「落ち穂拾い」はまず「落ち-」と「-穂」が結び付き、そのあとで「落ち穂-」と「-拾い」が結び付いて形成されている。これは「二叉枝分かれの制約」と呼ばれている（影山 1993: 11-12）。

語形成過程と、できあがった複合語の (static な) 語構成とを異なったレベルとして区別するならば、語形成過程の面からは、複合を《二つ以上の語が結びついて (上位の階層の) 語を作り出す過程》と定義できる。しかし、語構成の面からは、複合語を構成する要素が自立し得るものであっても、つまり、それ自体で語となり得る形式と音素連続・意味が等しくても、その構成要素自身は語ではないとすべきである。

ここでは、複合語を語構成の面から分析するとして、複合語の構成要素が、対応する自立語を持っている場合を見ていこう。たとえば、服部 (1950 [1960: 462]) は、*hanakago* (花籠) の *hana-* と *-kago* のような付属形式を、「自立語に形も意味も似ている」形式として「えせ自由形式」と呼んで、そうでない付属形式と区別している。また、湯川 (1971: 71-72) も次のように言う。

日本語において、たとえば、*hana* (花) と *hanami* (花見) の *hana-* は意味論的にも同一言語形式とは考えられない (*hanami* の *hana-* が桜の花のみをあらわすために第4章で見る同一性の基準には合致しない。) し、*nezumitori* の *nezumi-* と *nezumi* (鼠) とは意味論的には同一言語形式の資格がないとはいえないが、*nezumi* のような独立形式ときわめて限られたものの前にしかあらわれないう *nezumi-* とを同一言語形式と見るわけにはゆかない。こうした、*hana-*、*nezumi-*、さらには *-mi*、*-tori* は擬似独立形式である。擬似独立形式とは音素連続が等しいか一部を除いて等しい (cf. *hune: kobune* における *hune* と *-bune*) 独立形式があつて、意味的に何らかの共通性が感じられるものである。対応する独立形式が消滅した場合、擬似独立形式ではなくなりそれを含む全体が全く単一の言語形式となる。

[…中略…]

しかし、擬似独立形式を独立形式と同列に扱ったりすることは、言語の本質的事実にあわない誤りである。擬似独立形式の文法上の本質は、それが文法的には規定できない言語形式と個別的にむすびつき、個別的にむすびついた形で記憶されるところにある。

湯川は、「対応する独立形式が消滅した場合、擬似独立形式ではなくなりそれを含む全体が全く単一の言語形式となる」と言っている。これには反対である。仮に、*hana-mi* の *hana-* に対応する独立形式 *hana* が消滅したとしても、*cuki-mi* (月見)、*juki-mi* (雪見) 等との比較から、*hana-* を抽出することはできる (たとえ意味が分からなくとも)。いわゆる *cranberry morpheme* である。

また、石井 (1983: 80-81) の言う「素材単語」も、ここでの擬似独立形式に対応している。しかし、擬似独立形式を独立形式と同じものとみなすか否かに関しては、服部・湯川とは少し立場を異にする。少なくとも、分析の作業仮説としては、同じものとみなすことを認めている。

ところで、ここで取り出した「前項動詞」・「両項動詞」・「後項動詞」は、その名称からもわかるように、厳密には複合動詞の内部要素そのものではなく、そのもととなった単語であり、内部要素に意味的・形式的に対応する単語 (これを「素材単語」と呼ぶことにする) である。複合語の語構造がそれを直接に構成している要素相互の関係にほかならないということは湯本昭南氏の指摘 (注 2) にある通りであるが、いまはそうした語構造を分析する上での手掛かりを探す段階であり、複合動詞における結合位置をもとに素材単語を分類したわけである。なお、複合語がその形成上は素材

単語を材料にして構成される以上、素材単語の性格が複合語を規定しているということは十分考えられることであり、その意味で素材単語の分析から出発することも妥当であると考えられる。〔注2 ゆもと しょうなん「あわせ名詞の構造-n+nのタイプの和語名詞のばあいー」（言語学研究会編『言語の研究』むぎ書房、一九七九）〕

本稿では、「長靴」や「ゆで卵」における形容詞語幹「長-」や動詞語幹「ゆで-」も擬似独立形式とする。これらに屈折接辞-iや-(r)uをつけた「長い」や「ゆでる」が語として成立するからである。しかし、これらを除外したとしても、日本語・中国語の複合語には、対応する独立形式を持たない構成要素から出来ているものが多く存在する。

影山(1993: 13)は言う。

複合語は基体と基体の組み合わせである。従来（特に英語に基づく分析では）、複合語は独立性のある語どうしの組み合わせと規定されることが多い。日本語では「海外+旅行→海外旅行」「手間+取る→手間取る」などがこの規定に合う。しかし、「酒飲み」「気短(な)」などはどうだろうか。

「飲み」「短」は独立して用いられないけれど、やはりこれらは複合語とみなすのが妥当であろう。その点では「帰国」の「帰」と「国」、「建築」の「建」と「築」のような一字漢語も同じである。このような例を考慮に入れると、複合語を作る基体は自立形式である必要はないことになる。

「酒飲み」の「-飲み」は、「飲む」の語尾が交替している(nom-u > nom-i)。「気短」の「-短」は、「短い」の語幹の形態に対応している(mizika-i > mizika)。上で述べたように、独立して用いられない形式ではあるものの、独立形式との対応が明瞭な形式(擬似独立形式)である。しかし、漢語の場合、造語成分の独立性はさらに弱まる。「帰国」において、「帰(き)」と「-国(こく)」をそれぞれ形式(形態素)として取り出すことができるのは、「帰宅」「帰郷」「帰社」などの語と比較するからである。「帰」の場合、複合語の後ろの成分としても現れる(例:「復帰」)。また、《～に帰る、戻る》という意味は希薄になるものの、意味的な関連が感じられるものに、「帰結」「帰着」「帰納」「帰趨」「帰化」「帰服」「帰順」といった語がある。「-国」は、「愛国」「外国」「祖国」「英国」「米国」などの語との比較から抽出できる(「-国」では「国家」「国籍」「国土」など)。また、《日本の》という意味でなら、「国語」「国史」「国学」という語がある。

漢語にも擬似独立形式はある。たとえば、「愛」や「悪」である。「愛」の場合、独立形式(語)としては、「愛がある」「愛をはぐくむ」「愛の生活」といった例があるし、(漢語の造語成分も含む)擬似独立形式としては、「愛する」「愛情」「恋愛」「郷土愛」などがある。「悪」の場合、独立形式としては、「悪を憎む」「悪を倒す」「悪の枢軸」などの例があり、擬似独立形式としては「悪魔」「悪意」「悪事」「社会悪」「必要悪」などがある。

「帰-」や「-国」のような造語成分に、対応する独立形式が無いのは、これらの語の一部がふるい中国語から借用されたからである。和語とは語彙の層を異にするのである。だから、「帰宅」「愛国」のような語における「動詞性成分+名詞性成分」という構造は、中国語の形態法を反映しているのである。いわば中国語の形態法も語の借用を通じて借用されたのである。なかには、日本で作られた「券売機」の「券売」(名詞

性成分+動詞性成分)のように日本語の文法(形態法)に従ってしまっている語もある。これは、まさに英語などの新古典複合語(neo-classical compounds)に対応している。英語の bio-logy《生物学》、psycho-logy《心理学》、socio-logy《社会学》、tele-graph《電信・電報》、tele-vision《テレビ》などの語における造語成分(語根)は、ギリシャ語やラテン語からの借用である。対応する独立形式はほとんど無い。英語話者が bio- を《生物の》という意味であると分かるのは、biochemical《生化学》、biography《伝記》、biomedicine《生物医学》といった語との比較によってである。あるいは学校教育によって bio- の意味を教わったからである。neo-classical compounds に neo とあるのは、これらの語が古典ギリシャ・ラテン語から直接全体を借用したのではなく、実在する語から語根を発見し、その語根を用いて造語していったからである。この点が通常の複合語と異なるのである(Booij 2005: 86)。

以上のように、「複合語」と呼び得るものの構成要素には、対応する独立形式の無いものもある。そのため、影山(1993: 15-19)は、「基体」や接辞となる形態素の単位として、「語根(root)」、「語幹(stem)」、「語(word)」を区別する必要を述べている。「病気」「病院」「病人」「看病」「難病」「奇病」等における「病-」「-病」は付属形式である。単独では発話され得ないし、独立性も低い。また、「中国旅行」「温泉旅館」などのようにそれぞれの成分(「中国-」「-旅行」「温泉-」「-旅館」)に対応する独立形式が存在する語もある。また、このような語の構成要素の独立性の違いは派生にも存在する。たとえば、派生接辞に関しては、「-さ」は付属形式である「甘-」や「深-」に付いて「甘さ」「深さ」になるだけではなく、「甘酸っぱ-」や「奥深-」に付いて「甘酸っぱさ」や「奥深さ」と言える。しかし、「-み」は「甘み」「深み」とはなるが、「\*甘酸っぱみ」「\*奥深み」は許されない。このような事実が観察されることから、派生・複合において、その形成過程に関与する成分を大きさによって分ける必要があると影山は言うのである。

「病-」「難-」「看-」などの(対応する独立形式の無い)付属形式を、影山は「語根」と呼ぶ。和語では、「甘い」の「甘-」、「深い」の「深-」のように屈折接辞・派生接辞が付いていない(それ以上形態素に分析できない)ものが「語根」である。また、「中国人」における「中国-」は対応する独立形式を持っている。だから、「語根」ではない。しかし、「-人(じん)」は「中国-」だけではなくて、対応する独立形式を持たない「国際-」のような形式とも結合する。「中国-」や「国際-」のような形式の属する単位を「語幹」と影山は呼んでいる。和語においても漢語においても、「語根」と「語幹」は形態上から区別がつく。「語幹」は、「語根」を組み合わせてできあがっている。「中国」は語根である「中-」と「-国」からできている。しかし、「語幹」と(造語成分の単位としての)「語」の区別に根拠はあるのか。

影山(1983: 16-17)は、次のように述べている。

語根と語幹は形の上から比較的明瞭に区別できるが、語幹と語を区別する根拠はどこにあるのだろうか。否定の接頭辞「無、未、不、非」を比較しよう。まず、これらはいずれも一字漢語すなわち語根(無限、未定、不利、非力)にも、二字漢語すなわち語幹(無期限、未提出、不衛生、非会員)にも付くことができる。しかし、四字漢語に付くことができるのは、「非」だけに限られる。「非-資本主義」が適格であるのに対して、「\*無-提出期限、\*未-研究発表、\*不-精神衛生」などは不適格と判断される。これら四字漢語は二字漢語すなわち語幹を複合したものであるから、語幹と語幹の複合に対して「語」という一段大きい単位を想定するのは自然な考え方とも言えるだろう。<sup>注</sup>

<sup>4</sup>〔「注4」は省略。〕

「非-」はかなり特殊な接頭辞である。「非進化論的」「非自立形式」「非現代音楽ファン」などは、意味的に見れば、「非-進化論：的」「非-自立：形式」「非-現代：音楽」というように区切れそうである（区切れのより大きな箇所を「：」で表す）。しかし、音声上は「ひ：しんかろんてき」「ひ：じりつけいしき」「ひ：げんだいおんがく」と区切って発話する。たしかに、「非：進化論的」「非：自立形式」「非：現代音楽」と区切っても、意味上決して許されないというわけではない。「非資本主義」は意味的にも明らかに「非：資本主義」である。「無期限延長」「未発表原稿」「不信任決議」などは、「無-期限：延長」「未-発表：原稿」「不-信任：決議」であって、音声（音韻）と、意味（構造）とにミスマッチは無い（そもそも、これらの例をどこかで区切って発話することはない）。「非-」と同じようにふるまう接辞（や「基体」）がほかにあるだろうか。「非-」のような特殊な一例をもって「語幹」と「語」との区別を主張するのは強引ではないか。

影山は、「語」を「語幹」「語根」から区別するもっと簡便な方法として、接続詞「ないし」「および」を利用することを提案している（p. 17）。

- (8) a. [国立ないし公立] 大学、外国人 [教師ないし講師]、[ゲルマン系およびロマンス系] 言語、[共産主義的ないし社会主義的] 考え方、[自薦ないし他薦] する、[A ないし AB] 型（の血液）、[6 ないし 7] 台
- b. [中国ないし東洋] 的、[ゲルマンないしアングロサクソン] 系、[中国ないし韓国] 製、前 [文部大臣および大蔵大臣]、各 [国立大学および公立大学]、同 [部長および課長]、元 [書記長および書記次長]
- c. \* [乳母ないし手押し] 車 cf. 乳母車ないし手押し車  
 \* [日本および台湾] ザル cf. 日本ザルおよび台湾ザル  
 \* 不 [養生ないし摂生] cf. 不養生ないし不摂生  
 \* [慎ましないし奥ゆかし] さ cf. 慎ましきないし奥ゆかしさ
- d. \* 訪 [中ないし韓] cf. 訪中ないし訪韓  
 \* [紅および緑] 茶 cf. 紅茶および緑茶  
 \* [文ないし語]法 cf. 文法ないし語法

(8a, b) は、「国立」と「大学」とが「語」どうしの結合であるため、内部に「ないし」や「および」を取り込んで拡張することができるのと影山は述べている。(8c) は「語幹」どうしの結合、(8d) は「語根」どうしの結合であるため、接続詞を内部に取り込むことは不可能である。しかし、このように「ないし」や「および」で語内部の成分を並列させる用法は、かなり書き言葉的である。つまり、文字として書かれ（印刷され）読まれることを前提としている。「ないし」「および」を「か」「と」に替えると上の例はかなり奇異に響く。

- (8') a. 国立と公立大学、外国人教師か講師、ゲルマン系とロマンス系言語、共産主義的か社会主義的考え方、自薦か他薦する、AかAB型（の血液）、6か7台

- b. 中国か東洋的、ゲルマンかアングロサクソン系、中国か韓国製、前文部大臣と大蔵大臣、各国立大学と公立大学、同部長と課長、元書記長と書記次長

後ろの成分に「か」「と」が取り込まれている場合、たとえば「外国人教師か講師」の場合、「外国人」を「教師」と「講師」の両方にかける読みをするのはかなり困難であろう。前の成分に「か」「と」が取り込まれている場合、たとえば、「国立と公立大学」はだいぶ舌足らずな表現である。やはり、「国立大学と公立大学」としたくなるであろう。たしかに、(両方あるいは片方の)成分に、対応する独立形式が存在する語(つまり、擬似独立形式から成る語)は、成分の独立性が付属形式どうしの結合より高いため、結合度は低くなる。そのため、語の内部に「ないし」や「および」を組み入れることも可能になる。しかし、「語幹」と「語」が截然と区別されるわけではないのである。

影山は、これらの単位どうしが結合するさいの規則について、次のように言う (p. 18)。

語根・語幹・語という単位は無秩序に結合するわけではない。語形成において、基本的には同じ大きさの単位どうしが結び付く。従って、「訪韓(語根+語根)」に対して「\*訪韓国(語根+語幹)」や、「韓国旅行(語幹+語幹)」に対して「\*韓旅行(語根+語幹)」は不適格である。同様に、「食べ-」と「もの」の複合は語根のレベルで起こると考えられるから、「\*食べ歩き-もの(語幹+語根)」といった表現が成立しないことが予測される。

また、影山(1993: 20)は、派生接辞「-み」「-さ」がとる「基体」の単位を次のように指定している。

(9) -み：形容詞語根\_\_\_\_

-さ：形容詞語幹\_\_\_\_

「-み」は「語根」を結合相手に選択する。だから、「語根」である「甘-」「深-」についての「甘み」「深み」は可能な語である。しかし、「語幹」である「甘酸っぱ-」「奥深-」を結合相手とした「\*甘酸っぱみ」「\*奥深み」は不可能な語である。このような趣旨を影山は述べている。しかし、「-み」は「形容詞語根」にはすべて付くわけではない(例：「\*暗み」「\*暑み」「\*さびしみ」)。

萩原裕子(1998: 80-81)は次のように言う。

一つめは、-サはどんな形容詞にも付けることができる(暖かさ、冷たさ、薄さ)のに対して、-ミが付けられる形容詞は約三〇個ほどと限られている(冷たみとか薄みとは言わない)。つまり、-サはとても「生産的な」接辞である。二つめは、-サはどんなタイプの語にも付けられる(ナウいーナウさ、甘酸っぱいー甘酸っぱさ、大人らしいー大人らしさ、節操がないー節操のなさ)のに対して、-ミはそうでもない(ナウみ、甘酸っぱみ、大人らしみ、節操のなみ、などとはいわない)。-サには、当てはめられるものには無条件で当てはめてしまうという性質(デフォルト性)がある。三つめに、形容詞に-サがつくと、その意味はたいてい予測しやすい(大きさ、高さ、重さは程度をあらわす)が、-ミはそうではない(深みは場所、痛みは感覚など)。

もちろん、「-み」が「形容詞語根」を結合相手とする（「語幹」以上の単位には付かない）という指定は間違っていない。しかし、結合相手が「約三〇個ほど」である事実から分かるとおり、「形容詞語根」という条件は、十分条件ではあっても必要条件ではない。「-み」の結合相手はかなりの程度、個別的に決まっているのである。影山は、〈(9)は範疇の選択（category selection）であって、実際の適切な語と不適切な語の選択には、意味の選択（semantic selection）に対する制限も関与しているのだ〉という趣旨の反論をするかもしれない（1993: 23）。しかし、範疇の選択に限るとしても、「-さ」の指定はせますぎる。「夕景色が見たさ、親にほめられたさ」等をどう説明するのか。もっとも、影山はこれらの例を「-さ」がS構造で付加されるとして説明している（pp. 245-246）。(9)の指定に沿うように解釈すれば、「動詞語根／語幹+た（い）-」を「形容詞語幹」とするのだろう。

インターネットで検索すると、「甘酸っぱみ」が約6700件、「ほろ苦み」が約18000件検出される。どちらも私の語感には合わないのであるが、「-み」にも（「-さ」ほどではないにしても）造語力がそなわっている（しかも、「語幹」と結合する）のである。

このような事実から分かるように、語形成には、(9)でしめされるような「法則性・規則性」ではなく、「個別性・傾向性」が働いているのである。

「長-（なが）」という「基体」は、接辞「-さ」と結びついて、「長さ」となる。影山の基準では、「長-」のような「単純基体」は「語根」だということになる。一方で、「長-」は、「-話」「-電話」「-続き」「おも（面）」「たて-」などの「基体」に付き得る（野村 1977: 252）。「-電話」は、影山に従えば、「語根」である「電-」と「-話」が結合したものであるから、「語幹」である。そして、語形成においては、語根どうし、語幹どうし、語どうしが結合する。したがって、「-電話」と結合する「長-」は語幹だということになってしまう。「長-」は形態上明らかに「語根」であるのだから、「長電話」は「語根」と「語幹」の結合であるとすべきである。このように、語種の異なる形式の結合においては、上の影山の予測は成り立たない。

漢語どうしの結合にも問題はある。たとえば、「人」という漢字で表される「-にん」や「-じん」である。「-にん」の場合、「仙人、罪人、病人」等においては「語根」と結合している（「仙-」「罪-」「病-」は付属形式である）。他方、「仕事人、弁護人、管財人、引受人」等の「-人」は「語幹」と結合している（このうち「仕事-」「弁護-」は擬似独立形式であり、「管財」「引受」は擬似独立形式でない付属形式である）。同様に「-じん」の場合、「達人、名人、美人」等においては「語根」と結合し、「外国人、渡来人、芸能人、知識人」等においては「語幹」と結合している。

このように、複合語・派生語の「基体」と「接辞」を「語根」「語幹」「語」の単位に区別する場合、同じ音形（あるいは音素連続）を持つ形式を異なる単位であるとみなさざるを得ない場合がある。この問題に関わるのだが、野村（1977: 252-3）は、漢語起源の単位における接辞認定の問題について、次のように述べている。（なお、野村の言う「語基」は、影山の「基体」にあたる。）

「アメリカ-的」・「イギリス-式」・「フランス-風」の「的」・「式」・「風」など、漢語系の一字からなる単位は、種々の語基との結合が可能であり、意味も形式的で、接辞とよんでさしつかえない。これからすれば、「アメリカ-人」・「外国-人」なども、かたちのうえからは、接辞とみてよさそうである。しかし、「人（ジン）」は、「米-人」・「外-人」など二字漢語の要素としてもつかわれ、この場合

を語基とし、「アメリカ人」のばあいは接辞とするのは、不自然な感じがする。〔…中略…〕

一律に、これらを語基か接辞かに分類することは、不適當である。これらのうち、意味が実質的で明確なものは、語基とみなし、意味が形式化したものは、接辞としてあつかうのが穩当な措置とかがえられる。そのあいだは連続的とみるべきである。

たしかに、何を「基体（語基）」とし、何を「接辞」とするかは、難しい問題である。連続的なものであるとみなしたほうが、実態には合っている。しかし、どのような意味を「実質的で明確」であるとみなし、意味がどう変化すれば、「形式化した」と考えるのか。意味が「実質的」か「形式化」したかのみを独立性の基準とするのは適當ではない。野村は、影山が言う「語根」レベルの形式を結合相手とする付属形式を「語基」とし、「語幹・語」レベルの形式を結合相手とする付属形式を「接辞」とみなすことに対して、「不自然な感じがする」と述べる。野村の「不自然な感じ」は、おそらく、同じ音形を持つ形式に対して、一方に「語基」、一方に「接辞」という職能の異なる身分を与えることから来るのだろう。しかし、「米人」「外人」と「アメリカ人」「外国人」とでは、結合相手の独立性にたしかに違いが感じられる。そして、結合相手の独立性が低い前者は結合度も強く、結合相手の独立性が高い後者は結合度も弱い。その証拠に、「米人、外人、名人、達人、美人、先人、偉人」などは、結合相手がほぼ個別的に決まっていて、もう生産性が失われているのに対し、「英国人、宇宙人、芸能人、有名人、渡来人、知識人」などは、結合相手の表す意味と「-人」の表す意味との関係がほぼ決まっている。つまり、その人の属性（どの共同体・組織に属しているか、どのような性質を持っているか）を表しているのである。

影山に従えば、「米人」「外人」の「-人」は「語根」であり、「アメリカ人」「外国人」の「-人」は「語幹」である。影山が言うように (p. 18)「単位が小さいほど語彙化が進み、語種の制限が厳しくなり、個々の結合相手が限られ、意味的な特殊化が起りやすいという傾向が見られる。逆に、大きい単位はそのような諸々の制限を免れやすい。これは、結合相手の独立性と成分相互の結合度とが比例するという、さきほど述べたことと平行的である。しかし、異なるのは、影山は結合する成分どうしの単位の大きさが等しくなければならないとしているところである。上で見たように、つねにそうであるとは限らないのである。

したがって、本稿では語の構成要素の単位を、影山のように「語根」「語幹」「語」というように截然と分けることをしないけれども、単位の大きさの違いは認める。そして、その単位の大きさの違いは、構成要素の独立性の違いに還元される。また、独立性の違いは連続的なものであるとする。さらに、複合語においては独立性の違う（単位の大きさの違う）要素どうしが結合することもあるとする。本稿では、語の構成要素の単位として「語」を認めるというような単位の再帰的出現を認めない。この点が文と異なる。語根、語幹というのは、純粹に言語形式上の形から決定される。上で見たように、語の構成要素のうち、それ以上形態素に分析できないものを語根と呼ぶ。そして、（語根をもふくめて）語の構成要素となっていて接辞でない形式を語幹と呼ぶ。だから、語根、語幹というのは構成要素の単位の大きさに類似してはいるが、同じものではない。

#### 1.4. 中国語における複合語

前節で見たように、日本語においては複合語と見られる形式は必ずしも独立性のある語どうしの組み合わせであるとはかぎらない。〈独立性や結合相手の範疇選択などの点から接辞であるとはみなせないような造

語成分（語幹）どうしの結合）と定義するしかない。中国語の複合語においても、この定義があてはまる。中国語においては、複合語を次のように定義する人もいる（Norman 1988: 156）。“A compound consists of at least two morphemes neither of which is an affix; ...” 《複合語は、接辞でない少なくとも二つの形態素からできている。》

二音節（ほぼ漢字二字に相当）の複合語、つまり二つの造語成分からできている複合語にかぎれば、それぞれの造語成分が自由形態素（擬似独立形式）か拘束形態素かによって、次の四パターンがある。例えば、などは、この規定に合う。一方、次の例はこの規定に合わない。

- (10) a. 猪肉 zhūròu 《イノシシの肉》、火车 huǒchē 《汽車》、爱人 àirén 《配偶者》、白菜 báicài 《白菜》  
b. 航道 hángdào 《航路》、牧草 mùcǎo 《牧草》、石油 shíyóu 《石油》、鲨鱼 shāyú 《サメ》  
c. 国家 guójiā 《国家》、记忆 jìyì 《記憶（している）》、深刻 shēnkè 《深い、本質に触れている》、  
強調 qiángdiào 《強調する》  
d. 基本 jīběn 《基本の》、日食 rìshí 《日食》、少年 shàonián 《少年》

(10a) は前部要素、後部要素ともに自由形態素である。(10b)は前部要素が拘束形態素、(10c) は後部要素が拘束形態素で、ともに結合相手は自由形態素である。(10d) は前部要素、後部要素ともに拘束形態素である。ふるい定義であれば、(10a)のみが複合語ということになる。しかし、(10b-d)は単純語や派生語とはみなせない。なぜなら、これらの語を構成する要素は、それぞれがほかのいろいろな要素と組み合わせられるからである。たとえば、“目 mù” という形態素は、“目光 mùguāng” 《視線、まなざし》、“双目 shuāngmù” 《両目》、“目击 mùjī” 《目撃する》、“目眩 mùxuàn” 《目がくらむ》といった語をつくる造語成分として機能する。(10d) の“基本”を構成する“基”と“本”はそれぞれ、“基础 jīchǔ” 《基礎》、“基地 jīdì” 《基地》、房基 fángjī 《家の土台》、路基 lùjī 《道路の基礎》；“本来 běnlái” 《本来、もともと》、“本质 běnzhì” 《本質、本性》、“根本 gēnběn” 《根本（的な／に）》、标本 biāoběn 《標本、サンプル》といった語を構成するのである。つまり、これらの語は少なくとも二つの形態素に分析でき、その形態素は一方が他方の語彙素を別の語彙素に変えるといった性質をもつもの（つまり、派生接辞）ではない。どちらの形態素も「語基」とでも称するしかないような形態素なのである。

したがって、(10b-d)を複合語と認めるかぎり、中国語の複合語は造語成分が自由形態素である必要はない。しかし、1.2.2.や前節でも見たのと同様に、中国語においても派生と複合の区別はそれほど明瞭ではない。両方とも、個々の結合相手（語幹あるいは接辞）にかなりの幅がある。かなり結合相手が制約されるもの（ほぼ、語彙的に決まっているもの）から、範疇と意味が許せばかなり自由に結合するものまである。しかし、複合の場合、語幹が語の内部で現れることのできる位置が自由である（ある語幹が前に置かれる語もあるし、後ろに置かれる語もある）のに対し、派生の場合、派生接辞が語幹の前に置かれるか後ろに置かれるかは、接辞ごとに指定されている。また、派生接辞は結合相手である語幹の品詞性（語彙範疇）も個別に指定されていることが多い。そして、単位の大きな（多くの形態素から成る独立形式に対応する）語幹につく形式は接辞とみなされやすい。このような形式は、表す意味がかなり具体的なものであっても、接辞とみなされることが多い。

朱德熙 (1982: 29) は、語の内部で置かれる位置が決まっている形態素（“定位语素”）を接辞とし、決まっていない形態素（“不定位语素”）を語根あるいは語幹としている。たとえば、(11) の“子 zǐ”は接辞であるが、“性 xìng” “式 shì” “自 zì”は接辞ではないとしている。

- (11) a. 桌子 zhuōzi 《机》、狮子 shīzi 《ライオン》、袖子 xiùzi 《そで》、刷子 shuāzi 《はけ、ブラシ》、  
孩子 háizi 《子供》
- b. 酸性 suānxìng 《酸性》、硬性 yìngxìng 《融通の利かない》、弹性 tángxìng 《弾力性》、可能性  
kěnéngxìng 《可能性》、积极性 jījìxìng 《積極的な》
- c. 新式 xīnshì 《新式である》、旧式 jiùshì 《古い形式》、蛙式 wāshì 《平泳ぎ》、手提式 shǒutíshì  
《ポータブル型》、噴气式 pēnqìshì 《ジェット式》
- d. 自动 zìdòng 《自発的である；自動的である》、自发 zìfā 《自発的である》、自杀 zìshā 《自殺す  
る》、自觉 zìjué 《自覚的である；主体的である》、自私 zìsī 《自分勝手である》

(11b, c) “性、式”は“性质 xìngzhì”《性質》、“性状 xìngzhuàng”《性状》、“性能 xìngnéng”《性能》、“式样 shìyàng”《デザイン、スタイル》、“式子 shìzi”《姿勢、構え；数式》のように前に置かれる語もある。また、(11d) “自”は“私自 sīzì”《勝手に、無断で》、“独自 dúzì”《ひとりで、単独で》、擅自 shànzhì 《勝手に、ほしいままに》のように後ろに置かれる語もある。つまり、語の内部での位置が固定していないのである。したがって、これらは派生語ではなく複合語である。

(11a) の“子”は、“子息 zǐxī”《跡取り》、“子弟 zǐdì”《子弟》などのようにいつけん前に来る場合もあるように見える。しかし、この“子 zǐ”と接辞の“子 zì”は異なる形態素である。接辞の“子”は声調を失い、軽声化を起こしている（早田 1999: 44）。

### 1.5. 複合語の語幹どうしの関係による分類

この節では、複合語を構成する語幹どうしの関係にもとづく、複合語の分類をみていく。ただし、本稿は中国語の複合語全体をあつかうものではない。動補型複合動詞が、中国語の複合語のなかでどのような位置をしめているかをしめすものとして分類を提示する。

朱德熙 (1982: 32-33)、刘等 (2001: 13-14) は、中国語における複合語の構造として、次の五つの型をあげている。1. 主述型“主谓式”、2. 動目型“述宾式”、3. 修飾型“偏正式”、4. 動補型“述补式”、5. 並列型“联合式”<sup>註6</sup>。前の語幹を X、後ろの語幹を Y とすると、X と Y の関係は、それぞれ次のようになっている。（以下の例語には、ほかの品詞をとるものもある。）

1. 主述型では、X と Y が主語と述語の関係になっている。この型には、複合語全体が名詞、動詞、形容詞になる語がある。次に例を挙げる。

<sup>註6</sup> ここに挙げている中国語名称は、朱德熙のものである。刘等 (2001)による用語は次のとおり（数字は朱と対応させている）。1. 主谓复合词、2. 动宾复合词、3. 偏正复合词、4. 动补复合词（补充式复合词、后补复合词）、5. 并列复合词（联合式复合词）。4.をさらに(1)結果動補复合词（結果補語）と(2)趋向動補复合词（方向補語）とに分けている。さらに、三つ以上の語幹からできている複合語を“复杂的复合词”（複雑な複合語）としている。

(12) 主述型

名詞：冬至 dōngzhì 《冬至》，霜降 shuāngjiàng 《霜降（二十四節気の一つ）》

動詞：地震 dìzhèn 《地震が起こる》，心疼 xīnténg 《可愛がる、惜しむ》，耳鳴 ěrmíng 《耳鳴りがする》，嘴硬 zuǐyìng 《強硬に言い張る（“嘴”＝口）》，例如 lǐrú 《たとえば～である》

形容詞：面熟 miànshóu 《面識がある》，年轻 niánqīng 《若い》，胆怯 dǎnquè 《臆病だ》，理亏 lǐkū 《理に欠ける》

2. 動目型では、X と Y が述語〔動詞〕と目的語の関係になっている。この型には、複合語全体が名詞、動詞、形容詞、副詞になる語がある。

(13) 動目型

名詞：主席 zhǔxí 《主席、議長》，将军 jiāngjūn 《將軍》，防风 fángfēng 《防風》

動詞：列席 lièxí 《列席する》，关心 guānxīn 《気遣う》，动员 dòngyuán 《動員する》，出版 chūbǎn 《出版する》，告别 gàobié 《別れを告げる》

形容詞：讨厌 tǎoyàn 《嫌いだ》，满意 mǎnyì 《満足な》，卫生 wèishēng 《衛生的である》，无聊 wúliáo 《退屈だ、つまらない》

副詞：到底 dàodǐ 《結局、つまり》，照旧 zhàojiù 《元どおり、従来どおり》

3. 修飾型では、X と Y が修飾語、被修飾語の関係になっている。この型には、複合語全体が名詞、動詞、形容詞、副詞、接続詞になる語がある。

(14) 修飾型

名詞：飞机 fēijī 《飛行機》，优点 yōudiǎn 《長所》，蛋白 dànbaí 《蛋白、白身》，意外 yìwài 《意外なこと》，纸张 zhǐzhāng 《紙類》

動詞：重视 zhòngshì 《重視する》，热爱 rè'ài 《熱愛する》，回忆 huíyì 《回顧する》，空袭 kōngxí 《空襲をかける》，中立 zhōnglì 《中立の立場をとる》

形容詞：自私 zìsī 《利己的だ、自分勝手だ》，冰凉 bīngliáng 《氷のように冷たい》，滚烫 gǔntàng 《やけどするほど熱い》

副詞：至少 zhìshǎo 《少なくとも》，未免 wèimiǎn 《～せずにはいられない》

接続詞：不但 búdàn 《～であるばかりでなく～》

4. 動補型では、X と Y が述語〔動詞〕と補語の関係になっている。この型には、複合語全体が動詞になる語しか属さない。

(15) 動補型

動詞：革新 géxīn 《革新する》，改良 gǎiliáng 《改良する》，证明 zhèngmíng 《証明する》，扩大 kuòdà 《拡大する》，降低 jiàngdī 《下げる》，推翻 tuīfān 《覆す》，削弱 xuēruò 《弱める》，扭转 niǔzhuǎn 《向きを変える》，记得 jìde 《覚えている》

5. 並列型では、意味的に何らかの関係（類義・対義等）にあるXとYが並列されている。この型には、複合語全体が名詞・動詞・形容詞・副詞・介詞（前置詞）・接続詞になる語がある。

(16) 並列型

名詞：音乐 yīnyuè 《音楽》，道路 dàolù 《みち》，买卖 mǎimai 《商売》，法律 fǎlǜ 《法律》

動詞：调查 diàochá 《調査する》，安慰 ānwèi 《慰める》，重叠 chóngdié 《重ねる》，可能 kěnéng 《～が可能である》

形容詞：奇怪 qíguài 《奇妙な、変な》，透彻 tòuchè 《徹底している》，光明 guāngmíng 《明るい、輝かしい》，特殊 tèshū 《特殊だ》

副詞：根本 gēnběn 《根っから、まったく》，千万 qiānwàn 《くれぐれも、ぜひとも》

介詞：自从 zìcóng 《～から、～以来》

接続詞：而且 érqiě 《さらに、そのうえ》，并且 bìngqiě 《そして、また》，因为 yīnwèi 《～なので》

この論文では、4. 動補型の複合動詞を研究の対象とする。藤堂・相原 (1985: 182-184) は、うへの分類のほかに「指さす構造と数える構造」「是否の構造」「存現構造」「量る構造（数量補語構造）」「認定する構造（能願動詞構造）」「介詞構造（介賓構造）」を認めている。ただし、これらは、XとYの意味統語的な関係による分類と、XとYそれぞれの品詞性による分類とが混在してしまっている。たとえば、「指さす構造と数える構造」は、XとYの品詞性がそれぞれ「数詞性+名詞性」あるいは「数詞性+類別詞（量詞）性」であることを理由とした分類である。XとYとの意味統語的な関係を基準とした分類では修飾型にふくまれるだろう。また、指示詞を語幹とする語は、“斯文 sīwén” 《礼儀正しい、優雅な》、“彼岸 bǐ'àn” 《向こう岸、彼岸》のような文語だけである。「是否の構造」は肯定、否定を表す副詞性語幹を前部要素として持つ語である。「存現構造」は統語レベルにおける存現文（存在や出現、消滅を表す「場所を表す句+述語+ものを表す名詞」という構造をもつ文）の構造を反映した語である。「量る構造（数量補語構造）」は統語レベルでの「動詞+数量補語」という構造を反映した語である。ただし、この構造を持った語は非常に少なく、“住九 zhùjiǔ” 《九日だけ泊まる→嫁が里帰りする》、“排九 páijiǔ” 《九つだけ並べる→ばくちの一種）くらいしかない（藤堂・相原 1985:183）。だから、この構造を認めること自体に疑問がある。「認定する構造（能願動詞構造）」は、統語レベルにおける「能願動詞+動詞・形容詞」構造を反映した構造を持つ語である。能願動詞は英語の法助動詞に似た範疇である。「介詞構造（介賓構造）」は「介詞+目的語名

詞」という句の構造を反映した語である。「介詞」は本稿で前置詞と呼んでいるものである。この構造を持った語もほとんど無い。藤堂・相原(1985)に挙げられているのも、“因此 yīncǐ”《このためと“于是 yúshì”《ここにおいて、そこで》の二語だけである。だから、「量る構造」と同様にこの「介詞構造」も〔下位〕範疇として認めるべきではないかもしれない。それぞれの構造を持つ語例を次に挙げる。

- (17) a. 指さす構造と数える構造……三国 sānguó 《三国(王朝)》、六朝 liùcháo 《六朝》、一样 yíyàng 《同じ》、两样 liǎngyàng 《違う》、一起 yìqǐ 《一緒》、一点儿 yìdiǎnr 《すこし》、一会儿 yìhuìr 《ある短い時間》、一些 yìxiē 《すこし、若干》
- b. 是否の構造……未来 wèilái 《未来、将来》、非法 fēifǎ 《違法、非合法》、非常 fēicháng 《特別に、非常に》、不平 bùpíng 《不満である、不服である》、不利 búlì 《不利である》
- c. 存現構造……立春 lìchūn 《立春〔になる〕》、退潮 tuìcháo 《潮が引く》、垮台 kuāttái 《瓦解する、崩壊する》、失火 shīhuǒ 《失火する》、丢脸 diūliǎn 《恥をかく、顔をつぶす》
- d. 認定する構造……当然 dāngrán 《そうあるべきだ→もちろん》、该死 gāisǐ 《死に損ないめ→やろうめ》、可见 kějiàn 《分かる》、可爱 kě'ài 《かわいい》、可怜 kělián 《かわいそう》

#### 1.6. V-V型複合動詞

この節では、語幹の品詞性に着目し、前部語幹と後部語幹がともに動詞性(あるいは形容詞性)を帯びている複合動詞を検討する。この複合動詞をV-V型複合動詞と呼び、前部語幹と後部語幹をそれぞれV1、V2と表記する。本稿で対象とする動補型複合動詞は、このV-V型複合動詞にふくまれる。前節でしめした前部語幹と後部語幹の意味統語的關係による分類は、「V-V型」のような語幹の品詞性による分類とは異なるレベルに属する。しかし、両者の分類が交差することはある。

V-V型複合動詞は、V1とV2の意味統語的關係からいくつかの下位分類することができる。たとえば、Li & Thompson (1981:54-70) は verbal compounds を大きく resultative verb compounds (RVC) と parallel verb compounds に分けている。RVC には本稿で言う動補型複合動詞といわゆる「動詞+方向補語」構造がふくまれる。この節では、前節における分類と同様に、V-V型複合動詞の前部語幹 V1 と後部語幹 V2 のあいだにある意味統語的關係を探っていく。V-V型複合動詞の語幹どうしの意味統語的關係は、次の三タイプに分けることができる。

- (a) 並列関係(聯合式)  
 (b) 修飾-被修飾の關係(偏正式)  
 (c) 動詞-補語の關係(動補式)

以下に、それぞれ詳しく述べていく。しかし、(a)並列関係と(b)修飾-被修飾の關係のどちらに所属させるか、あるいは(b)修飾-被修飾の關係と(c)動詞-補語の關係のどちらに所属させるかが分明でない語もある。したがって、この分類も厳格に範疇分けのできるようなものではない。

### 1.6.1. 並列関係

(a) の並列関係は、V1とV2が同じ資格で結合しているものである。同じ資格というのは、両者の品詞性も同じであり、意味として表している事象も範疇を同じくしているか、近似しているということである。このように似た意味の語に対応する語幹を並べるとき、声調の順に並べるのが中国語の生理に合う（古川編注 1997:3）。たとえば、《大声で叫ぶ》を意味する“呼 hū” “喊 hǎn” “叫 jiào” を相互に組み合わせて“呼喊 hūhǎn” “呼叫 hūjiào” “喊叫 hǎnjiào” “叫喊 jiàohǎn” などの二音節動詞がつくられる。このような並列関係を持つ語には次のようなものがある（Li & Thompson 1981:69-70）。

(18) 建筑 qiǎnzù 《建築する》、迁移 qiānyí 《移動する、転居する》、疑惑 yíhuò 《いぶかる、疑う》、归回 guīhuí 《帰る、戻る》、防守 fángshǒu 《防備する、防衛する》、检查 jiǎnchá 《調べる、点検する》、摩擦 mócā 《こする》、帮助/辅助 bāngzhù/fúzhù 《援助する、助ける》、治疗 zhìliáo 《治療する》、崇拜 chóngbài 《崇拜する》、漂流 piāoliú 《漂流する》、放弃 fàngqì 《放棄する》、分散 fēnsàn 《分散する》、扶养 fúyǎng 《扶養する》、替换 tìhuàn 《～と交替する》

### 1.6.2. 修飾－被修飾の関係

(b) の修飾－被修飾の関係は、V1の対応する事象がV2の対応する事象を、なんらかの意味で説明、限定、描写しているものである。“倾听 qīngtīng” 《傾聴する》の場合、前部要素である“傾”の表す事象（耳を傾ける）が後部要素“听”の表す事象（聞く）における主体の様態を表している。たとえば、Packard (2000:94-95) には、V1がV2を修飾している語構成を持つ複合動詞として次の語が挙げられている。

(19) 调动 diàodòng 《移動させる（移す+動く）》、订购 dìnggòu 《発注する（注文する+買う）》、抖动 dǒudòng 《揺れる、震える（震える+動く）》、堆放 duīfàng 《積み重ねる（積む+置く）》、夺取 duóqǔ 《奪い取る（奪う+取る）》、仿造 fǎngzào 《模造する（まねる+つくる）》、飞行 fēixíng 《飛行する（飛ぶ+行く）》、喊叫 hǎnjiào 《叫ぶ（叫ぶ+呼ぶ）》、护送 hùsòng 《護送する（守る+送る）》、探问 tànwèn 《打診する、探りを入れる（探る+問う）》

しかし、“调动”や“抖动”は動補型（動詞－補語の関係）である可能性もある。“调动”は《移した結果として動く》、“抖动”は《震える結果として動く》とも解釈できるわけである。また、“喊叫”の場合、“叫”には《大声で叫ぶ》という意味も《呼ぶ》という意味もある。だから、“叫”を《大声で叫ぶ》という意味にとれば、上で挙げたように並列関係とも解釈できるのである。

### 1.6.3. 動詞－補語の関係

「補語」（V2）の表す意味は多様である。そして、V2が表す意味を、V2になる語自体の具体的な意味から区別して記述することもかなり難しい。V1とV2の結合度が強くなればなるほど、V2自体の意味というも

のは希薄になっていく。つまり、V1+V2全体がひとつの意味を担っているように見えるのである。意味の融合度が高いと言ってもいい。ここには、従来の中国語学で、動補式の複合動詞（合成動詞）と呼ばれていたもの、「動詞+結果補語」型のフレーズと呼ばれていたものがともにふくまれている。伝統的な中国語文法、たとえば呂叔湘(1999 [1980]:16-17)では、動詞は動詞句（“*动词短语*”）をつくる連帯成分を持つと述べる。その連帯成分には賓語（目的語）、補語、状語（連用修飾語）が挙げられている。そして、とりわけ言及が必要とされる動詞句に“*趋向式*”と“*动结式*”とがある。“*趋向式*”は主要動詞の後ろに動作の向かう方向を表す動詞を置いた句であり、“*动结式*”は主要動詞の後ろに動作の結果を表す形容詞や動詞を置いた句である。“*动结式*”の句について呂叔湘は、時にある“*动结式*”動詞は臨時に結合する性質を持ち、目的語無しでは全体で一つのまとまった意味を形成し得ないと言う。たとえば、“*笑断了肚肠 xiàoduànle dùcháng*”《笑って腹がよじれる》、“*吓破了胆 xiàpòle dǎn*”《びっくりして肝がつぶれた》、“*踏破铁鞋无觅处 tàpò tiěxié wúmìchù*”《いくら探してもみつからない》などである。しかし、これらの例はみな慣用的に固定した表現であり、「臨時」とするのは妥当ではない。

このような「動詞-補語の関係」の形式を語であるとみなす根拠として、望月(1990a)は次の四つを挙げている<sup>注7</sup>。(a) 自動詞どうしが結合してできた V1+V2 が他動詞のように目的語をとることができる。(b) V1が他動詞のとき、V1の目的語が、V1の直後ではなくV2の後ろに現れる。つまり、V1+V2 がひとつのかたまりであり、その後ろに目的語が現れていると考えられる（望月はこのことをGB理論における「隣接の条件 (Adjacency Condition)」として説明している）。(c) V1の前に現れる否定の副詞が意味上否定するのはV2が表す事象である。(d) 受身文において、意味と構造のミスマッチが起こる。

(a) では次のような例が挙げられている (p.23)<sup>注8</sup>。

(20) 我 喊哑 嗓子 了  
 wǒ hǎnyǎ sǎngzi le  
 私 叫ぶ+かれる のど 終助詞  
 私は叫びすぎてのどがかれた

(21) 胖子 坐塌了 椅子  
 pàngzi zuòtāle yǐzi  
 ふとっちょ 座る+つぶれる-pfv 椅子  
 太っちょが座って椅子が壊れてしまった

(b) は、たとえば“*喝醉了酒 hēzuìle jiǔ 飲む+酔う-pfv 酒*”《酒に酔う》という表現を“\**喝酒醉了*”と言えないことから分かる。V1とV2のあいだにV1の目的語を入れることができない。V1とV2の結合度はそれだけ強いのであり、V1+V2が「動詞連続構文 (serial verb construction)」などではないことが分かるだろう（広東語の動詞連続構文については Matthews 2006 を参照）。

(c) が述べているのは、否定の副詞“*不 bù*”や“*没 méi*”の否定のスコープに関してである。望月は次の例を挙げている (p.24)。

<sup>注7</sup> 望月は、V1が目的格を付与しているという推測に対しての反論として、四つの点を挙げている。つまり、格付与しているのは、V1ではなく、V1+V2の全体であり、V1とV2はそれぞれが独立した（格を与え得る）動詞ではないという主張をしているのである。

<sup>注8</sup> ただし、(20)のV1“*喊*”を自動詞（一項動詞）とするのには疑問を覚える。“*喊口号 hǎn kǒuhào*”《スローガンを叫ぶ》や、やや慣用的だが“*喊嗓子 hǎn sǎngzi*”《大声を上げる、のど慣らしをする》といった表現もできるからである。

(22) 我 没有 走累

wǒ méiyǒu zǒulèi  
私 ~ていない 歩く+疲れる  
私は歩き疲れていない

(23) 他 没 喝醉 酒

tā méi hēzùi jiǔ  
彼 ~していない 飲む+酔う 酒  
彼は酒を飲んでも酔わなかった

(22)で“没有”が否定しているのは、“累”が表す事象であり“走”が表す事象ではない。つまり、《疲れていない》のであり、《歩いていない》のではないのである。歩いてはいるけれども疲れていないという事象を表している。(23)も同様に“没”が否定しているのは“醉”が表す事象であり、“喝”が表す事象ではない。もし否定を表す副詞が“走”や“喝”を否定できるとすると、「内部への修飾の不可」制約（第三章参照）に抵触し、V1+V2は語ではなく句であるということになる。しかし、実際には語内部の要素、つまりV1への修飾は許されない。それでは、なぜV2の表す事象は否定できるのか。それは、結局のところ、“走累”の表す事象は《疲れている》ということであり、“喝醉”の表す事象は《酔っている》ということなので、V1+V2全体の表す事象がV2の表す事象と合致するためである。だから、否定を表す副詞がいつけんV2を否定しているように見えても、それはV1+V2全体を否定しているのである。したがって、V1+V2が語であるという仮定を崩す事実ではない。むしろ、V1+V2が語であるという仮定を支持する事実である。

(d)の受身文の構造と意味のミスマッチというのは、次の例でしめされるような事実である。

(24) 李四 被 张三 打倒了

lǐsì bèi zhāngsān dǎdǎole  
李四 ~される 张三 殴る+倒れる-pfv  
李四が张三に殴り倒された

V1“打”の表す事象の動作主体は“张三”であり、対象は“李四”である。一方、V2“倒”の表す事象の変化の主体は“李四”である。もし、V1とV2が独立した動詞であり、V1とV2の結びつきが句レベルのものであるとすると、受身の意味が与えられるのは、二つの参与者（主体と対象）を持つ“打”《殴る》だけである。しかし、文全体の意味には、“倒”の有責者が“张三”であることも含意されている。つまり、《张三に倒された》という意味もふくまれているのである。これは“打倒”全体に受身の意味が付与されていることをしめしている。したがって、“打倒”は一語と認められる。

以上のような(a)~(d)の現象は原則としてすべてのV1+V2にあてはまる。ただし、従来、複合動詞と呼ばれていたものと、フレーズと呼ばれていたもののあいだには、たしかに構成要素間の結合度と意味の融合度とにおいて違いが見られる。傾向としては、結合度の高い形式においては、その構成要素間の意味関係にはさまざまな多様性がある。結合度が弱くなり構成要素の独立性が高くなればなるほど、その構成要素間の意味関係は一定していく。これは日本語のV-V型複合動詞にも言われている（影山 1993:78）。形式的には、V1とV2のあいだに“-得-”や“-不-”といった接中辞をはさみ、“V1-得-V2”“V1-不-V2”という形でそれぞれ《~できる》《~できない》という意味を表す従来「可能補語」と呼ばれていた形式をとること

ができるかどうかによって、結合度を判定することができる<sup>注9</sup>。“V1-得-V2”“V1-不-V2”は派生形式ではあるものの、これらの接中辞を（意味的には挿入できそうなのに）いっさい挿入できない形式があることから結合度に差があることがわかる。朱徳熙(1982:126)は、接中辞の挿入ができない形式を動補型複合語（“述補复合词”）とし、挿入可能な形式を動補構造（“述补构造”=句）としている。香坂(1983:33-34)は、接中辞が挿入できない形式を「非離合動詞」と呼び、挿入ができる「離合動詞」と区別している<sup>注10</sup>。そして、「非離合動詞」をさらに、それぞれの語幹（V1、V2）が単独で用いることが可能かどうか、つまり擬似独立形式（自由形態素）かどうかによって三つのタイプに分けている。（「語素」とは形態素のことである。）

(25) a. いずれの語素もともに単語としての働きを失っているもの。これは一つの単語であることは疑いない。

声明 shēngmíng 《声明する》、证实 zhèngshí 《証拠立てる》、表露 biǎolù 《流露する》、肃清 sùqīng 《肃清する》、拒绝 jùjué 《拒絶する》、介入 jièrù 《介入する》、贯彻 guànchè 《つらぬき通る》

b. いずれか一つの語素が単語としての働きを保っているもの。一般に分離することはない。

说明 shuōmíng 《説明する、了解させる》、矫正 jiǎozhèng 《矯正する》、改善 gǎishàn 《改善する》、充满 chōngmǎn 《充滿させる》、突出 tūchū 《きわだたせる》、斥退 chītù 《大声で退出させる》、更新 gēngxīn 《改め新しくする》、征服 zhēngfú 《征服する》、造就 zàojiù 《つくりあげる》

c. いずれの語素ともに単語としての働きがあるもの。

减轻 jiǎnqīng 《減らす、軽減する》、拆穿 chāichuān 《秘密・真相などをあばく》、串通 chuàntōng 《ぐるになる》、推动 tuīdòng 《前進を促す》、冲淡 chōngdàn 《液体を注ぎうすめる》、拉拢 lālǒng 《ひきつける、自分の側に近づける》、降低 jiàngdī 《温度・価格などを低くする》、压缩 yāsuō 《圧縮する》、保全 bǎoquán 《完全に保つ》、提高 tígāo 《高くする、向上させる》

ただし、構成要素の独立度が高い c. に属する語のすべてにおいて“V1-得-V2”“V1-不-V2”の形式が可能であるわけではない。それが可能であるのは、“拆穿”だけである。

### 1.7. 動補型複合動詞の分類

このように動補型の複合動詞には、その構成要素の結合度の強さに幅がある。ここでは、動補型複合動詞をその構成要素間の結合度の強さによって便宜的に三タイプに分ける。この分類は便宜的なものであり、その境界はあいまいであることが多い。

(a) A類：完全に語彙化され、辞書（レキシコン）に登録されている複合動詞。V1とV2との結合の度合いが最も強く、あいだにいかなる要素の挿入も許さない。意味の透明度も語によって差があり、意

<sup>注9</sup> 「可能補語」については、杉村(1992)などを参照。

<sup>注10</sup> ここで香坂が述べている「離合動詞」は、「動詞+目的語」型の複合語における離合動詞とは別のものである。

味の透明度が非常に低く、独自の慣用的な意味を持っている場合もある。

- (b) B類：A類よりも生産性が高く、意味の透明度も高い。V1とV2との結合の度合いは多少ゆるくなるが、それでも語としての資格は持っている（屈折辞の挿入を許さない、など）。
- (c) C類：さらに生産性が高く、V2は付属語に近くなっている（ただし、意味的には実質的なものよりも文法的な意味をになっている）。したがって、意味の透明度も高い。V1とV2との結合の度合いは、B類よりもさらにゆるくなっている。しかし、語ではある。

以下に詳しく論じる。

### 1.7.1. A類

V1とV2の結合の度合いが最も強く、完全に語彙化されている。もちろん、形態的緊密度の基準から、V1+V2が語であることは証明できる（第三章参照）。A類をほかの類から区別する特徴としては、“得 -de-”と“不 -bu-”をV1とV2のあいだに置いて、“V1-得-V2”《～できる》、“V1-不-V2”《～できない》という形をつくることができないことである。また、V1かV2のどちらか、あるいは両方が拘束形態素であれば、それはA類である（しかし、すべてのA類のどちらかの要素が必ず拘束形態素であるとはかぎらない。）。V1とV2とのA類に属する複合動詞には、次のようなものがある。

- (26) 撞伤 zhuàngshāng 《ぶつかって怪我をする》、闹翻 nàofān 《けんかして仲違いする》、住满 zhùmǎn 《～いっぱいに住む》、延长 yáncháng 《延長する》、缩短 suōduǎn 《短縮する》、扩大 kuòdà 《拡大する》、推广 tuīguǎng 《押し広める、普及させる》、提早 tízǎo 《（時間・時期を）繰り上げる》、看轻 kànqīng 《軽視する》、耐久 nàijiǔ 《長持ちする》<sup>注11</sup>、改善 gǎishàn 《改善する》、改良 gǎiliáng 《改良する》、打倒 dǎdǎo 《打倒する》<sup>注12</sup>、推迟 tuīchí 《遅らせる、延ばす》

### 1.7.2. B類

一般に「動詞+結果補語」構造あるいは動補型複合動詞として研究されているものは、このB類とC類に属する動詞である。B類・C類はその構成要素（V1・V2）がともに自由形態素（擬似独立形式）である。V2になることのできる形式（動詞性語幹、形容詞性語幹）はある閉じた範疇をつくっていると考えられている。つまり、V2になることのできる、ある一定の数の動詞と形容詞が決まっていると考えられているのである。このV2を、伝統的な中国語文法では「結果補語」と呼んでいる。その範疇に所属する形式は、意味が許せばかなり自由にV1をとることができる。そして、V1とV2のあいだに“得”や“不”を入れることができる（ただし、意味的な理由から“得”か“不”かのどちらかと結合できないということがあつた）。ただし、屈折接辞“了”“过”“着”をV1と直接結合させることができない（つまり、V1とV2のあいだに割り込ませることができない）ので、V1+V2は語としてのまとまりは保持している。

B類に属する複合動詞には、次のようなものがある。

<sup>注11</sup> この語の品詞は形容詞である。

<sup>注12</sup> B類の“打倒”《殴って倒す、（球技などで球を）打って／投げて倒す》とは異なる。

- (27) 冲破 chōngpò 《突き破る》、惊醒 jīngxǐng 《驚いて目を覚ます》、吓哭 xiàkū 《驚いて泣く》、打死 dǎsǐ 《殴り殺す》、推翻 tuīfān 《ひっくり返す》、保全 bǎoquán 《守る、保全する》、绷直 bēngzhí 《まっすぐに引っ張る》、扳倒 bāndǎo 《引っ張って倒す》、驳倒 bódao 《論破する、言い負かす》、吃透 chītòu 《深く理解する》、刺穿 cìchuān 《突き通す、刺し貫く》

### 1.7.3. C類

C類のV2になる形式は、B類よりもさらに閉じた範疇をつくっている。V1とV2の結合度はさらに弱く、独立性が高くなっている。しかし、具体的な意味が失われ、アスペクト的な意味を担っている。形式的には独立性が高いにもかかわらず、実質的な内容が失われ機能的・文法的な内容を帯びているのである。付属語に近くなっている。B類と異なり、“那么 做+V2”《そうし〜》という形が可能である。B類では、“打死 dǎsǐ”《殴り殺す》に対して“\*那么做死 nàme zuòsǐ”《そうし殺す》という形が不可能である。しかし、C類では“写完 xiěwán”《書き終わる》に対して“那么做完 nàme zuòwán”《そうし終わる》、“住惯 zhùwán”《住み慣れる》に対して“那么做惯 nàme zuòguàn”《そうし慣れる》、“吃光 chīguāng”《食べきる》に対して“那么做光 nàme zuòguāng”《そうしきる》のような形が可能である（邓超群 2006）<sup>注13</sup>。ただし、この邓の提示した基準は意味的な制約が強く、意味的にC類になり得そうなV2をも排除してしまう。アスペクト的な意味を表すもの、多くのV1につく生産性の高いV2がC類を形成すると言える。C類に属する複合語をつくるV2には、次のようなものがある。

- (28) 到 dào 《到着する、到達する、達成する》、好 hǎo 《達成する、うまく〜し遂げる》、成 chéng 《成功する、完遂する、〜に変わる》、完 wán 《終わる、尽きる》、开 kāi 《〜になり始める》、住 zhù 《しっかりと固定する》

### 1.8. 中国語における非対格性

この節では、中国語の自動詞がさらに二つに分けられることを論じる。これは、「非対格性の仮説」にもとづく分類である。非対格性の仮説とは、〈非対格自動詞の主語が統語構造（D構造）においては目的語位置に存在する〉というものである。ただし、非対格性は統語的に具現されるが、その本質は意味的なものである（影山 1996:20）。非能格自動詞が動作主と経験主を主語にとる意図的な動作・行為を意味として表す動詞と生理現象を意味する動詞であるのに対して、非対格自動詞は対象を主語にとる、何らかの意味で変化や変化の結果の状態を表す動詞である。そして、この変化は非意図的にもたらされるとされる。中国語の自動詞も非対格自動詞と非能格自動詞に二分できる統語的・意味的な証拠があるとされる。中国語の非対格性を論じた先行研究としては、望月 (1992) と秋山 (1996) がある。ここではまず、これらの先行研究において示された根拠を概観する。中国語の動補型複合動詞において、後部語幹（V2）が非対格性を帯びている（非対格自動詞である）という主張がある。V2に対応する動詞としては、次のようなものがある。

<sup>注13</sup> ただし、私のインフォーマントによると、“那么做完”という言い方はできないそうである。ただし、単に“做完”という言い方はできるそうである。ただし、“做光”という言い方はできないそうである。

(29) 病 bìng 《病気になる》、穿 chuān 《貫く、見通す》、倒 dào 《逆さまになる》、掉 diào 《無くなる、離れる》、丟 diū 《無くなる》、動 dòng 《動く、考えが変わる》、懂 dǒng 《理解する》、翻 fān 《ひっくり返る、仲違いする》、反 fǎn 《逆になる、裏返しになる》、瘋 fēng 《気が狂っている、正気でない》、会 huì 《熟達している》、活 huó 《生きている、生き生きしている》、见 jiàn 《何かが認知される》、跑 pǎo 《逃げる、漏れる、抜ける》、破 pò 《破れる、壊れる、壊れるほど～》、剩下 shèngxià 《残る》、死 sǐ 《死ぬ、固定している、ひどく～だ》、通 tōng 《通る、通じる》、透 tòu 《液体・光・風などが通る、すっかり～》、为 wéi 《～に変わる》、着 zháo 《達成する、役に立つ、陥る》、走 zǒu 《～から離れる》、做/作 zuò 《～のふりをする、装う》

このほかに形容詞の多くがV2になることができる。ここに挙げられたものは、たしかに無意図の変化や状態といった事象に対応する動詞である。また、語として使われる際には意図的な動作を意味する形式でも、V2として使われる場合には（付属形式としては）、変化・状態を表す形式もある。たとえば、“走”は語として用いられる際には《歩く》という意味であるし、語として用いられる“跑”は《走る》という意味である。なぜ、このような意味の変化が生じるのか。それはV1+V2という形式の型はめを受けるからである。つまり、V1+V2（動補型複合動詞）といういわば結合の型に与えられた意味があり、具体的な語幹の意味は、その結合の型の意味から影響を受けるのである。この場合、V2には《対象の変化やその変化によって生じた状態》とでも言うべき意味があり、その意味がV2となった“走”“跑”の意味を変容させるのである。いったん語として成立し、語彙項目（辞書、レキシコン）に登録されてしまえば、語全体の意味によって伝達活動が行われればいいのであり、構成要素である形態素（“-走”“-跑”）の意味が、対応する語（“走”“跑”）の意味とかけ離れてしまっても不都合はない。ただし、コミュニケーションの都合上、かけ離れるといっても、対応する語との類似性が損なわれるほどに違ってしまうことはないだろう。だから、厳密に言えば、語レベルにおける非対格性と語の内部のレベルにおける非対格性とは異なるはずである。ここでは、V1+V2のV2は意味上、非対格性を持つということを前提とした上で、語のレベルにおいても非対格性が存在すると主張する先行研究を検討する。

### 1.8.1. 形態論的根拠：N-V 型複合語と V-N 型複合語

望月 (1992) は、まず中国語の非対格性（望月は「能格性」と言っている）に対する形態論的な根拠を挙げている。N-V 型複合語（主述型）と V-N 型複合語（動目型）の語幹（N, V）どうしの関係がどうなっているかを示しているのである（望月 1992:54）。

#### N-V 型複合語

(30) N-V が「主語+自動詞」である例

地震 dìzhèn 《地震（地面+震える）》、日没 rìmò 《日没（日+没する）》

(31) N-V が「主語+他動詞」である例

国营 guóyíng 《国营の（国+営む）》

## V-N 型複合語

(32) V-N が「自動詞+主語」である例

开花 kāihuā 《開花する（咲く+花）》、出血 chūxiě 《出血する（出る+血）》、落雷 luòléi 《落雷（落ちる+雷）》

(33) V-N が「他動詞+目的語」である例

读书 dúshū 《読書する（読む+本）》、犯罪 fànzuì 《罪を犯す（犯す+罪）》

N-V 型にしても、V-N 型にしても、語幹どうしが主語と自動詞の関係になっているものは、主語が無意志・無生物である自然現象を表すものがほとんどである。有生物の意志的な動作を表すものは不可能である。また、N-V 型において「主語+他動詞」の関係にあるものもわずかしかない。この事実も、複合語形成の際に、動詞とまず結び付くのが目的語（内項）であることを示している。

### 1.8.2. 統語論的根拠 1：能格動詞

望月 (1992) も秋山 (1996) も、呂叔湘 (1987) で扱われている現象を引き合いに出して、中国語にも非対格動詞と非能格動詞の区別があるということを主張している。望月によると、呂叔湘 (1987) が示している文は、次のようなものである。

(34) a. 中国 女篮 大胜 南朝鲜 队

zhōngguó nǚlán dà shèng náncháo xiǎn duì  
中国 女子バスケット 大いに 勝つ 韓国 チーム  
中国女子バスケット・チームが韓国チームに大勝した

b. 中国 女篮 大败 南朝鲜 队

zhōngguó nǚlán dà bài náncháo xiǎn duì  
中国 女子バスケット 大いに 負かす 韓国 チーム  
中国女子バスケット・チームが韓国チームを大いに負かした

この二つの文を、指し示している事態を変えずに自動詞文にすると、次のようになる。

(35) a. 中国女篮大胜 《中国女子バスケット・チームが大勝した》

b. 南朝鲜队大败 《韓国チームが大敗した》

(35a, b) は、それぞれ主語になる名詞句に違いが出てくる。(34a, b)において述語“勝”“敗”の主語“中国女篮”が持っている意味役割は〈動作主〉であり、目的語“南朝鲜队”が持っている意味役割は〈対象〉である。つまり、自動詞“勝”は〈動作主〉を主語にとり、自動詞“敗”は〈対象〉を主語にとっているのである。この事実から、秋山は“敗”を「非対格自動詞」だとする趣旨を述べている。そして、この種の自他両用動詞として次のような語を挙げている（秋山 1986:31）。

(36) (打) 开 (dǎ) kāi 《開ける／開く》、关 (上) guān (shàng) 《閉める／閉まる》、摇动 yáodòng 《揺ら

す／揺れる》、动摇 dòngyáo 《動揺させる／動揺する》、绿化 lǜhuà 《緑化する》、端正 duānzhèng 《正す／正しくなる》、繁荣 fánróng 《繁榮させる／繁榮する》、明确 míngquè 《明確にする／明確である》……

秋山は、これらの語に対して、他動詞のときを「使役用法」、自動詞のときを「起動用法」だとしている。これに対して、（中国語を対象としているわけではないが）このような自他両用の動詞を「能格動詞」と呼び、純粋な非対格動詞と区別すべきだという意見もある（影山 1996: 139-178）。中国語にも能格動詞と非対格動詞を区別すべき根拠がある。たとえば、“折”という字で表される二つの形式 zhé と shé である。zhé は《折る》という意味であり、“他折了一枝櫻花 tā zhéle yìzhī yīnghuā” 《彼は桜を一枝折った》という文のように使われる。shé は《棒・枝などが折れる、ロープなどが切れる》という意味であり、“树枝折了 shùzhī shéle” 《枝が折れた》、“绳子折了 shéngzi shéle” 《縄が切れた》というように使われる。この shé は非対格自動詞専用の形式としてよい<sup>註14</sup>。したがって、このような自他両用動詞の存在だけでは、非対格自動詞が存在する根拠にはならない。

### 1.8.3. 統語論的根拠 2：存現文

中国語には、事物の存在や出現・消滅を意味として表す構文がある。その構文を中国語学では「存現文」と呼んでいる。望月は、この存現文の存在が、中国語の「能格性」（非対格性）を表しているという趣旨を述べている。例えば、次のような文である（望月 1992:62）。

(37) a. 他 来了

tā lái le

彼 来る-pfv

彼が来た（普通の自動詞文）

b. （昨天／前边） 来了 一个 人

zuótiān/qiánbiān lái le yí ge rén

昨日／前に 来る-pfv 一 類別詞 人

（昨日／前に）誰か人が来た（存現文）

通常の文 (37a) では、述語が唯一とる項は述語の前に置かれる。しかし、存現文 (37b) では、述語の唯一項は述語の後ろに置かれている。すべての自動詞が (37b) のような構文をとれるわけではない。だから、この構文をとれる動詞か、とれない動詞かで自動詞を分けられるのである。これは英語における There 構文に対する影山 (1996:16-18) の分析と同じように考えることができる。つまり、この存現文に用いることのできる動詞が非対格自動詞である（ただし、存現文に用いられないからといって非対格自動詞ではないということにはならない）。また、意図的な動作を表す動詞であっても、継続相を表す接辞“-着”と結合する

<sup>註14</sup> 同様の例として、“转”という字で表される zhuǎn 《回す》と zhuàn 《回る》、“倒”という字で表される dào 《倒す》と dǎo 《倒れる》がある（望月 1992:60）。

ことで存現文に使えるようになる。このとき、“～着”は、《動作完成後の状態が残存している》という意味を表す（“站着 zhànzhē”《立っている》、“坐着 zuòzhē”《座っている》、“搁着 gēzhē”《置いてある》、“写着 xiězhē”《書いてある》）。つまり、非対格自動詞が表す意味と存現文の表す意味の親和性の問題であり、存現文が統語的に非対格自動詞を要求するというわけではないのである。それでも、非対格自動詞は“～了”という形で（“～着”という形をとらずとも）存現文の述語として用いることができるということと言える。

#### 1.8.4. 統語論的根拠3：疑似他動詞（半存現文）

望月が「半存現文」と呼ぶ構文がある。（秋山は湯廷池(1992)から「疑似他動詞」として紹介している。例文は秋山(1996:31-32)。)

(38) a. 张三 死了 父亲  
 zhāngsān sǐle fùqin  
 张三 死ぬ-pfv 父親  
 张三が父親に死なれた

b. 父亲 死了  
 fùqin sǐle  
 父親 死ぬ-pfv  
 父親が死んだ

(39) a. 小明 断了 腿了  
 xiǎomíng duànle tuǐ le  
 明君 折れる-pfv 足 終助詞  
 明君が脚を折った

b. 小明 的腿断了。  
 xiǎomíng de tuǐ duànle  
 明君 の 足 折れる-pfv  
 明くんの脚が折れた

(38a)(39a)の述語の後ろに置かれた“父亲”“腿”が表す事象は、述語（“死了”“断了”）の表す事象の影響を直接受けたものを表している。いっぽう、述語の前に置かれた“张三”“小明”は、動詞句（“死了父亲”“断了腿了”）が表す事象の影響を受けたものを表している。(38b)(39b)において、述語の前に置かれた“父亲”“小明的腿”も述語の表す事象の影響を直接受けたものを表している。これは、(29a)(30a)の動詞句における動詞の表す事象と名詞の表す事象との関係と同じである。したがって、(a)の文と(b)の文との関係は、自他両用動詞を述語として用いた他動詞文と自動詞文の関係に等しい。ただし、この種の文における「主語」（述語の前に置かれる名詞句）と「目的語」（述語の後ろに置かれる名詞句）のそれぞれが表す事象のあいだには、全体と部分とでも言える関係がある。あるいは譲渡不可能所有の所有者と所有物の関係と言ってもいい。つまり、人とその身体部分であったり、人とその親族であったりするるのである。このような制約のために、「疑似他動詞」と「疑似」の名が冠されているのである。あるいは、変化の対象を表

す“〔张三的〕父亲”“小明的腿”のうちの半分（“父亲”、“腿”）が動詞の後ろに置かれるので、「半存現文」と「半」の名を冠されて呼ばれるのである。このように、ある事象の影響を受ける対象を、その全体と部分とに分け、それぞれ述語の前（文頭）と後ろに配する構文は、被動文（受身文）や“把”構文にも見られる。これらの構文の述語に用いられる動詞に共通する意味は、《対象に変化を生じさせる動作》とか《変化の後の状態》といったものである。半存現文には非対格自動詞が馴染むし、被動文や“把”構文は動補型複合動詞と親和性がある。そして、動補型複合動詞において、対象の状態変化や結果状態といった事象に対応しているのは非対格自動詞と類似性を持つV2なのである。半存現文と被動文・“把”構文との違いは、被動文・“把”構文において主体の意図的動作という事象に対応しているV1が半存現文の述語には無いということである。

## 第二章 先行研究

### 2.1. 動補型複合動詞の先行研究

この章では、動補型複合動詞 (V1+V2) に関して、これまで行われてきた研究を概観する。これまでの研究では、私が前章で示したように、A、B、C各類へ動補型複合動詞を分類するというようなことは、ほとんど行われてこなかった。したがって、以下に概観する研究においても、さまざまな階層の複合動詞が一緒にされて分析されている場合がある。その都度、記してある。また、従来の研究において動補型複合動詞は異なった呼ばれ方をされてきた。呼称の違いは、分析された構造の違いを反映している。例えば、“動補結構” (呂叔湘 1986)、“動結式 [述補] 短语” (詹人凤 1989、王红旗 1993)、“V-R 谓语句” (黄锦章 1993) という呼称は、この形式を複合動詞ではなく、句 (phrase、“短语”) と分析していることを示している。ここでは、当該の形式を、その研究において句であるとみなしていても、一律に「動補型複合動詞」と呼ぶことにする。

動補型複合動詞の研究は、かなり古くから行われている。今井 (1985) では、王力 (1943-44, 44-45)、C. E. ヤーホントフ (Яахонтох 1957)、赵元任 (1965)、余霽芹 (1966, 1971)、李临定 (1980, 1984)、朱德熙 (1982) による記述をまとめている。本稿では、李临定 (1980) 以降の研究を概観する。李临定 (1980) が動補型複合動詞の型を (欠けているものはあるにせよ) はじめて網羅的に記述し、それ以降さまざまな理論的枠組みによる分析がなされるようになったからである。したがって、以下の諸節では分析手法別に先行研究を概観している。しかし、それはおおむね年代順にもなっている。

### 2.2. 意味関係による分析

ここであつかう三者 (李临定 1980、今井 1985、呂叔湘 1986) を、秋山 (1998: 32) は「様々に表された意味に着目した分析」、石村 (2000: 143) は「語義指向に基づく分析」とまとめている。しかし、この三者の研究をこのようにまとめるのは、不適切であろう。今井論文は、あくまで「統辞法」を分析しているのである。また、李論文も、動補型複合動詞を、それがとる構文や統語的基準によって (もちろん、意味的な基準も用いてはいるが) 型に分けている。なお、この三者は、当該の形式を (統語構造を持つ) 句であると考えている。

#### 2.2.1. 李临定 (1980)

李 (1980) は、V1+V2を述語に用いる文を形式、意味、機能 (文型の変換) の面から分類している。形式面からの分類は、次の通りである。(見やすいように、V1+V2は { } でくくっておく。)

- (1) a. 主語+{V1+V2}
- b. 主語+V1+目的語+{V1+V2}
- c. 主語+V1+目的語
- d. 主語+V1+目的語1+{V1+V2}+目的語2

e. 主語+“把”+目的語1+{V1+V2}+目的語2

李は、文成分（主語、目的語1、目的語2）とV1、V2（李は“C”と表記している）との意味関係（“表  
達”）、およびこれらの構文がほかの構文に変換できるかどうかを分類の基準としている。意味関係から、  
(1a)を三類、(1b)を三類、(1c)を五類、(1d)(1e)をそれぞれ二類に分けている。ほかの構文への変換の基準を  
挙げると次のようになる。

- (2) a. いわゆる“把字句”……前置詞“把 bǎ”《～を》によって動作の対象を V1+V2 の前に置く構文に  
「変形」できるか。  
b. いわゆる“被字句”……前置詞“被 bèi, 让 ràng, 叫 jiào”《～に～される》によってV1の動作主  
を V1+V2 の前に置き、受身の意味を表す文に「変形」できるか。  
c. いわゆる“得字句(1)(2)”……V1の後ろに“-得 -de”をつけて、V1を非述語化した構文（V1の表す  
事象の程度や結果を表す要素を導く。）に「変形」できるか<sup>注15</sup>。(1)というのは“V1-得”の後ろに  
名詞句を挟み込めないタイプ。(2)は名詞句が挟み込めるタイプ<sup>注16</sup>。

意味関係の面からは、どのような分類がされているのだろうか。(1a)“主語+{V1+V2}”を例にして見て  
みよう。これは、V1+V2がひとつの項を持っている構文である。唯一項（主語）とV1、V2との論理的意味  
（“逻辑意义”）の関係によって三つに下位分類される。一、文の主語がV1に対しても、V2に対しても  
〈主語〉の関係にある構文である（以下、〈主語〉というように〈 〉にくくられているのは、意味上の概  
念であることを表している）。だから、V2の変化対象が主語になっている“脸都照红了 liǎn dōu zhàohóngle  
顔 みんな 照らす+赤い-pfv”《顔は照らされて赤くなった》のような文は、ここには分類されない。この類がさ  
らに二つに下位分類されている（例(3)(4)）。二、“主語+V1”がV2に対して〈主語〉になっている文であ  
る（例(5)）。三、一つめの解釈も二つめの解釈もともにできる文である（例(6)）。（例文は p.94。）

(3) 他 长胖了

tā zhǎngpàngle

彼 成長する+肥っている-pfv

彼は肥った

(4) 他 急哭了

tā jíkulē

<sup>注15</sup> “得字句”に関しては、Vが述語であり“得+V2”は補語であるという分析もあるが、本稿では本文にあげた考え方を採る。“得  
字句”については、Li & Thompson (1981:Ch.22)、田口 (1990)、沈 (1991)、苞山 (1995) 等を参照。

<sup>注16</sup> “得字句(1)”と“得字句(2)”の例を挙げておく（李 1980: 93）。

- a. “得字句(1)”……他 酒喝多了 → 他 酒 喝得 多了→\*他喝得酒多了

tā jiǔ hēduōle tā jiǔ hēde duōle  
彼 酒 飲む+多い-pfv 彼 酒 飲む-DE 多い-pfv  
彼は酒を飲み過ぎた

- b. “得字句(2)”……他 眼睛 哭红了 → 他 眼睛 哭得 都 红了 → 他 哭得 眼睛 都 红了

tā yǎnjīng kūhóngle tā yǎnjīng kūde dōu hóngle tā kūde yǎnjīng dōu hóngle  
彼 目 泣く+赤い-pfv 彼 目 泣く-DE みな 赤い-pfv 彼 泣く-DE 目 みな 赤い-pfv  
彼は泣いて目がすっかり赤くなった

彼 いらいらする+泣く-pfv  
彼はいらいらして泣いた

(5) 你 出来巧了

nǐ chūláiqiǎole  
あなた 出てくる+巧みだ-pfv  
君は丁度いい時に出てきた

(6) 车 走慢了

chē zǒumàngle  
車 行く+遅い-pfv  
車はゆっくり進んだ

(3) は《《彼が育つ》+《彼が肥っている》》という意味構造を持っている。ただし、李は「+」がどのような意味を持っているかについては述べていない。おそらく、〈原因+結果〉という因果関係や時間的な前後関係を表しているのだろう。(5) は《《彼が出てくる》の《巧みだ》》という意味構造を持っている。(6) は《《車が進む》+《車が遅い》》という意味構造を持っているとも考えられるし、《《車が進む》の《遅い》》という意味構造を持っているとも考えられる<sup>註17</sup>。これらはみな“被”受動文を作れない。また(4)だけが“把字句”に変換可能である。さらに、ほかがすべて“得字句(1)”への変換であるのに対して、(4)は“得字句(2)”へ変換される(他急得哭起来了/急得他哭起来了)。

このようにして、李は動補型複合動詞を22のタイプに分けている。李があつかっているのは、動補型複合動詞のB類とC類に相当する。李は動補型複合動詞を述語としてとる文を構文ごとに分けているので、動補型複合動詞の意味構造のタイプが何種類あるのかが見えづらくなっている。また、単に分類しただけであって、構文間の関係、つまり“把字句”や“被”受動文への変換の可否がどのような理由によるのか述べられていない。さらに、細かく分類されているのだが、いわゆる動詞コピー構文(重動文)が扱われていないなど網羅的でない。

### 2.2.2. 吕叔湘(1986)

発表年が前後するが、今井(1985)の前に吕叔湘(1986)を検討する。吕(1986)は、結果複合動詞を述語とする文を16の文型に分類している。今井(1985)と同様に、文の構成要素間(主語、目的語、V1、V2)の意味関係を基準に分類している。吕は、結果複合動詞を「動詞+補語」という語連続(句)であると分析している。この点は、今井(1985)と同様である。また、吕は補語(V2)が主語や目的語と意味関係を持つものだけを論じ、動詞(V1)と意味関係を持つものは扱わないとしている。(ただし、吕の提示している例文中には、V2がV1と意味関係を持っていると思われる文もふくまれている。)つまり、私の分類によるB類・C類があつかわれていて、A類はあつかわれていない。

吕は、動補型複合動詞を述語として用いている文を形式的に分類している。“把”を用いている文、“被”を用いている文、どちらも用いていない文の三つである。そして、“把”を用いている文型を五つの意味関係の型に分け、“被”を用いている文型を三つの型に分け、どちらも用いていない文型を八つの型に

<sup>註17</sup> 李の表記法を用いると次のようになる。(3)(4)のタイプは S<sup>V</sup>P+S<sup>C</sup>P、(5)のタイプは (SV)<sup>C</sup>P である。上付きのSは意味上の主語を表し、Pは意味上の述語を表す。

分ける。この八つのうち、目的語が現れている文型と目的語が現れていない文型はそれぞれ四つである。

下位分類の隣に記してある式は、述語内の要素 (V1、V2) と名詞句 (Sが主語、Oが目的語を表す) との意味的な関係を示している。これは私が呂(1986: 6) の図をもとに書いたものである。V1あるいはV2の左側が意味上の〈主語〉であることを表し、右側が意味上の〈目的語〉であることを表す。例えば、[1]の S+V1+O / O+V2 は、S (主語) がV1の〈主語〉であり、O (目的語) がV1の〈目的語〉であるとともにV2の〈主語〉であることを表している。かっこは、意味上は存在しても実際の文では語によって現れたり現れなかったりする要素であることを表す。呂(1986) に挙げられている例文にある語も、あわせて載せておく。

#### “主語+述語+目的語”

- [1] S+V1+O / O+V2 “拉紧 lājǐn” 《引いてきつくする》、“拴牢 shuānláo” 《きつくつなぐ》
- [2] S+V1(+O) / O+V2<sup>注18</sup> “踢坏 fīhuài” 《蹴ってだめにする》、“跑肿 pǎozhǒng” 《走って腫れる》
- [3] S+V1(+O) / V2+O<sup>注9</sup> “吃迷心 chīmíxīn” 《食べて気がおかしくなる》、“苦出头 kǔchūtóu” 《苦しんで苦境から脱する》
- [4] S+V1+O / S+V2<sup>注19</sup> “喝醉 hēzùi” 《飲んで酔う》、“睡醒(覚) shuìxǐng jiào” 《眠って目覚める》

#### “主語+述語”

- [5] S+V1(+O) / S+V2<sup>注9</sup> “闲疯 xiánfēng” 《暇で気が狂う》、“吃大 chīdà” 《食べて大きくなる》
- [6] (S'+)V1 / S+V2 “研究老 yánjiūlǎo” 《(他人の) 研究によって老け込む》
- [7] V1+S / S+V2 “写错 xiěcuò” 《書き間違える》、“看完 kànwán” 《書き終わる》
- [8] V1+S / (S'+)V2 “这种酒喝不醉的 zhè zhǒng jiǔ hēbuzùi de” 《この酒は酔えないのだ》<sup>注20</sup>

#### “主語+“把”+目的語1+述語(+目的語2)”

ただし、[11][12]は“主語+動詞+目的語+“把”+目的語+述語”の文型において。

- [9] S+V1+O1 / O1+V2<sup>注9</sup> “逗笑 dòuxiào” 《からかって笑わせる》、“问愣 wènlèng” 《尋ねてあきれさせる》
- [10] S+V1+O1 / O2+V2 “催起了身 cuīqǐle shēn” 《促して腰を上げさせる》
- [11] S+V1 / O1+V2 “盼红 pànhóng” 《待ち望んで(目を)赤くする》
- [12] S+V1 / V2+O1 “忙忘 mángwàng” 《忙しくて忘れる》
- [13] O1+V1+S / O1+V2 “这一点儿酒就把你喝醉了? zhè yìdiǎnr jiǔ jiù bǎ nǐ hēzùi le” 《このく

<sup>注18</sup> Vは自動詞、あるいは目的語が現れない。

<sup>注19</sup> V2とOは直接の関係を持たない。

<sup>注20</sup> このタイプは [4] の自動詞文(自然被動文)であろう。

らの酒量で君が酔うだろうか》

“主語1+ “被” +目的語+述語 (+主語2)”

[14] O+V1+S1 / S1+V2 “晒懒 shàilǎn” 《日に照らされてだるくなる》

[15] V1+O / S1+V2 “(被泪) 流湿了 bèi lèi liúshīle” 《(涙が) 流れて濡らされた》

[16] O+V1+S2 / S2+V2 “被碾碾子碾坏了笤帚把 bèi niǎngǔnzi niǎnhuàile tiáozhou bǎ” 《石臼にほうきの柄を碾かれて壊れた》

呂(1986)の分析法も李(1980)とほとんど同じである。ただし、呂は大分類を純粹に形のうえからしているので“主語+述語”構文に自然被動文をふくめたり、李で変換としてあつかわれていた“被”受動文を分類の対象としたり、動詞のコピー構文が“把”構文のなかであつかわれていたり、李との違いも目立つ。呂も分類をしめしただけであり、構文間の(変換)関係や、ある動補型複合動詞がある構文をとれたりとれなかったりする理由や条件については述べられていない。

### 2.2.3. 今井(1985)

次は、今井(1985)の分析法を概観しよう。今井は当該の形式を「動補構造」と呼び、複合動詞であるという見方をしていない。また、あつかう対象を、次の四つの特徴を持つ形式であるとしている(p. 25)。

- ①動詞と補語とが相接して用いられるという形式上の特徴。
- ②動詞によって表される内容と、補語によって表される内容とが因果関係にあるという意味上の特徴。
- ③動詞と補語とがともに、本来は自由形式である。
- ④動詞と補語とが動補構造のなかに置かれても、ともに自由形式である場合の意味を保持している。

これらの特徴、特に②の特徴から、B類の一部を考察の対象としていることが分かるが、じっさいにはC類もあつまっている(三つめの型)。

- (7) 我 喝醉了 酒  
wǒ hēzuìle jiǔ  
私 飲む+酔う-pfv 酒  
私は酒を飲んで酔った (p.25)

たとえば、(7)の文を、今井は、V1“喝”とV2“醉”をそれぞれ述語とした文S1、S2に分解する。S1が“我喝酒 wǒ hē jiǔ”《私が酒を飲む》、S2が“我醉了 wǒ zuìle”《私が酔った》である。S1とS2のあいだに共通する成分があるか否か、あるとしたらその成分のある位置はどこか。これが今井の用いる「統辞法」の分析手法である。この場合、共通成分は“我”である。そして、その位置はS1、S2ともに主語である。このようにS1とS2の共通成分がともに主語である例には、次のように目的語を伴わないものもある。

- (8) 他 饿死了  
tā èsǐle  
彼 餓える+死ぬ-pfv  
彼は飢え死にした

(9) 我 等累了

wǒ děnglèile

私 待つ+疲れる-pfv

私は待ちくたびれた (p.26)

このような分析法は、李 (1980)と呂 (1986) にも通じるものである。ただし、両者の場合、それを「統辞法」ではなく、V1とV2との意味的關係（語義指向）と捉えている。このように、V1 と V2 がそれぞれ持つ何らかの機能が V1+V2 全体に引き継がれるというアイデアによる分析は、今井以降の研究にも継承されていく。次に、例文 (10) を考えてみよう。

(10) 他 碰倒了 油瓶

tā pèngdǎole yóupíng

彼 ぶつかる+倒れる-pfv 油壺

彼は油壺にぶつかって倒した (p.26)

(10) の文は、S1 “他碰油瓶 tā pèng yóupíng” 《彼が油壺にぶつかる》”とS2 “油瓶倒了 yóupíng dǎole” 《油壺が倒れた》に分解される。共通成分は“油瓶”である。そして、その位置は S1 においては目的語であり、S2 においては主語である。これと同じ型の文には、次のようなものがある。

(11) 我 拍红了 手

wǒ pāihóngle shǒu

私 打つ+赤い-pfv 手

私は拍手して手を赤くした

(12) 我 吹灭了 灯

wǒ chuīmièle dēng

私 吹く+消える-pfv 明り

私は明りを吹いて消した

三つめの型は、共通成分が S1 においては、その文全体となっている。S2 においては、主語の位置である。たとえば、次の (13) のような文である。

(13) 大家 扫完了 院子

dàjiā sǎowánle yuànzi

みんな 掃除する+終わる-pfv 庭

みんなは庭を掃除し終えた (p.26)

この文は、S1 “大家扫院子 dàjiā sǎo yuànzi” 《みんなが庭を掃除する》とS2 “(大家扫院子) 完了”とに分解される。S2 で示してあるのはある種の構造であり、実際の中国語の文としては不適合である。《みんなが庭を掃除するという事態が終わった》という意味である。つまり、S1 と S2 の共通成分は“大家扫院子”である。この共通成分は、S2 では主語を占めるが、S1 では文全体である。これは、目的語を持たない次のような文にも当てはまる。

(14) 大家 坐好了

dàjiā zuòhǎole  
みんな 座る+よい-pfv

みんなきちんと座った (p.26)

ここまで述べた三つの型は、S1 と S2 のあいだに共通成分がある。今井はこれらを「直接動補」と呼ぶ。しかし、S1 と S2 のあいだに直接の共通成分を持たない型もある。今井は、それらの型を「間接動補」と呼ぶ。つまり、S1 にある名詞句と S2 にある名詞句のあいだに間接的な関係があるというわけである。その間接的な関係の型を、今井は三つに分けている。(p. 30)

1. 大主語、小主語の中の主語だけが共通成分になる。
2. 動作の行われる場所を表わす語が共通成分になる。
3. 行為、現象の影響を受けるものが共通成分になる。

1 の例として挙げられるのは、(15) の文である。

(15) 小张 吃坏了 肚子

xiǎozhāng chīhuàile dùzi  
張君 食べる+壊れる-pfv 腹

張君は食べておなかを壊した (p.26)

この文は、次のように分解される。S1 “小张吃 xiǎozhāng chī” 《張君が食べる》と S2 “小张肚子坏了 xiǎozhāng dùzi huàile” 《張君はおなかがこわれた》である。S2 は二重主語文（“主谓谓语句”）の形をしている。この文では、小主語“肚子”が大主語“小张”の分離不可能な所有物を表している。S1 と S2 の共通成分は“小张”であるから、共通成分は S2 の大主語に当たる。

2のタイプとして、今井は次のような例文を先行研究から引用している (P.28)。

(16) 胖子 坐塌了 椅子

pàngzi zuòtāle yǐzi  
肥った人 座る+つぶれる-pfv 椅子

ふとっちょが座って、椅子がつぶれた (余 1966: 136)

(17) 妹妹 哭乱了 我的心了

mèimei kūluànle wǒ de xīn le  
妹 泣く+乱れる-pfv 私 の 心 終助詞

妹が泣いたので、私は心の平静を失った (余 1971: 40)

(16) の文は、次のように分解できる。S1 “胖子坐在椅子上 pàngzi zuòzài yǐzishang” 《ふとっちょが椅子に座る》と S2 “椅子塌了 yǐzi tāle” 《椅子がつぶれた》である。“坐”は自動詞であり、《椅子に座る》は“\*坐椅子”ではなく、“坐在椅子上”となる。（“在”は“坐”と複合して複合動詞をつくっている。ただし、“VI+在”は後ろに場所詞を要求する。“-上”は名詞に付いて、全体を場所詞化する接辞である。）S1 と S2 の共通成分は“椅子”である。共通成分は S2 においては主語であるが、S1 においては「動作の行われる場所」とでも言うしかない。このように、S1 の述語動詞が自動詞であり、分解された文

において、もとの文に無いような要素（“在～上”）を導入しなければならないような文も、今井は「間接動補」に分類する。

(17) の文は、次のように分解できる。S1 “妹妹哭使我的心” と S2 “我的心乱了 wǒde xīn luànle” 《私の心が乱れた》である。S1 にあらわれる“使”は、《～させる》という意味の動詞である。しかし、S1 “妹妹哭使我的心” は実際には使われない文である。今井が意図しているのは、《妹が泣くという事態が私の心を～させる》という意味を持つ構造を表しているということであろう。共通成分は“我的心”であるが、(16) のような「動作の行われる場所」といった概念では規定できない、さらに抽象的な関係である。

さらに、S1 と S2 が共通成分を持たない型の文も存在する。今井は次のような例を先行研究から引用している (p.28)。

(18) 大风 刮倒了 小 树  
dàfēng guādǎole xiǎo shù  
強風 吹く+倒れる-pfv 小さい 木  
大風が吹いて、小さな木が倒れた (李 1980: 97)

(19) 密 雨 下黑了 天地  
mì yǔ xiàhēile tiāndì  
密な 雨 降る+暗い-pfv 天地  
激しい雨が間断なく降り、天地が暗くなった (李 1980: 97)

今井に従えば、(18)(19) の文はそれぞれ次のように分解できる。(18) は、S1 “大风刮 <小树> dàfēng guā <xiǎo shù>” 《強風が <小さい木に向かって> 吹く》、S2 “小树倒了 xiǎo shù dǎole” 《小さな木が倒れた》。(19) は、S1 “密雨下 <天地> mì yǔ xià <tiāndì>” 《激しい雨が <天地に> 降る》、S2 “天地黑了 tiāndì hēile” 《天地が暗くなる》。(18) の場合、“刮”は自動詞であるから、“\*大风刮小树”という文は作れない。つまり、S1 と S2 のあいだには共通成分はない。しかし、“刮”と“小树”のあいだには、“刮”が“小树”の影響を受けるという関係が成り立っている。その関係を〈 〉で表している。

今井論文においては、動補型複合動詞を述語とする文を分解してできた S1 と S2 がどういう地位 (status) であるか、不明である。中国語の文として非文であるものが現れるので、表層的な文ではない。生成文法でいうD構造のようなものなのだろうか。S1 と S2 が不明であるのにもなって、(S1 あるいは S2 の) 「主語」「目的語」「自動詞」「他動詞」といった概念も不明である。また、今井は、動補型複合動詞文を、V2 に対して主語の関係を持つ名詞句が V1 に対してはどのような (文法的) 関係を持っているかという基準によって分類を行っている。しかし、その基準が一貫していない。「直接動補」では、統語的基準であったにもかかわらず、「間接動補」や共通成分のない型になると、意味的基準が混入する。だから、これで型がすべて尽くされているかどうか不明である。そして、後述する「有標型」の文のように、このような文の表層に現れた成分間の関係のみに基づいた分析では、うまくいかない文があるのである。さらに、あつまっている構文も、“主語+述語”、“主語+述語+目的語”のみであり、その他の構文との関連はしめされていない。

以上、今井 (1985) における動補型複合動詞（「結果を表す動補構造」）の分析を見た。

### 2.3. GB理論による分析

この節では、望月 (1990) と山口 (1991) を検討する。この両者は、動補型複合動詞の形成を GB 理論を用いて説明している。その操作を、望月は「動詞繰り上げ (verb-raising)」、山口は「編入 (incorporation)」としている。しかし、どちらも後項 (V2) が移動して前項 (V1) と同じ語となるという点では共通している。つまり、統語的な操作によって形成される複合動詞であるとしているのである。

#### 2.3.1. 望月 (1990)

望月 (1990: 129) では「動補動詞は、その後項が文中で何を指向するかによって次の四つのタイプに分けられる」としている。「指向」とは、「～について述べる」ということを表す概念のようである。この分類は、意味的であり、今井分類よりもさらに表層的な文に依存した分類であるが、結果は今井のものと同様である。一方で、山口は V1、V2、V1+V2 が自動詞 (形容詞) か他動詞かによって、動補型複合動詞を四つの型に分けている。この分類は「指向」型分類をさらに細かく分けたものになっている。

望月は、V2 が V1+V2 文における主語について述べている型を「主語指向型」と呼ぶ。これは、今井分類において、S2の主語 (共通成分) がS1の主語位置に置かれている型と対応している。たとえば、“我走累了 wǒ zǒulèile” 《私は歩き疲れた》や“她病倒了 tā bìngdǎole” 《彼女は病に倒れた》といった文が「主語指向型」である (例文は p. 129)。

望月は、V2 が V1+V2 文における目的語について述べている型を「目的語指向型」と呼ぶ。これは、今井分類において、S2の主語 (共通成分) がS1の目的語位置に置かれている型と対応している。これに該当するのは、“我踢伤了他 wǒ fīshāngle tā” 《私は彼を蹴って怪我をさせた》や“哥哥骂哭了弟弟 gēge màkūle dìdì” 《兄が弟を罵って泣かせた》といった文である。

さらに望月は、V2 が V1 (望月の用語では「動詞語幹」) について述べている型を「動詞語幹指向型」と呼ぶ。これは、今井分類において、S2の主語 (共通成分) がS1の文全体である型と対応している。望月によると、太田 (1958: 204-210) は動補型複合動詞を“打倒 dǎdǎo” 《殴り倒す》、“推倒 tuīdǎo” 《押し倒す》、“拉倒 lādǎo” 《引き倒す》のような「使成複合動詞」と、“写好 xiěhǎo” 《きちんと書き終える》、“学好 xuéhǎo” 《習得する》、“办好 bànhǎo” 《うまくし遂げる》のような「結果複合動詞」に分けている。そして、太田は、歴史的に「結果複合動詞」は「使成複合動詞」からの類推によって生まれたという趣旨を述べている。この太田の説を理由に、望月はこの型を考察の対象から外している。つまり、望月が考察の対象としているのは、B類の一部のみである。「動詞語幹指向型」の例としては、“我吃完了饭了 wǒ chīwánle fàn le” 《私は御飯を食べ終わった》や“父亲喝多了酒了 fùqin hēduōle jiǔ le” 《父は酒を飲みすぎた》という文がある (例文は p. 129)。

最後に挙げられている「有標型」を、望月は次のように説明する (p. 129)。「動補動詞が二項動詞として機能しているが、無標の場合の意味関係‘動作主+V+対象’の型をとらないタイプである。」これは、今井分類に挙げられていなかった型である。

(20) 那 顿 饭 吃坏了 我 的 肚子  
nà dùn fàn chīhuàile wǒ de dùzi  
あれ 類別詞 ご飯 食べる+壊れる-pfv 私 の 腹

(言わんとする意味は) あの御飯を食べて私はおなかを壊した

(21) 这种 酒 喝醉过 不 少 人

zhè zhǒng jiǔ hēzuìguo bù shǎo rén

これ 類別詞 酒 飲む+酔う-exp ~ない 少ない 人

(同上) この種の酒を飲んで多くの人が酔っ払ったことがある

(20)(21) では、主語名詞句“那顿饭”“这种酒”はV1の対象という意味役割が与えられていると考えられるが、文全体にとっては〈原因〉あるいは〈道具〉とでも言えそうである。(望月は〈道具〉というθ役割をあてている。)一方、目的語名詞句“我的肚子”“不少人”にはV2の〈経験者〉が来ている。「有標型」は、このようないっけん特殊な語順をとる(あるいは、名詞句へ特殊な意味役割の付与を行う)型である。このような「有標型」の文の形成を、望月は次の例文を挙げて説明している。(p. 134)

(22) a. 他们 用 放射性 物质 污染了 空气

tāmen yòng fāngshèxìng wùzhì wūrǎnle kōngqì

彼ら ~で 放射性 物質 汚染する-pfv 空気

彼らは放射性物質で空気を汚染した

b. 放射性 物质 污染了 空气

fāngshèxìng wùzhì wūrǎnle kōngqì

放射性 物質 汚染する-pfv 空気

放射性物質が空気を汚染した

c. 空气 污染了

kōngqì wūrǎnle

空気 汚染する-pfv

空気が汚染した

(22)の主語は、それぞれ(a)に〈動作主〉、(b)に〈道具〉、(c)に〈対象〉が付与されている。望月は、“汚染”の主語になる名詞句について、動作主>道具>対象という階層(「優先順位」)が存在するという趣旨を述べている。この階層のより左側にある意味役割(θ役割)が付与された名詞句が主語になりやすい。だから、〈動作主〉を担う名詞句があれば、それが優先的に主語になるのである。〈動作主〉を担う名詞句が無く、〈道具〉〈対象〉を担う名詞句があれば、〈道具〉を担う名詞句が主語になる。〈対象〉を担う名詞句のみがあれば、それが主語になる。しかし、望月によれば、(21)の“不少人”のような名詞句には、〈動作主〉と〈経験者〉の二つの意味役割が同時に付与されることになり、問題が残っている。そして、次のように述べている(p. 134)。「いずれにしても、本節で扱った特殊な文にみられる、二項動補動詞と文中の二つの名詞句との意味関係はかなり自由で、多分に語用論的要素に依存する意味解釈規則によってこれらの特殊な文が解釈されるようである。これらの特殊な文に現われる動補動詞は、統語的に派生されたものではなく、語彙的複合動詞とみなす方が妥当であるように思われる。」

しかし、ほかの文型をとらず、「有標型」だけをとる動補型複合動詞は無い。つまり、「有標型」の構文をとる動補型複合動詞は、必ず〈動作主〉や〈経験者〉を主語にする構文をとることができる。だから、「有標型」の構文をとることだけを理由に、その動補型複合動詞を「語彙的」に形成されたものであるとは

みなせない。

### 2.3.2. 山口 (1991)

上で述べたように、山口 (1991) はV1、V2そして動補動詞全体がそれぞれ自動詞か、他動詞かによって、動補型複合動詞を四つに分類している (p. 116)。

#### (23) 自動詞+自動詞 (形容詞) →自動詞

a. 我 冻病了

wǒ dòngbìngle

私 凍える+病気になる-pfv

私はこごえて病気になった

b. 你 长高了

nǐ zhǎnggāole

あなた 育つ+高い-pfv

君は成長して背がのびた

#### (24) 他動詞+自動詞 (形容詞) →自動詞

a. 他 喝醉了

tā hēzuìle

彼 飲む+酔う-pfv

彼は〔酒を〕飲んで酔った

b. 他 吃胖了

tā chīpàngle

彼 食べる+肥る-pfv

彼は〔何かを〕食べて太った

#### (25) 自動詞+自動詞 (形容詞) →他動詞

a. 胖子 坐塌了 椅子

pàngzi zuòtāle yǐzi

肥った人 座る+つぶれる-pfv 椅子

太った人が椅子を坐りつぶした

b. 她 哭湿了 手帕

tā kūshīle shǒupà

彼女 泣く+濡れる-pfv ハンカチ

彼女はハンカチを泣き濡らした

#### (26) 他動詞+自動詞 (形容詞) →他動詞

a. 爸爸 骂哭了 妹妹

bàba màkūle mèimei

父 しかる+泣く-pfv 妹  
父は妹をしかって泣かせた

b. 弟弟 削尖了 铅笔  
dìdì xiāojiānle qiānbǐ  
弟 削る+尖っている-pfv 鉛筆  
弟は鉛筆をけずってとがらせた

(23) は、V1が自動詞、V2が自動詞（あるいは形容詞）であり、V1+V2 全体も自動詞である型を表している。(24) は、V1 が他動詞、V2が自動詞（あるいは形容詞）であり、V1+V2 全体が自動詞である型を表している。(25, 26) は V1+V2 全体が他動詞になる例である。なお、山口は、太田の「結果複合動詞」<sup>注21</sup>と望月の「有標型」を考察の対象から外している。(23)(24) は望月の「主語指向型」に相当し、(25)(26) は「目的語指向型」に相当する。

## 2.4. 認知文法的分析

認知文法の観点から動補型複合動詞を分析したものに中川 (1992a, b) がある。中川は、対象とする複合動詞を、前項が原因を表し、後項が結果を表すことから、CR (“CAUSE & RESULT” の略) と呼ぶ。中川 (1992b: 76) は言う。「ここで断っておかなければならないのは、筆者がいうCRという範疇は、いわゆる「結果を表す動補動詞」という範疇とは必ずしも一致しないということである。たとえば、複合動詞「踢碎〔蹴り割る〕」と「長大〔成長して大きくなる〕」を比べてみると、「踢碎」の前項の「踢」は後項の「碎」によって表される結果の原因を表しているが、「長大」の前項の「長」は後項の「大」の原因であるとは考えられない。統語的に見ても、前者は他動詞文に生起することができるが、後者は他動詞文に生起することはできないという違いがある。したがって前者は本稿の考察の対象となるが、後者は考察の対象とはならない。」ここでは、中川の言うCRも、便宜上、動補型複合動詞と呼ぶ。

中川 (1992a) は、従来のように動補型複合動詞を述語とする文を類型に分けるということはしていない。動補型複合動詞文が表す「状況」を類型化している。中川は、〈状況①～⑦〉を立てている。これらの型は、「事象1、事象2における項の数とその指示内容を基準として分類したものである。CR文が表す状況はさらに詳細な分類が可能であるが、〈状況①～⑦〉は筆者が主観的に典型と判断したものである。」(中川 1992a: 注3)

〈状況①～⑦〉は、次の通りである。

〈状況①〉事象1 xがある動作行為を行った。／事象2 xがある状態変化を経験した。

〈状況②〉事象1 xがyに対してある動作行為を行った。／事象2 xがある状態変化を経験した。

〈状況③〉事象1 xがxに対してある動作行為を行った。／事象2 xがある状態変化を経験した。

〈状況④〉事象1 yがある動作行為を行った。／事象2 xがある状態変化を経験した。

〈状況⑤〉事象1 yがzに対してある動作行為を行った。／事象2 xがある状態変化を経験した。

〈状況⑥〉事象1 yがxに対してある動作行為を行った。／事象2 xがある状態変化を経験した。

〈状況⑦〉事象1 yがxを道具としてzに対してある動作行為を行った。／事象2 xがある状態変化を経験した。

<sup>注21</sup> 山口 (1991: 115) は、「結果複合動詞」にあたるものを、「主要部左端型」と呼んでいる。考察対象にしているものは、すべて「主要部右端型」である。

これらの〈状況〉を描写する文型はひとつとは限らない。たとえば、中川は〈状況①〉の語例として“跑累”を挙げているが、この語を述語として用いた次の四つの文型を挙げている (p. 120)。

(27) a. 张三 跑累了

zhāngsān pǎolèile

张三 走る+疲れる-pfv

張三は走り回って疲れた

a'. 张三 跑了 一天 跑累了

zhāngsān pǎole yì tiān pǎolèile

张三 走る-pfv 一 日 走る+疲れる-pfv

張三は一日走り回って疲れた

b. 跑了 一天 跑累了 张三

pǎole yì tiān pǎolèile zhāngsān

走る-pfv 一 日 走る+疲れる-pfv 张三

一日走り回ったことが張三を疲れさせた

c. 跑了 一天 把 张三 跑累了

pǎole yì tiān bǎ zhāngsān pǎolèile

走る-pfv 一 日 ~を 张三 走る+疲れる-pfv

一日走り回ったことが張三を疲れさせた

中川は、このような動補型複合動詞は出来事 (event) が使役主 (causer) となる (強制的な) 使役構造型であると主張している。この主張のために、動作主 (agent) が使役主となる使役構造型ではないという根拠を二つ、event-causer であるという根拠を二つ、傍証をひとつ挙げている。

使役主=動作主であるための条件として挙げられているのは、次の二つである。(a) V1と目的語名詞とのあいだに「述語+目的語」という統語的關係が存在する。(b) 使役動詞である V1 が結果の達成を含意している。そして、〈状況①~⑦〉の動補型複合動詞文のなかに (a)(b) をともに満たすものは無い。したがって、動補型複合動詞は動作主=使役主の使役構造型を持たない。

ところで、なぜ、上の (a)(b) を満たすことが、動作主=使役主の使役構造型を持つための条件になるのだろうか。(a) について、中川は言う (1992a: 128)。「[……] 事象2の x が経験する状態変化は、自発的な変化ではなく、何らかの働きかけを受けて引き起されたものである。したがってCR文を CAUSE-A 型〔動作主=使役主の強制的使役構造型〕の構造式で解釈するためには、使役動詞として扱われるCRの前項が働きかけで、状態変化を経験する x がその受け手であることを示さなければならないだろう。CRの前項と状態変化を経験する x との間にそのような意味關係が存在し得るか否かは、両者が統語的に動目關係を結び得るかどうか見ることによって確かめることができる。」また、(b) については、英語の使役動詞 *persuad* からの類推によっている。

一方、使役主=出来事の使役構造型では、V1を使役動詞とはみなさない。使役動詞は統語上ゼロ実現 (zero-realize) していると考える。使役主=出来事であるとする根拠として挙げられているのは、次の二つである。(c) 上の (27a', b, c) における“一天”のような要素に解釈を与えることができる (使役主=動作主の使役構造型には組み入れることができなかった)。(d) 否定のスコープが、V1でもV2でもなく、ゼロ実

現した CAUSE (使役動詞) である。

(28) 张三 跑了 一天, 但 没 跑累

zhāngsān pǎole yì tiān dàn méi pǎolèi  
张三 走る-pfv 一 日 しかし ~ない 走る+疲れる  
張三は一日走り回ったが、疲れはしなかった

(28) の意味は、《走り回らなかったことが疲れさせた》 (=V1を否定) でもなく、《走り回ったことが疲れさせなかった》 (=V2を否定) でもない。《走ったが疲れなかった》なのである。だから、否定のスコープは、V1 でも V2 でもなく、「統語的にゼロ実現された CAUSE である」 (p. 132)。

最後に、傍証としてポーズの位置が挙げられている。(27a) に挙げた“张三 跑了一天 跑累了”という文は、“张三 跑了一天”を主語句と分析するのではなく、“张三”を主語、“跑了一天” “跑累了”をそれぞれ動詞句とする動詞連続構文と分析できるかもしれない。しかし、ふつう動詞連続構文においては、主語と (ひとつめの) 動詞句のあいだにポーズが置かれ、二つの動詞句のあいだにはポーズが置かれない。つまり、次のようになる。ポーズが置かれる位置は、“|”で示した。(p. 135)

(29) a. 张三 | 跑步 回家了

zhāngsān pǎobù hújīale  
张三 駆け足する 帰宅する-pfv  
張三は走って家に帰った

b. ?张三 跑步 | 回家了

zhāngsān pǎobù hújīale  
张三 駆け足する 帰宅する-pfv

しかし、これに対して、(27a) の文では“张三 跑了一天”と“跑累了”のあいだにポーズが置かれ、“张三”と“跑了一天”のあいだにポーズを置くことができない。したがって、この種の動補型複合動詞は、出来事を主語 (使役主) にしているということが傍証される。このように中川は主張している。

## 2.5. 項構造の組み合わせによる分析

項構造 (argument structure) の組み合わせによって動補型複合動詞を分析しようとするものに、沈 (1993) と Li (1993) がある。沈は、動補型複合動詞の項構造は V2 の項構造を継承しているので、その主要部 (head) は V2 であるという趣旨を述べている。一方で、Li は動補型複合動詞の主要部は V1 であるという趣旨を述べている。このように、動補型複合動詞において形態的・統語的主要部がどこにあるのか (V1 説、V2 説、ゼロヘッド説、混合説等) という議論は、多くなされてきた (鈴木 2004)。しかし、本稿では、統語レベルにおける主要部という概念がそのまま語の内部構造にも適用できるとは考えていない。第三章でも述べたように、語よりも上のレベルと語よりも下のレベルとは類似性によって結び付いているだけなのである。第三章でも見たように、同じ語構造を持っていながら、語全体の品詞はさまざまである。語全体の品詞が、語の構成要素の品詞性から継承されているとはみなしがたい。動補型複合動詞においても、複合語全体の機能が、V1 の機能から継承されたとも V2 の機能から継承されたとも見える現象があるのも、統語構造とは本質的に異なる語構造の特質である。したがって、本稿では、少なくとも動補型複合動詞において

は主要部という概念を設定する意義はないという立場をとる。

沈は、V2 には無意志動詞（“无意志动词”）のみが来ると言う。意志動詞と無意志動詞の区別には、“用力地 yònglìde”《力一杯に》という意志的な副詞の修飾を受けられるかどうかという基準を用いている。（p. 13-14）

(30) 用力地——

- a. 叫 jiào《叫ぶ、鳴く》／堵 dǔ《ふさぐ、遮る》／喝 hē《飲む》／跳 tiào《跳ぶ》／打 dǎ《殴る》  
／喊 hǎn《叫ぶ》／闹 nào《騒ぐ》／骂 mà《しかる》
- b. \*醒 xǐng《目覚める》／累 lèi《疲れる》／急 jí《焦る》／病 bìng《患う》／死 sǐ《死ぬ》／伤 shāng《傷める》  
／弯 wān《曲がる》／糊涂 hútu《ぼんやりしている》

そして、動補型複合動詞においては、V1 が意志動詞であろうと無意志動詞であろうと成立するが、V2 は無意志動詞でしか成立しない。（p. 14）

(31) a. V1、V2ともに意志動詞

- \* 闹叫／闹堵（耳朵）／闹喝（药）／闹跳／闹打　〔耳朵 ěrduo《耳》、药 yào《薬》〕
- b. V1が無意志動詞、V2が意志動詞  
\* 累叫／累喊／累闹／累骂／累打
- c. V1が意志動詞、V2が無意志動詞  
闹醒／闹累／闹烦／闹急／闹病　〔烦 fán《飽きる》〕
- d. V1、V2ともに無意志動詞  
累死／累弯（腰）／累病／累糊涂／累伤　〔腰 yāo《腰》〕

ただし、無意志動詞＝一項動詞（非対格自動詞）なのではない。じっさい、沈はV2が二項動詞である例も挙げている。また、李(1980)や呂(1986)もV2が他動詞である型を認めている。この事実は、動補型複合動詞のV2が非対格自動詞であるとする望月(1990a)をはじめとする研究者の主張とは相容れない。これについては後述する。いまは、V2が二項動詞である場合はひとまず措き、V1が一項動詞である場合を検討する。沈の主張の主な論点は、次の二つである。(a) V1 と V2 の指示対象が異なるとき、V1+V2が継承する項は、V2の項である。(b) V1+V2の主語がV1の外項である場合、それは V1+V2 に対しては付加詞（“非固有参項”）である<sup>注22</sup>。

次に例を挙げる。(32) は能格動詞（有対動詞）の例である。(a) が他動詞文、(b) が自動詞文である。他動詞文 (a) の目的語を主語にした自動詞文 (b) は成立するが、(a) の主語をそのまま主語にした自動詞文 (c) は成立しない。

- (32) a. 张三　哭湿了　手绢  
zhāngsān kūshīle　shǒujuàn  
張三　泣く+濡れる-pfv　ハンカチ  
張三がハンカチを鳴き濡らした

<sup>注22</sup> 沈(1993: 14)は、項（“参項”）を“固有参項”と“非固有参項”との二つに分ける。“固有参項”は動詞によって要求される項であり、“非固有参項”は動詞によって要求されない項である。ここでは、“固有参項”を「項」、「非固有参項」を「付加詞」と訳した。

- b. 手绢 哭湿了

shǒujuàn kūshīle  
ハンカチ 泣く+濡れる-pfv  
ハンカチが泣き濡れた

- c. \* 张三 哭湿了

zhāngsān kūshīle  
张三 泣く+濡れる-pfv

“张三”は“哭”の外項であり、“手绢”は“湿”の内項である。(32b)が言えて、(32c)が言えないことから、V1+V2の項は、V2“湿”の項を継承していることが分かる。それでは、(32a)の主語である“张三”はどうなのか。これは項（“固有参項”）ではなく、付加詞（“非固有参項”）である。

沈(1993: 14)の仮説によると、〈意志動詞は必ず外項を要求し、無意志動詞は外項を要求しない〉。上で見たように、V1+V2は外項を要求しないから、V1+V2は無意志動詞ということになる。これは、V1+V2の主語に〈原因〉の意味役割を付与する中川(1992b)の考えと通ずるところがあるのかもしれない。

## 2.6. 語彙概念構造による分析

秋山(1998)は項構造の合成による分析を批判し、語彙概念構造 (lexical conceptual structure) を用いて分析を行っている。秋山(1998: 34)は、「ところが、項構造の結合では単純に説明できない例がある」として、次の例を挙げている。

- (33) a. 这 顿 饭 吃坏了 我的 肚子  
zhè dùn fàn chīhuàile wǒde dùzi  
これ 類別詞 御飯 食べる+壊れる-pfv 私-の 腹  
この御飯を食べて私はおなかを壊した

- b. 这 个 故事 听烦了 张三  
zhè ge gùshi tīngfánle zhāngsān  
これ 類別詞 話 聞く+飽きる-pfv 张三  
この話が张三を聞き飽きさせた

(33)は望月(1990b)の言う「有標型」の文である。これらの動補型複合動詞を形成しているV1とV2の項構造は次のようである。

- (34) a. 吃坏 = 吃〈我〈这顿饭〉〉+ 坏〈〈我的肚子〉〉  
b. 听烦 = 听〈张三〈这个故事〉〉+ 烦〈〈张三〉〉

そして、秋山は次のように言う (p. 34)。「[(33a, b)は] 動補動詞の主語がV1の外項 (主語) ではなく、内項 (目的語) である。一般に項構造と統語構造の結び付け規則では、外項があれば、それが主語になるが、この場合、V1は外項を持っているにも関わらず、その外項が主語にはなっていない。それでも文は適格である。従って、項構造の結合によって動補動詞を形成しているとは考えにくい。」

しかし、沈によれば、V1の項とV2の項の指示対象が異なる場合 (例34a)、結合の過程でV2の項のみが残り、V1の項二つが削除される。また、V1の項とV2の項の指示対象が同一のものがある場合 (例34b)、

結合の過程で指示対象が同一である項が残り、その他の項が削除される。つまり、(34a)では、V2 “坏” の内項 “我的肚子” がV1+V2の項として残り、それ以外の項 (“我” “这顿饭”) は削除される。(33a)の主語 “这顿饭” は、付加詞 (“非固有参項”) である。(34b)では、V2 “烦” の内項=V1 “听” の外項、つまり “张三” が残り、V1の内項 “这个故事” は削除される。(33b)の主語 “这个故事” は付加詞である。このことは、“我的肚子吃坏了”、“张三听烦了” という文が可能であることから支持される。

秋山は、このような〈項の削除〉あるいは〈付加詞の付与〉という操作を、語彙概念構造で行おうとしている。秋山が行った動補型複合動詞の類型化は、基本的に、山口 (1991)のものと同じである。次に秋山の設定する語彙概念構造を示す (pp. 38-39)。x、y、z は参与者を表す変数項である。ACT (ON)、CAUSE、BECOME、BE ATはそれぞれ〈接触・打撃〉〈使役〉〈変化〉〈状態・位置〉を表す意味述語である。たとえば、(35b)をパレフレーズすると、〈x が y に接触・打撃 (ACT) を行うことが、y が z (の状態/位置) にある (BE AT) ように変化する (BECOME) ことを、させる (CAUSE) 〉となる。

(35) 他+自/形→他 (他+非対格)

- a. “张三推开了门” [張三是ドアを押し開けた] タイプ
- b. [ x ACT ON y ] CAUSE [ y BECOME [ y BE AT z ] ]
- c. “张三唱哑了嗓子” [張三是歌つてのどをからした] タイプ
- d. [ x ACT ON w ] CAUSE [ y BECOME [ y BE AT z ] ]

(36) 他+自/形→自 (他+非対格)

- a. “他喝醉了” [彼は飲んで酔った] タイプ
- b. [ x ACT ON w ] CAUSE [ y BECOME [ y BE AT z ] ]

(37) 自+自/形→他 (非能格+非対格)

- a. “张三笑醒了李四” [張三是笑つて李四が目を覚ました] タイプ
- b. [ x ACT ] CAUSE [ y BECOME [ y BE AT z ] ]
- c. “风刮倒了树” [風が吹いて木が倒れた] タイプ
- d. [ x ACT ] CAUSE [ y BECOME [ y BE AT z ] ]

(38) 自+自/形→自 (非対格+非対格)

- a. “孩子冻病了” [子供が凍えて患った] タイプ
- b. [ y BECOME [ y BE AT z ] and [ y BE AT z ] ]

(35)(36)は、V1が他動詞、V2が自動詞あるいは形容詞である型である。形成されるV1+V2が他動詞か自動詞かでさらに(35)と(36)とに分けている。(37)(38)は、V1、V2がともに自動詞である型である。形成されるV1+V2が他動詞か自動詞かでさらに(37)と(38)とに分けている。

(35)(37) が内部でさらに二つに分かれているのは、他動詞から自動詞への派生方法の違いによる。(35)と(37)の他動詞文は、すべて自動詞文に変換することができる。しかし、(a)タイプと(c)タイプでは語彙概念構

造上の操作が異なるのである。秋山の分析をまとめると、次のようになる。

(39)

(35a)……使役主  $x$  = 変化対象  $y$  の関係が成立しない。しかし、「脱使役化」<sup>注23</sup> によって、自動詞化できる。

(35c)…… $y$  が  $x$  の身体部分であるので、 $x=y$  が成立する。したがって、「反使役化」<sup>注24</sup> によって自動詞化できる。

(36)……  $x=y$  が成立している。VIの内項 ( $w$ ) をふせた自動詞である。 $w$  を主語にした他動詞も可能。

(37a)……  $x=y$  が成立するときには、「反使役化」による自動詞化が可能である。

(37c)……(35a)と同様。 $x \neq y$  であるが、「脱使役化」による自動詞化が可能。

(38)……「変化対象の状態変化が別な状態に変化していることを表す。また、この非対格構造に使役主を付加すると、「他+非対格（非対格+非対格）」になって、使役主の行為がふせられてできた他動詞文になる。」 (p. 39)

(35)(37) に対応する自動詞文、(36)(38) に対応する他動詞文の例を挙げておく。

(35') a. 门 推开了。

mén tuīkāile

ドア 押す+開く-pfv

ドアは〔誰かが〕押して開いた

c. (张三的) 嗓子 唱哑了。

zhāngsānde sāngzi chàngyǎle

張三-の のど 歌う+嘎れる-pfv

〔張三の〕のどが歌ってかれた

(36') a. 他 喝 酒 喝醉了

tā hē jiǔ hēzuìle

彼 飲む 酒 飲む+酔う-pfv

彼は酒を飲んで酔った

b. 这 种 酒 喝醉了 他

zhè zhǒng jiǔ hēzuìle tā

これ 類別詞 酒 飲む+酔う-pfv 彼

この種の酒が彼を酔わせた

c. 这 种 酒 把 他 喝醉了

zhè zhǒng jiǔ bǎ tā hēzuìle

これ 類別詞 酒 ~を 彼 飲む+酔う-pfv

<sup>注23</sup> 使役主 ( $x$ ) を意味構造 (語彙概念構造) で抑制し、統語構造に投射しない操作 (影山 1996: 184)。

<sup>注24</sup> 使役主 ( $x$ ) が変化対象 ( $y$ ) と同定され、意味的に束縛される操作。束縛された使役主は統語構造上に現れない (影山 1996: 145)。

この種の酒が彼を酔わせた

(37') a. 李四 笑醒了。

lǐsì xiàoxǐngle  
李四 笑う+覚める-pfv  
李四が笑って目覚めた

c. 树 刮倒了。

shù guādǎole  
木 吹く+倒れる-pfv  
木は〔風が〕吹いて倒れた

(38') a. 小王 冻病了 孩子

xiǎowáng dòngbìngle háizi  
王君 凍える+患う-pfv 子供  
王君は子供を凍えさせて病気にした

b. 小王 把 孩子 冻病了

xiǎowáng bǎ háizi dòngbìngle  
王君 ~を 子供 凍える+患う-pfv  
王君は子供を凍えさせて病気にした

なお、秋山 (1998: 40) は「有標型」について次のように言う。「語彙概念構造を想定すれば、望月 1990 や山口 1991で「有標型」としている動補動詞も上位事象の (ON y) に意味の重点をおいた他動詞用法の動補動詞であると説明することが可能である。」しかし、具体的な説明はなされていない。

## 2.7. 石村 (2000)

石村 (2000) は、すべての動補型複合動詞の型に自動詞用法と他動詞用法とを認めている。そして、自動詞用法から他動詞用法が派生される型と、他動詞用法から自動詞用法が派生される型との二つが存在することを述べている。石村は、他動詞用法から自動詞用法を派生する操作を「脱使役化」、自動詞用法から他動詞用法を派生する操作を「原因主の導入」と呼んでいる。したがって、動補型複合動詞の自動詞文・他動詞文には、それぞれ二種類ずつあることになる。自動詞文には、「脱使役化」による自動詞文と再帰構造を持つ自動詞文とがある (pp. 149-50)。「脱使役化」による自動詞文は、「他動詞+自動詞→他動詞」の型 (いわゆる「目的語指向型」) と、「自動詞+自動詞→他動詞」の型を自動詞化した文である<sup>注25</sup>。「他動詞+自動詞→他動詞」型を自動詞化した例としては、上に挙げたなかでは、(35'a)があてはまる。さらに二例追加する。それぞれ、(a)が他動詞文、(b)が自動詞文の例である。((a)は p. 145、(b)は p. 149)。

(39) a. 孩子 撕破了 书皮儿

háizi sīpòle shūpír  
子供 裂く+破れる-pfv 本の表紙  
子供が本の表紙を引き裂いた

b. 书皮儿 撕破了

<sup>注25</sup> 石村 (2000: 144) は、「他動詞+自動詞→他動詞」型をB類、「自動詞+自動詞→他動詞」型をC1類と呼んでいる。

shūpír sīpòle  
本の表紙 裂く+破れる-pfv  
本の表紙が引き裂かれて破れた

(40) a. 他 踢翻了 椅子  
tā tīfānle yǐzi  
かれ 蹴る+ひっくり返る-pfv 椅子  
彼は椅子を蹴ってひっくり返した

b. 椅子 踢翻了  
yǐzi tīfānle  
椅子 蹴る+ひっくり返る-pfv  
椅子が蹴って倒れた

「自動詞+自動詞→他動詞」型を自動詞化した例としては、上に挙げたなかでは、(32b)と(37'b)があてはまる。さらに一例、追加する ((a)は p. 147、(b)は p. 149)。

(41) a. 他们 跳塌了 房顶  
tāmen tiàotāle fángǐng  
彼ら 跳ぶ+へこむ-pfv 屋根  
彼らは飛び跳ねて家の屋根をへこませた

b. 房顶 跳塌了  
fángǐng tiàotāle  
屋根 跳ぶ+へこむ-pfv  
屋根が飛び跳ねてへこんだ

もうひとつ、石村は自動詞から他動詞を派生する操作を認めている。それが、「原因主の導入」である。この操作が適用されるV1+V2の自動詞文は、石村によれば、「『自分で自分がある結果状態にする』という再帰的な意味構造によって捉えることができる」(同前: 150)<sup>注26</sup>。再帰構造を持つ自動詞文(これを石村はA類と呼ぶ)の例には、(35'a)(36a)(37'a)(38a)がある。もう一例だけ、例を追加しておく(p. 150)。

(42) 小 马 饿瘦了  
xiǎo mǎ èshòule  
若い 馬 餓える+痩せる-pfv  
子馬が餓えて痩せた

このような自動詞を「原因主の導入」によって他動詞化した文としては、望月(1990b)の言う「有標型」(これを石村はC2類と呼ぶ)と、「有標型」と同じ意味構造を持ち、V1が自動詞あるいは形容詞である文(これを石村はD類と呼ぶ)とが挙げられている。

C2類に属する文として、石村は次の(43)を挙げている(p. 151)。

(43) a. 隔夜 饭 吃坏了 我的 肚子

<sup>注26</sup> 石村は、このような自動詞文の型を「A類」と呼んでいる。

géyè fàn chīhuàile wǒ de dùzi

宵越し ご飯 食べる+悪くなる-pfv 私 の 腹

私は昨日のご飯を食べてお腹を壊した←昨日のご飯が私のおなかを壊した

b. 祥林嫂 讲 的 故事 听烦了 她

xiánglínsǎo jiǎng de gùshi tīngfánle tā

祥林嫂 話す の 物語 聞く+飽きる-pfv 彼女

彼女は祥林嫂の話す物語を聞き飽きた←祥林嫂の話す物語が彼女を聞き飽きさせた

c. 这 百 页 的 稿子 抄酸了 他的手

zhè bǎi yè de gāozǐ chāosuānle tā de shǒu

この 百 ページ の 原稿 書き写す+だるい-pfv 彼 の 手

彼はこの百ページの原稿を書き写して手がだるくなった←この百ページの原稿が彼の手をだるくさせた

また、D類の例としては、次の(44)を挙げている。(p. 153)

(44) a. 敲 门 声 惊醒了 莉莉

qiāo mén shēng jīngxǐngle lìlì

叩く 扉 音 驚く+目が醒める-pfv 莉莉

莉莉はノックの音に驚いて目を醒ました←ノックの音が莉莉を驚かして目を覚めさせた

b. 冰冷 的 河水 冻木了 我的脚

bīnglěng de héshuǐ dòngmùle wǒ de jiǎo

冷たい の 川の水 凍える+しびれる-pfv わたし の 足

氷のように冷たい川の水で私の足はかじかんだ←氷のように冷たい川の水が私の脚をしびれさせた

c. 多年 的 辛苦 累倒了 他<sup>注27</sup>

duōnián de xīnkǔ lèidǎole tā

永年 の 辛勞 疲れる+倒れる-pfv 彼

彼は永年の辛勞で倒れた←永年の辛勞が彼を疲れで倒れさせた

ただし、A類ならばどんな語でも、「原因主の導入」によって他動詞文（C2類、D類）にできるわけではない。これら原因主が主語となる文にかかる制約については、中川 (1992b) や鈴木 (2004) でも述べられている。

## 2.8. 鈴木 (2004)

鈴木 (2004) は、動補型複合動詞を三つの型に分類する。「他動詞型RVC」、「非能格型RVC」、「非対格型RVC」である。RVCとは、Resultative Verb Construction の略である。RVCの型は次のように決定される (鈴木 2004: 178)。

<sup>注27</sup> 石村 (2000) によるとこの文は適格であるとされているが、インフォーマントによると容認しづらい文だそうである。“多年的辛勞把他累倒了。”と“把”構文にすれば容認できる文になる。

(45) V2の意味とRVCタイプの決定

典型的には、V2が叙述する項とV1内項が同定できれば<sup>注28</sup> 他動詞型RVCとなる。またV2が叙述する項がV1の主語NP（非能格型ではV1外項、非対格型ではV1内項）と同定できれば、それぞれ非能格型／非対格型RVCとなる。

ほかに、それぞれのRVC型の特徴として挙げられるのは、①他動詞型が「自他交替」を起こし得るのに対して、非能格型・非対格型の自他交替は「擬似」であること、一方、②非能格型・非対格型が「使役交替」を起こし得るのに対して、他動詞型は起こし得ないこと、である。

ほかの先行研究と比べてみよう。他動詞型RVCは、望月の「目的語指向型」、山口・秋山の「X+自動詞→他動詞」型（V1は他動詞でも自動詞でもかまわない）、石村のB類とC1類にそれぞれ相当する。鈴木「自他交替」とは、秋山や石村の言う「脱使役化」にあたる。（ただし、鈴木は同じ操作を「反使役化」と呼んでいる（p. 177, 184）。）非能格型は、ほかの先行研究と一対一では対応しない。鈴木は、次のような語を非能格型の例としている。

- (46) 吃膩 *chīnì* 《食べ飽きる》、吃坏 *chīhuài* 《食べて（おなかを）こわす》、煮累 *zhǔlèi* 《煮て疲れる》、听烦 *tīngfán* 《聞き飽きる》、走累 *zǒulèi* 《歩き疲れる》、哄烦 *hōngfán* 《（Bを）おだてて（Aが）うんざりする》、看花眼 *kànhuāyǎn* 《見て目がくらむ（目移りする）》、看呆 *kàndāi* 《見てぼんやりする》、念累 *niànlèi* 《読み疲れる》、搬痛（我的腰） *bāntòng wǒde yāo* 《運んで（腰を）痛める》

しかし、このうち“走”《歩く》以外のV1“吃”《食べる》、“煮”《煮る》、“听”《聞く》、“哄”《おだてる》、“看”《見る》、“念”《読む》、“搬”《運ぶ》を（非能格）自動詞とするのは、不適當であろう。たしかに、他動詞型と自動詞型の「境界に一定の曖昧性がある」（p. 184）と述べられており、同じページの図にも、他動詞型RVCと非能格型RVCのあいだに「部分重複」という文字が書かれている。しかし、これについて本文中では詳しく論じられていない。これらの動詞は、使役他動詞と違って、対象に状態変化をもたらさない動作・行為を意味として表す。だから、他動性は低く、自動詞に近い（意味的）性質を持っていると言えるかもしれない。しかし、そう主張するのならば、はじめからV1の型（他動詞か自動詞か）による分類をするべきではない。「自他交替」をするか、「使役交替」をするかという基準だけを立てればいい。

非能格型RVCと非対格型RVCの使役交替は、石村の「原因主の導入」に相当する。この使役交替にかかる制約に関しては、後の章で論じる。ここでは、これらの自動詞型RVCの「擬似他動詞用法」を検討する。この用法について鈴木は次のように述べる（p. 178）。

C&H〔Cheng & Huang (1994)…木村注〕の分析では、非能格型RVCと非対格型RVCの一部は他動詞用法を持つとしているが、それらを通常他動詞用法とするには無理があるように思われる。こうした目的語NPは、状態変化とは無関係である意味的目的語か、主語の不可分離所有名詞に限定されるため

<sup>注28</sup> 原文のまま。正しくは、「できなければ」とあると思われる。

である。

〔…中略…〕

こうした意味目的語は非指示的であり、多くの場合省略可能なので、V2は主語NPを叙述するものとして解釈される。また不可分離所有名詞は通常主語の身体部位なので、V2は間接的ではあるにせよ主語NPを叙述していると見なせる。

〔…中略…〕の箇所には、次の例文が挙げられている。(47a, b)は、Cheng & Huang (1994: 201)の(23a, b)からの引用であるとのことである。下線は原文。

- (47) a. 我 吃膩了            馄饨面  
wǒ chīnìle            hún tún miàn  
私 食べる+飽きる-pfv ワンタン麵  
私はワンタン麵を食べ飽きた
- b. 张三 喝醉了        (酒)  
zhāng sān hē zuì le        jiǔ  
張三 飲む+酔う-pfv 酒  
彼は(酒を)飲んで酔った
- c. 他 唱哑了        嗓子  
tā chàng yǎ le        sǎng zi  
彼 歌う+噎れる-pfv のど  
私は歌って喉を枯<sup>(ママ)</sup>らした
- d. 他 忙晕了        (头)  
tā máng yūn le        tóu  
彼 忙しい+目がくらむ-pfv 頭  
彼は忙しくて(頭が)ぼーっとなった
- e. 小李 累坏了        身子  
xiǎo lǐ lèi huài le        shēn zi  
李君 疲れる+壊れる-pfv 体  
李君は疲れて体を壊した

(47)において述語の後ろに現れる名詞“馄饨面”“酒”“嗓子”“头”“身子”は非指示的 (nonreferential)、あるいは非特定の (nonspecific) であるというのである。鈴木は、このような文における動詞後の名詞〔句〕を、湯廷池 (2002) にならって「擬似目的語」と呼んでいる。自動詞型RVCがいつけん動詞の後ろに名詞〔句〕を持っているように見える場合でも、その名詞〔句〕は擬似目的語なのである。真性の目的語とは区別される。そのため、擬似目的語を持つ動詞は、他動詞とはみなさず、自動詞とみなすのである。だから、このような型の文における主語名詞句が動詞の後ろに置かれた文は、他動詞型RVCが起こす「自他交替」とは区別されて、「使役交替」と呼ばれるのである。このような「他動詞+自動詞→他動詞」

型のV1+V2文において、動詞後に現れる名詞句が通常他動詞文の目的語名詞句とは性格を異にしているという指摘は、山口 (1991: 121) や石村 (2000: 150-151) にも見られる。

ところが、たとえば“吃膩”の場合、目的語を指示的 (referential)、しかも specific なもので言うことも可能である。

- (48) 我 吃膩了            他 做    的 馄饨面  
 wǒ chīnìle            tā zuò de húntúnmiàn  
 私 食べる+飽きる-pfv 彼 つくる ~の ワンタン麺  
 私は彼のつくるワンタンメンを食べ飽きた

また、上で述べたように、鈴木はV1が他動詞である語も「非能格型RVC」にふくめている。(47a, b)のように、V1が他動詞である語の「疑似他動詞用法」は、V1が飲食行為を意味として表し、V2がその飲食行為による飲食した人 (生き物) の結果状態 (酔った、満腹になった等) を表し、(疑似) 目的語が飲食物を表す語に限られるようである。また、(47c-e)のように、V2がV1の動作あるいは状態変化の結果による身体の状態 (のどがかわる、めまいがする、疲れる) を意味として表し、(疑似) 目的語がV1の動作主体=V2の変化対象の身体部位を表す語に限られるようである。このような制約から、私はこれらを独立した型として立てることをせず、(47a,b)を「主語指向型 (A類)」、(47c-e)を「目的語指向型 (B類、C1類)」の下位類型にふくめることにする。つまり、鈴木の言うように単に目的語の表すものの特殊性ではなく、V1+V2文を構成する形態素の意味的特殊性なのである。

## 2.9. 動補型複合動詞の分類

木村 (2006: 90) で私は、動補型複合動詞が述語となる文において、述語が表す事象とその参与者との (意味的) 関係の型を次のように分類した。

- (49) a. 平行型……V2の「変化主体」がV1の「動作主体」と一致する。  
 b. 交差型……V2の「変化主体」がV1の「動作主体」と一致しない。(V2の「変化主体」がV1の「動作主体」以外のものと一致する。)  
 c. 所有型……V2の「変化主体」がV1の「動作主体」の一部(「譲渡不可能所有物」)である。  
 d. 評価型……V2がV1の「動作」を「限定」したり「説明」したりする。

(49)で「変化主体」と呼んでいる概念には、一般に「対象 (Theme)」や「経験者 (Experiencer)」といった概念がふくまれる。平行型には“喝醉 hēzùi”《飲んで酔う》とか“走累 zǒulèi”《歩き疲れる》とかいった語が所属する。平行型のV1が表す事象は、「主体」とでも呼べるものが唯一の参与者であるような事象である ((49)では「動作主体」としているが、実際には動作主体だけではないので、より広く「主体」とする)。そして、V2はその事象によって引き起こされる唯一の参与者の精神的・身体的・生理的变化を表す。(“喝 hē”《飲む》や“吃 chī”《食べる》といったV1は、参与者が二つ存在する事象のように見えるが、V2はかならずV1の「主体」に言及する。V1の「客体」に言及されることは無い。) 交差型には

“打破 dǎpò”《たたき壊す》や“踢倒 tīdǎo”《蹴り倒す》のような語が所属する。交差型のV2はV1の表す事象の主体については言及しない。主体以外の何らかのものに言及する。評価型には、“看完 kànwán”《見終わる》や“找到 zhǎodào”《探して見つける》のような語が所属する。V2は参与者の状態を描写するのではなく、V1の表す事象がどのような局面にあるか、あるいはどのような状態にあるかに言及する。木村(2006)でも述べたように、この分類においては、変化主体や「主体」が文中のどのような項として実現しているかについては言及していない。これらに対応する言語形式が文中に現れているかどうかとも問わない。だから、この分類はいかなる文型をも指定していないし、項構造とも対応していない。木村(2006)の発表後、この分類でc. 所有型を設定するのは不適切であると考えようになった。ここに所属するだろうと考えられる語を交差型から区別するのが困難だからである。所有型は、いわば交差型の特殊な場合であると考えべきである。あるいは、平行型と交差型は、所有型を中間に置いて連続していると考えべきである。したがって、本稿では所有型を設定せず、平行型、交差型、評価型の三つの型をたてる。意味的基準によるこの三つの型がどのような構文をとるかについては、第五章で論ずる。

前提として述べておくべきことがある。私がここで「型」と呼ぶものには、一定の固定した語が所属しているわけではない。ひとつの語が複数の「型」に所属していることがある。ある語がどの「型」に所属しているかは、語のみからは知り得ない（あるいは、〈複数の「型」に所属している〉ということを知り得るのみである）。文（あるいは句、節）のなかで機能することによって、はじめてその「型」がひとつにしばられる。時には、文脈や言語外の情報が与えられなければ「型」を確定することができない。だから、むしろ「動補型複合動詞の型」と言うよりは、動補型複合動詞「文（句、節）」の型と言うべきかもしれない。しかし、ここでは便宜上、これらを動補型複合動詞の型として記述をしていく。

前章で提示したA類、B類、C類の分類は、V1とV2とのあいだの結合性の高さやそれぞれの要素の独立性の高さを基準とした語としてのまとまりの程度にしたがって分けたものであった。したがって、A類～C類それぞれに平行型・交差型・評価型それぞれに分類できる語が所属している。しかし、V2の意味的な違いから、C類には評価型にふくまれる語が多く所属しているといえる（たとえば、アスペクト的な意味を持ったもの）。ただし、A類・B類所属の語にも評価型のものはある。

### 2.9.1. 平行型

平行型においては、V1にはさまざまなタイプの動詞（に対応する擬似独立形式）が用いられる。たとえば、“饿 è”《餓える》や“冻 dòng”《凍える、冷える》といったような動詞（あるいは形容詞）である。このような動詞が表す事象は、一個の参与者だけが加わるものが大部分を占める。その唯一の参与者は、その事象の「主体」と呼べるものである<sup>注29</sup>。参与者が二個存在する事象では、主体が対象を主体の体内に取り込む行為を表すもの（たとえば、“吃 chī”《食べる》や“喝 hē”《飲む》）であったり、その行為の段階では対象が観念上のものであったり（たとえば、“等 děng”《待つ》）、行為の対象というよりもその行為の背景となるもの（“走 zǒu”《歩く》）などであったりする。これらは、主体とは別の参与者が、主体による行為の影響（状態変化）を受けたり、打撃や接触等の働きかけを受けたりする「対象」と呼べるようなものではない。平行型において、V1が「対象」を参与者として持つような事象を表す動詞であること

<sup>注29</sup> ここで言っている「主体」には、一般に経験者 (Experiencer) と呼ばれるものがふくまれる。

もある。しかし、そのときV2が表すのは、V1の主体に関する描写である（“饿死 èsǐ”《飢え死にする》、“冻病 dòngbìng”《凍えて病気になる》）。V2がV1の対象を描写する場合、それは交差型となる（“饿瘪（肚子）èbiē（dùzi）”《餓えて腹がへこむ→おなかがすいてぺこぺこだ》、“冻红（手） dònghóng（shǒu）”《かじかんで手が赤くなる》<sup>註30</sup>）。だから、V1が主体・対象という二つの参与者を持つ事象を表し、かつV2が表す事象が主体も客体も描写し得るものである場合、V1+V2のみからは平行型か交差型かが定まらない。V1+V2が文の中に置かれなければならないのである。たとえば、“追累 zhuīlèi”《追い疲れる、追って疲れさせる》において、疲れるのが追っている人（もの）なのか追われている人（もの）なのかは、具体的な文脈の中に置かれなければ分からない。このとき、平行型の“追累”と交差型の“追累”とが同音異義語なのかどうかの問題になる。同一言語形式の意味的基準を用いると、この二つの“追累”には《甲が乙を追い、甲か乙のどちらかが疲れる》という意味を設定すればいいので、同一形式とみなせる。

### 2.9.2. 交差型

交差型においては、V2の表す事象がV1の表す事象の主体を描写していない。描写しているのは別の参与者である。V1の表す事象の対象であったり（“推开 tuīkāi”《押し開く》）、V1の主体の身体部分であったり（“哭哑 kūyǎ”《泣いて（のどが）かれる》）、事象間の因果関係のみで結び付いていたりする（“哭醒 kūxǐng”《（誰かが）泣いて目が覚める》）。事象間の因果関係のみで結び付いている場合、V2の表す事象はV1の表す事象のどの参与者にも言及していない。しばしば、動補型複合動詞には「使役義」があると言われる。しかし、ここに挙げた三例を見ても分かるように、動補型複合動詞が表す事象には使役と呼ぶのが適切ではないようなものもふくまれる。“推开”は、V1の主体が意図的にドアを開けるのだから使役と呼ぶのは差し支えない。しかし、“哭哑”におけるV1の主体は、V2の事象が起こることを意図したわけではないし、“哭醒”にいたっては、V1の事象はV2の事象にとってかなり偶発的な要因である。このような関係をすべてふくめて「使役」と呼ぶのは、やはり問題があろう。

### 2.9.3. 評価型

評価型においては、V2が表す事象は、V1の表す動作・行為を描写する。参与者を描写するのではない。C類の動補型複合動詞は、この評価型に属するものが多い（ただし、完全に一致するわけではない）。交差型と評価型の区別が難しいものもある。たとえば、V2が形容詞である“挖深了 wāshēnle”には《（穴などを）深く掘る》という意味（変化義）と《深く掘りすぎた》という意味（過分義）とがある。この後者の過分義は“V1+（度量・程度・色彩・味覚を表す）形容詞+了”という形式にかなり一定して付与される。この過分義の場合を交差型と評価型のどちらとすべきか。これは使用される構文や名詞句の意味にも左右されるかなり厄介な問題であるが、ここはとりあえず、変化義の場合を交差型、過分義の場合を評価型としておく。

評価型に属する動詞には次のようなものがある。

(50) 看见 kànjiàn《見て認識する→見える》、听见 tīngjiàn《聞いて認識する→聞こえる》、梦见 mèngjiàn

<sup>註30</sup> これらの語は、木村(2006)の段階では所有型とされていた。

《夢を見て認識する→夢に見る》、抓住 zhuāzhù 《捕まえて固定する→取り押さえる》、扶住 fúzhù 《支えて固定する→しっかりと支える》、记住 jìzhù 《覚えて固定する→記憶する》、碰到 pèngdào 《出会う+達成する→出会う》、找到 zhǎodào 《探す+達成する→見つける》、猜着 cāizhāo 《推測する+達成する→(答えを)当てる》、睡着 shuìzhāo 《眠る+達成する→寝付く》、碰着 pèngzhāo 《出会う+達成する→出くわす》、吃好 chīhǎo 《食べる+満足な状態に達する→じゅうぶん食べる》、看好 kànǎo 《観察する+満足な状態に達する→見極める》、说好 shuōhǎo 《話す+満足な状態に達する→きちんと話す、約束する》、看完 kànwán 《見終わる、読み終わる、診察し終わる》、写完 xiěwán 《書き終わる》、看仔细 kànzìxì 《注意深く見る、綿密に見る》、瞄准 miáozhǔn 《見つめる、ねらう+正確である→照準を合わせる、視線を集中する》、安排周到 ānpáizhōudào 《手配する、配置する+行き届いている→周到に人員配置する》、抓紧 zhuājǐn 《つかむ+きつい→しっかりつかむ、無駄にしない》、打扫彻底 dǎosǎochèdǐ 《掃除する+徹底する→徹底的に掃除する》、散尽 sànjin 《撒く+すっきり終わる→ばらまき終わる》、活够 huógòu 《生きる、生活する+じゅうぶんだ→じゅうぶんに生きる》

## 2.10. 動補型複合動詞分類に関する若干の問題点

ここでは、平行型と交差型の両方を取り得る動詞、動補型複合動詞を述語としてとる文の文型について若干の問題点を検討する。これらの問題は（特に二以降は）、先行研究において扱われてこなかったものである。しかし、私の分類法ではうまく説明を付けることができる。

最初に、平行型と交差型それぞれに所属する語を挙げる。ただし、使用される文型によっては、異なる型に解釈されるものもある。

### (51) 平行型

走累 zǒulèi 《歩き疲れる》、洗累 xǐlèi 《洗い疲れる》、跑累 pǎolèi 《走り疲れる》、喝醉 hēzuì 《飲んで酔う》、饿瘦 èshòu 《飢えて痩せる》、长斜 zhǎngxié 《(木などが)斜めに生長する》、冻病 dòngbìng 《凍えて病気になる》、听烦 tīngfán 《聞き飽きる》、唱烦 chàngfán 《歌い飽きる》、讲烦 jiǎngfán 《話し飽きる》、惊醒 jīngxǐng 《驚いて目が覚める》、冻木 dòngmù 《凍えてしびれる》、累倒 lèidǎo 《疲れて倒れる》、睡坏 shuìhuài 《寝て壊す/悪くする》、饿死 èsǐ 《飢えて死ぬ》

### (52) 交差型

晾干 liàngān 《干して乾かす》、哄着 hǒngzhāo 《あやして寝付かせる》<sup>註31</sup>、染红 rǎnhóng 《染めて赤くする》、吹掉 chuīdiào 《吹いて落とす》、洗湿 xǐshī 《洗って濡らす》、砍倒 kǎndǎo 《切り倒す》、炸断 zhàduàn 《爆破して折る》、踢碎 tīsuì 《蹴って粉々に砕く》、搬坏 bānhuài 《運んで壊

<sup>註31</sup> この場合の“着”は《寝付く》という意味と解釈して、交差型に入れる。

す》、点着 diǎnzháo 《点けて灯る、点火する》<sup>注32</sup>、沏醒 qīxiǎn 《(お茶を)濃くいれる》、放倒 fàngdǎo 《切り倒す》、磨坏 móhuài 《擦れてだめになる、つきまとして苦しめる》、坐塌 zuòtā 《座ってつぶす》、咳嗽醒 késouxǐng 《咳をして目を覚まさせる》、写折 xiěshé 《書いて(筆などが)折れる》、切钝 qiēdùn 《切って(包丁などの)切れ味が悪くなる》、吃坏 chīhuài 《食べて(お腹を)こわす》、抄酸 chāosuān 《書き写して(腕などが)だるくなる》、唱哑 chàngyǎ 《歌って(のどが)かれる》、扛肿 kángzhǒng 《担いで(肩などが)腫れる》、愁白 chóubái 《悩んで(頭髪が)白くなる》、坐麻 zuòmá 《座って(足などが)しびれる》、笑痛 xiàotòng 《笑って(腹などが)痛い》、气歪 qìwāi 《怒って(口などが)ゆがむ》

一、“洗累”《洗い疲れる》と“喝醉”《飲んで酔う》がともに平行型に入っている。両者ともV1は他動詞である。しかし、“洗累”と“喝醉”は、だいぶ振る舞いが異なる。前述したように、“喝醉”はV1の目的語“酒”をV1+V2の目的語として置いて、“喝醉酒”というように言える。しかし、“洗累”はV1の目的語“衣裳”をV1+V2の目的語としてその後ろに置いて、“?洗累衣裳”とはしづらいようである。鈴木(2004)のところで少し触れたが、V1が“吃”《食べる》や“喝”《飲む》など飲食行為を表す動詞である場合にかぎって、食べ物や飲み物を表す名詞をV1+V2の後ろに置くことができるようである。

二、交差型にある“咳嗽醒”《咳をして目を覚まさせる》は、使用される構文によって含意する意味に違いが出る。

(53) a. 昨天 夜里 他 把 我 咳嗽醒了 好 几次 [王砚农等 1987:348]

zuótiān yèlǐ tā bǎ wǒ késouxǐngle hǎo jǐ cì  
 昨日 夜 彼 ~を私 咳をする+目覚める-pfv ととも 何 度  
 ゆうべ、彼は何度も咳をして私を起こした

b. 他 从 睡梦 中 咳嗽醒了 [侯精一等编著 2001:283]

tā cóng shuìmèng zhōng késouxǐngle  
 彼 ~から 眠り 中 咳をする+目覚める.pfv  
 彼は咳で夢から覚めた

(53a)では、せきをした(V1の主体)のが「彼」で、目が覚めた(V2の変化主体)が「私」であることが一意的に決まる。(53b)の意味は、言語外の状況によって《他の人が咳をして、その音で彼が目覚めた》とも《彼が自身の咳で目覚める》とも解釈できそうである。これは、単に語用論的な問題なのであろうか。つまり、(53b)のような構文では、主語はV2の変化主体であることのみが意味として表されている。V1の主体であるか否かは、意味として表されていない。したがって、この文の主語がV1の主体であるか否かは、言語外現実によって決まってくるのである。(53b)の解釈において、V1の主体とV2の変化主体が同じ場合は平行型に属し、異なる場合は交差型に属するのである。

三、“听烦”《聞き飽きる》、“唱烦”《歌い飽きる》、“讲烦”《話し飽きる》等の“~烦”は、平行型に分類した。次のような容認性の判断からである。

<sup>注32</sup> この“着”は《火がつく》という意味であり、交差型になる。

(54) a. ?我 唱烦了 他  
 wǒ chàngfánle tā  
 私 歌う+飽きる-pfv 彼  
 私が歌って彼をうんざりさせた

b. 他 唱烦了  
 tā chàngfánle  
 彼 歌う+飽きる-pfv  
 彼は歌い飽きた

(55) a. \*老师 讲烦了 我  
 lǎoshī jiǎngfánle wǒ  
 先生 話す+飽きる-pfv 私  
 先生が話していて、私は嫌になってしまった

b. 我 讲烦了  
 wǒ jiǎngfánle  
 私 話す+飽きる-pfv  
 私は話し飽きた

上の(54a)(55a)の文は、主語がV1の主体を表し、目的語がV2の変化主体を表すことをねらった文である。つまり、交差型の解釈を施さざるを得ないような形式の文である。このような形式の文では、(54a)(55a)ともに、容認度が下がる。(55a)にいたっては、完全に非文である。しかし、(54b)(55b)のように、文の主語がV1の主体であり、かつV2の変化主体であるような平行型の解釈ができる文は容認可能である。したがって、これらは平行型に属すると考えられる。しかし、“～烦”の中にも、V1の主体とV2の変化主体が異なるという解釈を受ける文をつくる動詞がある。

(56) 别 把 他 催烦了 [侯精一等编著 2001:89]  
 bié bǎ tā cuīfánle  
 ～するな ～を 彼 催促する+飽きる-pfv  
 催促して彼に嫌がらせないように

(57) 一个 话题 讲了好几遍 把人都讲烦了 [前掲書:247]  
 yí ge huàtí jiǎngle hǎo jǐ biàn bǎ rén dōu jiǎngfánle  
 一 量詞 話題 話す-pfv とても 何 量詞 ～を 人 みな 話す+飽きる.pfv  
 同じテーマを何度も話し、聞く人に飽きられてしまった

(58) 妈妈 一天到晚 唠唠叨叨， 把女儿说烦了 [王砚农等 1987:134]  
 māma yì tiān dào wǎn láoláodāodāo bǎ nǚr shuōfánle  
 母 一日 ～まで 晩 くどくど言う ～を 娘 説教する+飽きる-pfv  
 母が一日晩までくどくどと説教をして、娘をうんざりさせた

(56)は、聞き手の行為を禁止するために発した文であり、V1の動作主は聞き手である。V1の動作主は文の上には表されていない。V2の変化主体は“他”であるので、V1の主体とV2の変化主体は異なる。つまり

交差型である。(57)は、上で出てきた“讲烦”である。この文にも“把人”が出てくるが、ここでの“人”は、不特定の人を指し示している。この文では、文意からV1の主体はV2の変化主体“人”とは異なることが分かる。つまり、“讲烦”は(55b)の文においては平行型、(57)の文においては交差型ということになる。(58)は、“把”が“女儿”という特定の指示物を持つ目的語をとる。上の二例と同様に、V1の主体とV2の変化主体が異なる。つまり、交差型である。このように、同じV2であっても、結合するV1によって、あるいは使用される文によって平行型であったり、交差型であったりするのである。

四、“踢碎”《蹴って粉々に碎ける》を述語にした文では、目的語(碎けたものを表す)を述語の後ろに直接置くと容認不可能になる。前置詞“把”を用いた構文にしたり、受身文にしたりしなければならない。また、動詞コピー構文を用いて蹴る対象を導入すると、描写する事実にも違いが出てくる。

(59) a. \*我 踢碎了 玻璃 窗  
 wǒ fīsuìle bōli chuāng  
 私 蹴る+碎ける-pfv ガラス 窓  
 私はガラス窓を蹴り碎いた

b. 玻璃 柜 被 踢碎了 [侯精一等编著 2001:447]  
 bōli guì bèi fīsuìle  
 ガラス 戸棚 ~される 蹴る+碎ける-pfv  
 ガラスの戸棚は蹴飛ばされて粉々になった

c. 孩子们 踢球把 人家的玻璃 踢碎了 [王砚农等 1987:311]  
 háizimen fī qiú bǎ rénjiā de bōli fīsuìle  
 子供-たち 蹴る 球 ~を 他人 の ガラス 蹴る+碎ける-pfv  
 子供たちはボールを蹴ってよその家のガラスを割った

(59b)の場合、主体は“玻璃窗”を直接蹴っていると解釈されるだろう。しかし、(59c)の場合、主体は直接ガラス窓を蹴ってガラスを割ったのではない。ボールを蹴って、そのボールがガラス窓に飛んでいき、ガラスを割ったのである。このような動作行為の間接的な結果でさえも複合動詞で表現することができる。

五、“睡坏”《寝て壊す》の場合も、“睡坏了我的腰 shuìhuàile wǒ de yāo”《寝て腰を痛めた》という文もつくれるし、“睡坏了床 shuìhuàile chuáng”《寝てベッドを壊した》というような文もつくれる。ともに交差型ではあるが、前者は再帰的な文なのであり、V2の変化主体“腰”はV1の主体“我”の身体部分である。このように、同じ型に属しながら、参与者の違いによってV2の変化主体とV1の主体との関係がかなり異なる形式も存在する。

六、上で述べたように、秋山(1998)等の先行研究では、結果複合動詞のV2を非対格自動詞としている。(他の文献では、単に自動詞・形容詞と記述するにとどめているものもあるが。)ところが、沈(1993)には、V2が他動詞である例が出てくる(沈 1993:18)。

(60) a. 张三 闹忘了 李四 要 说 的话  
 zhāngsān nàowàngle lǐsì yào shuō de huà  
 張三 騒ぐ+忘れる-pfv 李四 ~べし 話す の 話  
 張三が騒いだので李四は話すべきことを忘れた

- b. 李四 闹忘了 要 说 的话  
 lǐsì nàowàngle yào shuō de huà  
 李四 騒ぐ+忘れる-pfv ~べし 話す の 話  
 李四は騒いで話すべきことを忘れた

V2 “忘” は他動詞である。しかし、これも(60a)(60b)をそれぞれ交差型と平行型に所属させて問題が無い語である。(60a)では、張三が騒ぐという事象が、李四が話すべきことを忘れたという事象の原因となっている。V2の変化主体は李四であり、V1の主体が張三であるから、V2の変化主体がV1の主体と一致しない。したがって、交差型である。また、(60b)ではV1の主体もV2の変化主体もともに李四であるから平行型である。平行型も交差型も、V2の表す事象が参与者を二つ以上持つことを禁じてはいない。実際、李(1980)ではV2が他動詞であるタイプがしめされている。たとえば、“听懂了我的意思 tīngdǒngle wǒ de yìsi” 《聞いて私の言った意味を理解した》である。また、目的語として数量をとるもの(61a)やV2がV-O型の離合動詞である語もしめされている(61b)。

- (61) a. 写落(一个字) xiěluò (yí ge zì) 《(一文字)書き落とす》、喝剩(一瓶) hēshèng (yì píng) 《(一瓶)飲み残す》、念落(一段) niànluò (yí duàn) 《(一段)読み落とす》  
 b. 读串了行 dúchuànle háng 《行を読み違えた》、说走了嘴 shuōzǒule zuǐ 《話して口をすべらせた》、喝上了瘾 hēshàngle yǐn 《飲んで病みつきになった》、念入了神 niànrùle shén 《勉強して夢中になった》、办砸了锅 bànzále guō 《やって失敗した》

(61b)の“了”の挿入位置を見ても分かる通り、V-O型複合動詞がV2となる場合、複合するのは前部要素のVだけである。O(後部要素)は語の外にはじき出されてしまうのである。このような語の場合も、V2の表す事象の変化主体(ここでは変化主体というよりは動作主体に近くになっているが)がV1の主体と等しいので、平行型ということになる。しかし、(61a)にしても(61b)にしても、形式上は(名詞要素を後ろにしたがえることから)V2を他動詞とみなせるけれども、意味的には動詞要素と名詞要素が一体となって自動詞的になっている。自動詞的になっているからこそ、V2として用いることができるのかもしれない。ただ、形式上他動詞であろうとも、私の分類には抵触しない。

## 第三章 語の認定

この章では、前の章までの議論をふまえて、語という単位をどのように認定すべきか検討し、また語認定のさいに生ずる問題点を論じる。まず、前章まで使ってきた「独立性」「同一性」「類似性」といった概念に定義を与える。これらは、語や複合語について考えるうえで必要な概念である。1.3.3.において、語を「ある程度以上の独立性を持った言語形式であり、もうそれ以上、同じ程度以上に独立性の高い言語形式に分析できない言語形式」と定義した。「同じ程度以上に独立性の高い言語形式に分析できない」とは、ある一定以上のまとまりを有しているということと同義である。ただし、このまとまりかたが同一言語内でも多様なゆえに、語認定にはさまざまな問題がつきまとう。ここでは、母語話者が直観的に語であると認める形式に共通に備わっている特徴を調べることによって、つまり語に備わっているべき特徴を挙げることによって語を認定していく。

### 3.1. 言語形式の独立性

言語形式は、その独立性においてさまざまに異なる。そして、同一の範疇に属する言語形式間においては、その独立性の程度はほぼ共通している。独立性をはかる指標には、音韻的・形態的・統語的・意味的分野にわたる現象がある。くわしくは、次章で語と語でない言語形式とを区別する指標として検討する。ここでは、その輪郭を述べるにとどめる。

ある言語形式Aが別の言語形式Bと結び付いた場合、音形が不変であるか、音形が変異する場合でも、その言語における規則的な変化にしたがって変わる場合は、特殊で個別的な変化をする言語形式よりも独立性が高い。また、AとBの境界がはっきりしている場合も独立性が高い。日本語の「机が」「私を」「車に」といった「名詞+格助詞」という言語形式において、「が」「を」「に」の音形は変わらず、それ自体はアクセントを持たずに前に来る名詞のアクセントにしたがって規則的に変異する（ツクエガ（机が）、カラスガ（鴉が）、ハナシガ（話が））。また、名詞と格助詞の境界もはっきりしている。したがって、「が」「を」「に」の独立性はかなり高い。

一般に、結び付く相手Bの独立性が高ければ、言語形式Aの独立性も高い。つまり、言語形式Bが独立形式・独立形式の連合体である場合である。あるいは、言語形式Bが範疇を成している場合である。結合不能であることが意味的に説明できる場合をのぞいて、ある範疇のメンバーすべてと結合することのできる言語形式は独立性が高い。だから、上の「が」「を」「に」は、この点からも独立性が高い。また、独立性が高いということは自由度も高いということである。だから、言語形式Aが複数の範疇のメンバーと結び付き得る場合は、独立性もその分高くなる。あるいは、言語形式Aと結合相手Bとのあいだにほかの要素が入り込み得る場合も、独立性は高い。あいだに入り込む形式の独立性が高ければ高いほど、Aの独立性も高い。日本語の「の」は、すべて同一形式であることを前提とすれば、「これは犬のえきです」「あれは私のです」「しゃべるのが遅い」「昨日あなたに話したのを覚えていますか」などさまざまな言語形式〔連合〕と結び付き得る。また、「犬の」は「犬だけの」「犬ばかりの」とも言える。したがって、「の」の独立性は高い。

## 3.2. 言語形式の同一性

### 3.2.1. 同一性の形態的基準

ここで言う同一性には、パロール上の変異体をふくめない。つまり、発話一回ごとの発音の変異や、前後の音環境によって生ずる異音といったレベルでの違いである。母語話者自身は、これらの違いをいつもは認識せずに言語活動を行っている。したがって、母語話者にとっては、このレベルでの言語形式の同一性の問題は生じない。

母語話者の言語習得の上で、そして分析者の分析の上で問題となってくるのは、体系の圧力によって語形が変わらざるを得ない場合である。その語形の変異が「体系からの圧力」であることが保証されるかぎりにおいて、当該語形群（変異体）はあるひとつの語彙素（形態素）の変異体（異形態）とみなすことができる。つまり、言語形式の同一性が保証されるわけである。

服部 (1950 [1960: 463-470]) は、このような変異体を「〔選び〕代り語形」「弱まり語形」「連声語形」「結合語形」のように分類している。これらは「音韻体系の束縛」から語形を変えるものであり、服部は「同一の単語」としている。しかし、服部が「弱まり語形」の例として挙げている「行くのです」～「行くんです」は、服部自身も述べているように、この二つの語形がこの位置で併存するのであり、「代り語形」のように別の語形を排除することはない。また、「行くのです」と「行くんです」は、別の文体をしていることがかなり明瞭である。この点で、英語の不定冠詞 a / an とは異なるのである。したがって、「の」と「ん」は異なる言語形式とするべきである（「ん」を語とするかどうかはここでは問わない）。同様に、「それは」と「そりゃ」を同一形式とするのは無理である。「それは」が「それ」と「は」の二語にはっきり区切れるのに対し、「そりゃ」は融合して一語である。両者を「連声語形」だとして同一形式としてはいけない。文体も異なるし、同じ位置で排除し合わない。つまり、同一形式と判断するには「体系からの圧力（音韻体系の束縛）」をかなり厳格に適用しなければならないのである。その音韻上の変異が、その言語一般の音韻規則から導かれるのでないならば、別の基準（排他的にその位置を占めるか、〔文体的〕意味は同じか）で同一形式かいなかを判断しなければならない。

もうひとつ、服部が「語形変化」として扱う現象がある。服部は、「読む〔本〕」「読み〔なさい〕」「読め」「読ま〔ない〕」の yomu、yomi、yome、yoma- を一つの群とみなし、おたがいにほかの「変化形式」と呼んでいる。服部は次のように言う。（pp. 469-70）

これらはいずれも、同じ単語の形が入れ替るだけで、意味は変化しないが、「形が変化する」場合には意味も多少変化するのが普通である。（厳密にいうと、それらは一つの群をなす別々の形式（単語）であって、同一の形式が「変化する」のではない。）

しかし、yomu、yomi、yome と yoma- とは次元を異にしている。前者は語であるが、後者は語の一部である。また、yomu、yomi、yome が所属する群は、たとえば yomareru、yomare、yomarero というように、yoma- をふくむ語全体と一対一の関係を持っている。だから、yomu (yomi、yome) と yoma- をふくむ yomanai、yomareru、yomaseru などは別の群に属しているのである。

ただし、これらにふくまれる yoma- (yomanai における)、yomi- (yominasai における)、yomu-

(yomuna における)、yome- (yomeru における)、yoN- (yonda における)、yom- (yome、yomoo における) などは同一言語形式とすべきである。これらの変異体は、たしかに「音韻体系の束縛」によるものではない。しかし、この環境でこの変異体を要求する力は音韻体系同様に強く、それゆえ、これらの変異体はほかの形を排除して、この形でのみこの環境に位置する。yoma-nai は \*yomu-nai でも \*yomi-nai でもないのである。そして、この yoma- ……は付属形式ではあるものの範疇をつくっている。この範疇のメンバーはすべての動詞であり、kaka- (書か)、tataka- (叩か)、tabe- (食べ) などが属する。つまり、独立性がほかの付属形式よりも強いのである。したがって、yomu はほかの yoma-、yomi-、yomu-、yome-等を統一する力も強いことになる。このように語形の一部は同一言語形式であるが全体の言語形式が異なっているものを「言語形式群」と呼ぼう<sup>注33</sup>。yome と yomoo は、-e や -oo を付加しても語幹 (yom-) の音変異 (母音挿入) を起こさないのである。

### 3.2.2. 同一性の意味的基準

本稿では、語の同一性に対応する概念として、擬似独立形式の〈類似性〉という概念を提案する。上で述べたように、語 (語彙素) のレベルでは、その同一性を問題にすることができる。(語形は違って) 同一である語 (語彙素) は、文中の異なる階層に属し、別の (あるいは同じ) 文法範疇に属する語とさまざまな結合型で結び付いていても、同じ文法範疇 (品詞) に属し、同じ意味を持つ。つまり、大ざっぱに言えば、機能と意味を同じくし、同じ音形か規則的に変異したことが分かる音形を持つ言語形態は同一言語形式であると認めることが出来る。また、同一言語形式に準じるものとして言語形式群を認めた。

語の同一性における意味的基準とは何か。

本稿では、語の意味を次のように定義する。

(1) 語の意味とは、その語を対象 (事象) に使用するための適用条件である。

「タコ」という音形を使用できる対象には、「凧」、「蛸」、「胼胝 (皮膚にできる硬くなった部分)」と表記できるものがある。「タコ」を凧に適用するための条件、「タコ」を蛸に適用するための条件、「タコ」を胼胝に適用するための条件、これらはたがいに違う。このとき、「タコ」は同音異義である。凧は、①その主な部分が紙、あるいはビニール等の軽いものでできている。②竹あるいはプラスチックの骨に、①が張られている。③ ②に長い糸をつけて、空 (空中のかなり高い部分) に上昇させて遊ぶ遊具である。ほかにもあるだろうが、ある対象が①②③……のような性質を持っている場合、「タコ」という音形をその対象に適用させることができる。このとき注意すべきことは、凧は①②③……の諸性質を総体として持っているということである。記述の便宜上、①②③のように分けたが、語の意味自体が①②③……のようにさらに小さい部分 (性質) に分割できるということではない (つまり、服部 (1968) や國廣 (1982) が述べるように

〈「意義素」がさらに「意義特徴」に分析できる〉ということではない)。語の意味と、語の意味を述べること (意味の説明・記述) とを区別するべきである。蛸は、次のような諸性質を持つ。①海に棲む軟体動物である。②頭から、吸盤を持った八本の脚が出ている。③ (日本人はよく) 食用にする。ある対象が、①②

<sup>注33</sup> ただし、~-nai-i、~-nasa[-i] は派生形式である。yomana- は、yomana-kaqta、yomana-kereba、yomanai-de などのように yomana- を同一言語形式とする新たな言語形式群をつくる。したがって、yomanai は yomu、yonda、yomeba、yome などとは別の言語形式群に属しているのである。しかし、これらは yom- という語根を共有するという点からは、同じ言語形式群に属しているとも言える。

③……のような性質を持っている場合、「タコ」という音形をその対象に適用させることができる。なお、①に「軟体動物」とあるが、これは話者が正確な生物学的知識を持っていないと「タコ」を蛸に適用できないということではない。これは、「からだ全体が柔らかい生き物」とでもすべきかもしれない。このように名詞の意味においては、語の意味を（話者、あるいは社会が共有する）百科事典的知識から区別することは非常に難しい。というよりも、できない。子供は、言語外現実に対する百科事典的知識を増やし、正確にしていくにつれて、語の使用（つまり、語の意味に関する知識）も正確になっていく（社会のほかの構成員（おとな）との齟齬が少なくなっていく）、という事実があるからである。

「タコ（凧）」と「タコ（蛸）」は、全体として適用条件が等しくない（重ならない）。したがって、「タコ」は同音異義である。同様のことは、「タコ（豚胝）」にも適用できる。なお、「全体として」と書いたのは、部分的には凧と蛸に共通する性質があるからである。たとえば、①大きさに多様性のある（小さいものからかなり大きなものまでである）物体である。②日本でも見られる……等である。しかし、①②の性質を持ったものならば、凧と蛸以外にもいくらでも挙げられる。「鮭」「犬」「花」「石」などである。このことから、「タコ」が同音異義であることが論証される。

以上から、語の同一性を判定する意味的基準を次のように定める。

- (2) a. その音形を対象（事象）に使用するための適用条件が二つ以上あり、それがおたがいに全体として等しくない（重ならない）。このとき、その音形に対応する語は同音異義である。
- b. 部分として等しい適用条件がある場合でも、その条件によってほかの対象にも適用することができるならば、その音形に対応する語は同音異義である。

### 3.3. 言語形式の〈類似性〉

語と似て非なるものとして擬似独立形式というものがある。本稿では、語の「花」と語の構成要素である「花見」の「花-」とを同一言語形式であるとは認めない。「花-」は付属形式であり、語の構成要素である。しかしながら、母語話者は「花」と「花-」とのあいだになんらかの関連性を直観するであろう。この直観は、音形の類似と意味の類似から来るものである。湯川(1971)は「花」と「花-」が意味論的に同一であるとは認められないという趣旨を述べている(1.3.参照)。「花見」の「花-」は《桜》を意味するからである。しかし、それでも「花見」の「花-」は花の一種であり、《きれいなもの、見るに値するもの》ならば何でもいいということにはならない。だから、意味が変異するとしてもでたらめに変異するわけではないのである。対応する語（「花」）の意味にある程度縛られることになる。独立形式（「花」）と擬似独立形式（「花-」）のあいだに見られるこのような関連性を〈類似性〉と呼ぼう。類似性には次の二種類がある。擬似独立形式と対応する語との類似性と、同じ（あるいは一部が同じ）音素連続を持つ語幹（これを「類似語幹」と呼ぼう。）どうしの類似性である。ここで特に問題になるのは、擬似独立形式と対応する語との類似性である。

#### 3.3.1. 類似性の形態的・機能的基準

それでは、類似性を持っていることをその形態的特徴・機能的特徴から判断することはできるだろうか。

「もみじ狩り」「キノコ狩り」「イチゴ狩り」などの「-狩り」は、動詞「狩る」に対応している。/kar-u/ の名詞形 /kar-i/ が連濁を起こした形 /-gari/ であると判断できる。そして、「-狩り」も「狩る」と同様になんらかの動作・行為を表している。「狩る」対象を前部要素として、「名詞性語幹+狩り」《名詞性語幹が対応する事象を狩る》（狩るが対応する事象は、名詞性語幹が対応する事象にともなって変わる）という形と意味の語をつくるのである。これが「-狩り」の持っている機能である。このような機能は「-狩り」を構成要素とする語がすべて共通に持っているものであり、対応する語「狩る」とも一部が共通している。「狩る」も狩る対象を表す名詞と統語的に結合し得る。「狼を狩る」「ウサギを狩る」などのように「～を狩る」という形においてである。「ウサギ跳び」の場合は「名詞性語幹+跳び」という形であるが、意味は《名詞性語幹が表す事象のように跳ぶ》であるから、「～狩り」とは結合型を異にしている。このとき、「-狩り」を他動詞性成分、「-跳び」を自動詞性成分と区別することが可能かもしれない。さらに複合語全体の文法範疇によっても、構成要素の機能（および結合型）は異なり得る。同じ「名詞性語幹+動詞性語幹」《名詞性語幹が表す事象を対象として動詞性語幹が表す事象が起こる》という形式においても、複合語全体が名詞であれば、対応する事象は《所産》なのか《行為者》なのか《事態》なのかといったことが問題になる。したがって、類似性の機能的基準としては次の三つが考えられる。①その語幹自体の品詞性は何か。②どのような品詞性・意味の語幹と結合し得るか（結合型は等しいか）。③複合語全体の品詞（文法範疇）は何か。この三つの基準による判定の結果が等しければ、その形式どうしは類似性が高いということになる。「ウサギ跳び」「三段跳び」「（走り）高跳び」などは②の基準から類似性は多少低いと判断される。

ここまでで注意していただきたいことは、語内部に生じる現象についての事実は、文法（統語論）の事実と異なり、規則ではなく傾向が支配するという点である。

### 3.3.2. 類似性の意味的基準

擬似独立形式とそれに対応する語のあいだの類似性の判断においては、言語形式の同一性の判断基準をそのまま適用することはできない。意味的基準の場合は特にそうである。まず、語の構成要素（擬似独立形式）の意味は類的・総称的（generic）な意味しか表し得ない、という事実を前提とする。「ネズミ捕り」「ガラス窓」「草むしり」のような語における「ネズミ-」「-捕り」、「ガラス-」「-窓」、「草-」「-むしり」は、対応する語とほぼ等しい意味内容を保持しているといえるだろう。しかし、「ウサギ跳び」「もみじ狩り」「碁敵」「赤靴」における「ウサギ-」「-狩り」「-敵（がたき）」「赤-」といった語幹の意味が表す事象は、それぞれ「ウサギ」「狩る」「敵」「赤〔い〕」という語が表す事象とはだいぶずれが出てくる。「ウサギ-」は「ウサギ」の跳ぶ形状との関連であるし、「-狩り」は「狩る」が表す行為からの比喩的な連想かもしれない。「敵」と「-敵」、「赤〔い〕」と「赤-」との意味的共通性もかなり希薄、部分的である。いっぽう、類似語幹どうしの類似性も問題となる。「もみじ狩り」における「-狩り」と「キノコ狩り」「イチゴ狩り」における「-狩り」との意味的な共通性は、《～を（観賞するため、手に入れるために）求めて、～がある現地に行楽として赴く》というようなものだろう。《～》には、これらの語の前部要素が表すものが入る。しかし、こう記述すると、「言葉狩り」「魔女狩り」「おやじ狩り」などにおける「-狩り」が説明できない。両者は同音異義なのだろうか。「言葉狩り」「魔女狩り」「おやじ狩り」の「-狩り」とも共通した意味を記述すると《～を求めて行動する》というような意味にならざるを得ない。しかし、《～を求めて行動する》という意味ならば「宝探し」「犯人探し」における「-探し」にもあてはまってしまう。したがって、同一性の意味

的基準をそのまま適用すれば、「キノコ狩り」「イチゴ狩り」における「-狩り」と、「言葉狩り」「魔女狩り」における「-狩り」とは同音異義ということになる。「-狩り」のような比較的生産性の高い形式には、このように同一性基準をそのまま当てはめることも可能であろう。しかし、「-敵」のように生産性の低い形式はどうだろうか。「-敵」も「碁敵」「恋敵」「商売敵」どうしとでは、二人の関係性がだいぶ異なる。「碁敵」はむしろ友人どうしである場合が多い。だから、「-敵」の意味の共通性は《(競う)相手》というくらいのものであろう。しかし、そう記述すると「対戦相手」における「-相手」もふくまれてしまう。しかし、この場合「碁敵」「恋敵」「商売敵」のうちのどれとどれを同音異義とすればいいのか。それぞれ少しずつ「-敵」の対応する事象は異なっているのである。このような形式の場合は、語における同一性基準をそのまま当てはめることはできないようである。「赤靴」では、赤靴の色はむしろ茶系統である。「赤靴」「赤信号」「赤潮」などの「赤-」が対応する事象(つまり色)の共通性は、《黒・白・青に対立する色》とでも記述するしかないだろう。このように、複合語の語彙化が進めば進むほど、構成要素(語幹)の意味は、対応する語の意味とは離れ抽象的になっていく。また、類似語幹どうしの意味の共通性も抽象的になっていく。「抽象的」とは、擬似独立形式と対応する語が対応する事象間、あるいは類似語幹が対応する事象間に共通性が少ないということである。「碁敵」「恋敵」「商売敵」の「-敵」に対応する事象の共通性は《(競う)相手》でしかなかった。したがって、擬似独立形式の類似性(対応する語・類似語幹どうしとの類似性)を判定する意味的基準は、語における同一性基準ほど厳密には立てられない。

### 3.4. 日本語における形態分析の問題

ある言語形式の連続が、語なのか語でない形式(句、付属形式)なのか判定することは、語形成論の分野での重要なテーマのひとつである。

日本語では、複合語や派生語の形成過程において、音交替や韻律変化を起こしたり、語幹の異形態が現れたりする。ここでは、日本語の形態分析において、語認定のさいにこのような音韻上・形態上の特徴を判定基準に使うことが困難であることを論じる。

#### 3.4.1. 連濁

音交替としては、一部に連濁現象が見られる(ナガ+クツ→ナガグツ(長靴)、ワ+カシ→ワガシ(和菓子))。しかし、複合語がすべて連濁を起こすわけではない。たとえば、洋語(外来語)を構成成分とする複合語や、漢語を構成成分とする複合語のほとんどは連濁を起こさない(テレビ+カメラ→テレビカ[\*ガ]メラ、シゼン+カンキョー→シゼンカ[\*ガ]ンキョー(自然環境))。また、後部要素〔の二モーラめ以降〕に濁音をふくむ場合も連濁を起こさない(ヒト+サガシ→ヒトサ[\*ザ]ガシ(人探し)、ハナシ+コトバ→ハナシコ[\*ゴ]トバ(話し言葉))。また、前部要素と後部要素が並列の関係になっているときも連濁は起こらない(オヤ+コ→オヤコ[\*ゴ](親子) cf. マイゴ(迷子))<sup>注34</sup>。しかし、このような、語種制限や「一定の範囲に同じ音韻特徴が複数起こることができない」という OCP (Obligatory Contour Principle) と呼ばれる制約や、語構成の意味的な制約でも説明のつかない連濁阻止の現象もある。たとえば、アマ+カサ→アマガサ(雨傘)、カラ+カサ→カラカ[\*ガ]サ(唐傘); オヤ+トリ→オヤドリ(親鳥)、コ

<sup>注34</sup> 連濁の制約に関しては、窪田・太田(1998: 124-128)を参照。

+トリ→コト [\*ド] リ (小鳥) などである。

### 3.4.2. アクセントの変異

韻律変化としては、複合語アクセントがある<sup>注35</sup>。日本語の複合語においては、基本的に複合語全体に、前部要素や後部要素に対応する語のアクセントとは関係のないアクセントが付与される。窪蘭 (1995,1998) では、複合語へのアクセント付与を後部要素のモーラ数、音節数、語種などから規則的に導けるとしている。たとえば、後部要素が一モーラあるいは二モーラである場合 (後部要素が外来語の場合、二モーラ二音節である場合)、複合語アクセントは基本的に前部要素の最後に置かれる。<sup>注36</sup>

- (3) a. ネ]コ+セ]→ネコ]ゼ (猫背)、ヨ]ソ+ミ→ヨソ]ミ (よそ見)  
ブ]ンガク+ブ]→ブンガク]ブ (文学部)、アメリカ+シ→アメリカ]シ (アメリカ史)  
b. ハ]ル+カゼ→ハル]カゼ (春風)、カンダ+カワ]→カンダ]ガワ (神田川)  
イギリス+ジ]ン→イギリス]ジン (イギリス人)、カ]ンシャ+サイ→カンシャ]サイ (感謝祭)

しかし、これには例外がいくらかでも見つかる。

- (4) a. ワキ]+ミ→ワキミ] (脇見)、オ]ク+ハ]→オ]クバ (奥歯)、ユビ]+ワ]→ユビワ (指輪)  
ア]オ+タ]→アオタ (青田)、ヨコ+メ]→ヨコメ (横目)  
ジ]ンジ+カ]→ジンジカ (人事課)、スペ]イン+ゴ→スペインゴ (スペイン語)  
b. エド+カワ]→エドガワ (江戸川)、スマレ+イロ]→スマレイロ (すみれ色)  
ミ]ケ+ネ]コ→ミケネコ (三毛猫)、エ]+モ]ジ→エモ]ジ (絵文字)  
イコク+シュミ→イコクシュ]ミ (異国趣味)、テーセー+キ]ジ→テーセーキ]ジ (訂正記事)

また、上で挙げた「アマガサ」「カラカサ」「オヤコ」は複合語アクセント規則が適用されれば、「アマ]ガサ」「カラ]カサ」「オヤ]コ」となるはずであるが、私の発音では「アマガサ」「カラカサ」「オヤコ」というアクセントである。ただし、前二者は「アマ]ガサ」「カラ]カサ」という発音も観察される (上野 2003)。

これに対して、後部要素が三モーラ以上である複合語は、後部要素が対応する語が無アクセントか語末アクセントならば、複合語アクセントは後部要素の第一モーラに置かれる。

- (5) ハコイリ+ムスメ]→ハコイリム]スメ (箱入り娘)  
シャ]カイ+モンダイ→シャカイモ]ンダイ (社会問題)  
サ]ウジ+アラビア→サウジア]ラビア (サウジアラビア)

いっぽう、後部要素 (が対応する語) が語頭や語中にアクセントを持つ場合、後部要素 (が対応する語)

<sup>注35</sup> 例はすべて東京アクセントである。// は声の下げを指示するアクセント核である。従来「<sup>1</sup>」と表記されていたものであるが、入力の便宜上、代用として用いる。この代用は上野 (2003) にならったものである。アクセント核については、服部 (1955)、上野 (1977,1980,2003)、早田 (2000) を参照していただきたい。

<sup>注36</sup> 複合語アクセント規則に関しては、窪蘭 (1995:第2章,1998:112-118) を参照。

のアクセントがそのまま生きて、複合語全体のアクセントとなる。

(6) ヤ]マト+モノガ]タリ→ヤマトモノガ]タリ (大和物語) (早田 1992 [2000:199])

この後部要素の長い複合語アクセントの規則は、かなり強力な規則であり、語種制限も受けず、新語にも規則的に適用され、複合語のみならず「語幹+接尾辞」「接頭辞+語幹」といった語構成の合成語にも適用される。しかし、(4)にも見たように、後部要素の短い複合語には適用されない。また、早田(1992)で論じられているが、同じ「シ」という音を持った後部要素でも、「氏」「市」「史」「紙」はこの順に(音韻的に)独立性が弱くなる。「氏」はその前に来る要素(が対応する語)のアクセントを変えない。ただし、平板型(無アクセント)の場合は、前部要素の最後にアクセントが置かれる。

(7) タ]ヌマ+シ]→タ]ヌマシ (田沼氏)、ヤマ]ザキ+シ]→ヤマ]ザキシ (山崎氏)  
イトー+シ]→イトー]シ~イトー]シ (伊藤氏)、キムラ+シ]→キムラ]シ (木村氏)

しかし、「氏」でも個人名ではなく、一族、一家を表す「氏」の場合は、語として「熟合」し、前部要素のアクセントを消す(トク]ガワ+シ]→トクガワ]シ。「家」も同様)。

このような音韻的な現象においては、その現象(連濁、アクセントの変異)が起こっていれば一語である。しかし、〈その現象が起こっていなければ語連続(句)である〉とは言えない。意味的・形態的に一語化されたあとに音韻的にまとまっていくというタイムラグがあるためなのかもしれない(カ]レシ>カレシ(彼氏)への変化など)。また、前部要素や後部要素がさらに枝分かれ構造をしていて、線条的に長い形をしている複合語は、語構造(意味)と韻律構造のあいだに齟齬(ミスマッチ)を生じやすい。

(8) [[グリコ 森永] 事件] → グ]リコ#モリナガジ]ケン  
[[マルクス レーニン] 主義] → マ]ルクス#レーニンシュ]ギ (窪蘭 1995: 72)

つまり、このような音韻的な現象によって語認定をすることには慎重であるべきだということである。

### 3.4.3. 語幹の異形態(被覆形)

語幹の異形態が現れる例としては、「-あめ-(雨)」の異形態として現れる「こさめ(小雨)」、「ひさめ(氷雨)」の「-さめ」、「あまやどり(雨宿り)」の「あま-」などがある。これを語幹の異形態ではなく、中間接辞(interfix)と分析することも可能かもしれない(Booij 2005: 88-90)。つまり、コサメ、ヒサメをそれぞれ ko-s-ame、hi-s-ameと分析するのである。ただし、日本語の音節構造においては、特殊モーラ「ン」/N/、「ッ」/Q/ 以外には閉音節が無いことから、-s- は -ame に付属していると分析できる。他方、アマヤドリを am-a-yador-i と(つまり、-a- を中間接辞と)分析すると、am- という新たな異形態を作ってしまうことになる。am- という異形態を認めたくないならば、つまり、語根の音節構造を開音節のままにしておきたいならば、ama-yador-i と分析して、ama- を母音交替を起こした語根(被覆形)とするしかない。どちらにしても、異形態を認めることになる。

これと同じような問題は、動詞のいわゆる活用形にもみられる。「動かない /ugokanai/」「動きます /ugokimasu/」「動けば /ugokeba/」といった言語形式群において、語根 ugok- の次に現れる a、i、e は、語根 ugok- について語幹をつくっているのか（つまり、語幹の音交替なのか）。それとも、接辞の一部なのか（-anai、-imasu、-eba。ただし、-u はそれ自体で接辞）。あるいは、語根（語幹）にも接辞にも属さない挿入母音（thematic vowel）なのか。「動いた ugoita」のような「音便語幹」も存在するため、特にどの解釈が優れているとは決めがたいのである。

しかし、中国語においては、このような音変化・形態変化が見られないため、語認定は非常に難しい問題である。他方で、語と語でない形態素（語幹・語根あるいは接辞）との判別も、語形成論の分野で重要である。それぞれ、〈語と語より大きい単位との区別〉、〈語と語より小さい単位との区別〉と言い換えられる。この章の残りでは、この〈語と語より大きい単位との区別〉、〈語と語より小さい単位との区別〉を問題にする。

### 3.5. 語と語より小さい単位との区別

服部四郎 (1950) の論文「附属語と附属形式」では、言語形式を次のように分けている。「発話」あるいは「発話段落」<sup>註37</sup>として現れることがあるか否かで、「形式」を「自由形式」と「附属形式」とに二分する。前章でも述べたように、「附属形式」は本稿での付属形式に等しい。「自由形式」は本稿での独立形式・付属語・付属語結合に対応する。最小の「自由形式」は「単語」である。服部の言う「単語」は、複合語や派生語もふくめるので、ここでの「語」に等しい。語をさらに、「文に該当する発話或いは発話段落」として現れるか否かで「自立語」と「附属語」とに分けている。「附属語」はふつうほかの語と続けて発話される。ただし、服部は「自立語」と「附属語」とは截然と二分されるような範疇ではなく、「自立語の自立性には色々の程度があり」、「単語を「自立語」と「附属語」に分けるのは、かなり大まかな分類である」と述べている（服部 1949 [1960]:452）。次の対応表を参照していただきたい。

(9)	木村の用語：服部の用語
	独立形式：自立形式
	付属形式・付属語・付属語結合：非自立形式
	独立形式・付属語・付属語結合：自由形式
	付属形式：附属形式
	語：単語
	付属語：附属語

このように各概念を定義した上で、服部 (1950) は、附属語と附属形式とを見分ける原則を三つ提示している。なお一般的には、附属語は「倚辞」あるいは「接語」(clitic)、附属形式は「接辞」と呼ばれているものに等しい。

<sup>註37</sup> 「その前後に音声のとぎれのある発話断片」のこと。（服部 1950 [1960]: 461）

(10)

原則Ⅰ 職能や語形変化の異なる色々の自立形式につくものは自由形式（すなわち、「附属語」）である。（p. 470）

原則Ⅱ 二つの形式の間に別の単語が自由に現れる場合には<sup>補注1)</sup>、その各々は自由形式である。従って、問題の形式は附属語である。（p. 475）

原則Ⅲ 結びついた二つの形式が互いに位置を取りかえて現れ得る場合には、両者ともに自由形式である。（p. 477-478）

補注1) には次のように書かれている。

「この表現は、厳密に言うと、正しくない。たとえば、the tall man はそれ全体が同一の平面上にあるのではないからである。the tall man は the と man の間に tall がはいつてできたのではなく、

the	man
-----	-----

 という構成において man の代りに tall man がはいつてできたのである。原則Ⅱ は実用的には便利なものだが、理想を言うと、厳密な（しかし複雑な）表現を用いて書きかえなければならない。」（p. 490）

ただし、原則Ⅰを用いるには、「色々の自立形式につくもの」がすべて（同音異義ではなく）同一の言語形式であることが保証されている必要がある。たとえば、服部はこの論文において、中国語の非自立形式“了”を、次のように分布する事実から、附属語であるとする趣旨を述べている（p. 474）<sup>注38</sup>。

(11) a. 来了 lái-le 《来た》、去了 qù-le 《行った》

b. 水开了 shuǐ kāi-le 《湯がわいた》

c. 喝了茶了 hē-le chá-le 《お茶を飲んだ》

d. 红了 hóng-le 《赤くなった、熟した》

e. 没了 méi-le 《無くなった》

f. 八岁了 bāsuì-le 《八歳になった》

このように、いろいろな形式に自由に付き得ることから、原則Ⅰにより“了”は附属語だとしている。しかし、中国語文法においては、“来了、去了”等の“了”と“（喝了）茶了、八岁了”等の“了”は異なる“了”、つまり同音異義形式であると見なされている（Li & Thompson 1981:§6.1, §7.1、刘, 潘, 故 2001: 362-392）。動詞の直後に置かれる“了”は、perfective aspect marker “动态助词”であるし、文末に置かれる“了”は、sentence-final particle “语气助词”である（ただし、文末であり、かつ動詞の直後でもある“了”はどちらの“了”であるか、判定は難しい。だから、服部の挙げた(11a,b,d,e)も前後の文脈が無いので、“动态助词”とも“语气助词”とも判定ができない）。もし、これらの“了”がほんとうに同音異義形式だとしたら、原則Ⅰは適用できないことになる。なお、名称からも分かるとおり、Li & Thompson は perfective aspect marker の“了”を接辞（=付属形式）とし、sentence-final particle の“了”を助詞（=付属語）と扱っている。一方、刘, 潘, 故は、どちらの“了”も“助词”と称しているとおおり、語（付属語）として扱っている。

<sup>注38</sup> 服部は、自身の音素表記で示しているが、ここではピンイン表記に準じた表記に変えた。ただし、ハイフンは服部が施した通りに示してある。

原則 II は、次節の (16a) 「内部への挿入の不可」と同様の基準である。しかし、上で服部も述べているように、「二つの形式の間に別の単語が自由に現れる場合には」という文言は、厳密に言い直す必要がある。《A B と形式が並んでいる場合、A が A X という形態素連続 (Xは語) と自由に交換ができるか。あるいは、B が X B という形態素連続と自由に交換ができるか。交換ができれば、A、Bは自由形式 (語か語連結) である。》このように言い直すことができる。つまり、A B という形態素連続において、A か B、あるいは両方が付属形式である場合 (独立性が非常に低く A-B という形でしか単独で現れ得ない、逆に言うと、A-B の結合が非常に強固である場合) には、A-B の結合の内部に A-B の結合度よりも結合がゆるやかな形態素連続を取り込むことはできないのである。結合の強いものの内部に、その結合よりもゆるやかに結合しているものが入ることはできないのである。

具体例を挙げよう。

- (12) a. タマゴデ [ツクル] (卵で [つくる])  
 b. タマゴ ダケ デ [ツクル] (卵だけで [つくる])
- (13) a. ウレシクナイ (嬉しくない)  
 b. ウレシク ハ ナイ、ウレシク モ ナイ、ウレシク サエ ナイ
- (14) a. コマラナイ (困らない)  
 b. \*コマリ ハ ナイ、\*コマリ モ ナイ、\*コマリ サエ ナイ cf. コマリ サエ シナイ

(12a) において「デ」は語よりも小さい形態素 (付属形式) かもしれない。しかし、(12b) のように「タマゴダケ」と「デ」を結合させることができる。だから、「タマゴ」と「デ」の結合度は、少なくとも、「タマゴ」と「ダケ」の結合度よりもきつくない。また、「ダケ」は「私にだけ [教えて]」「私だけに [教えて]」「作るだけがいい」などと言えることから、かなり独立性の高い、付属語と言っている形式である。したがって、「デ」は語 (付属語) である。この場合、「ダケ」が X であった。また、「名詞+デ」において「デ」の結合する名詞は個別的に決まっているわけではない。意味が許せば、すべての名詞と結合することができる。この点からも「デ」が語であることが論証される。(ただし、この《意味が許せば、その文法範疇に属するすべてのメンバーと結合することができる》という条件は、屈折接辞にも当てはまるので、この条件のみから、付属語か付属形式かを判定することはできない。)

(13a) と (14a) の「～ナイ」は、音形も意味もほとんど同じである。しかし、両者は異なる言語形式である。(13a) 「ウレシクナイ」では、「ナイ」と「ウレシクハ」「ウレシクモ」とを結合させることができる。ただ、「ウレシクハ」「ウレシクモ」が「ナイ」に結び付く結合度は、「ウレシク」が「ナイ」に結び付く結合度よりもきついかもしれない。つまり、「-ハ」「-モ」は「ナイ」よりも独立性の低い付属形式であるかもしれない。そうすると、「ウレシク」と「ナイ」とのあいだに「ハ」や「モ」が挿入できるからといって「ナイ」の独立性が高いという根拠にはならない。しかし、「ナイ」は「ウレシクサエナイ」というように、「ウレシクサエ」とも結合することができる。「サエ」は、「ウレシクサエアル」「ウレシクアリサエスル」と言えることから、語である。だから、「ウレシクサエ」と「ナイ」の結合度は、少なくとも「ウレシク」と「サエ」の結合度よりもきつくない。したがって、「ウレシクナイ」の「ナイ」は付属語と言っている独立性の高さを持っている。これは、「形容詞語幹-ク+ナイ」の「ナイ」すべてに当てはまる。

逆に、(14a)の「コマラナイ」の「ナイ」では、「ナイ」と「コマリハ」「コマリモ」「コマリサエ」との結合が不可能である。したがって、簡単に言うと、「コマラナイ」において「コマラ-」と「ナイ」のあいだにほかの（独立性の高い）形式を挿むことができないので、「コマラ-」と「ナイ」はともに付属形式（「コマラ-」は語幹、「-ナイ」は接辞）である。なお、「コマル」と「ナイ」のあいだに、「ハ」「モ」「サエ」を入れる場合には、「コマリ ハ シナイ」「コマリ モ シナイ」「コマリ サエ シナイ」という形式になる。やはり、「ナイ」は前に「シ」（「スル」の「連用形」）と結合しなければならない。付属形式であり、独立性が低いからである。

中国語には、動詞の後ろに付いて、その動詞が表す動作の継続や状態の持続を表す“着 zhe”という形式がある。この形式は必ず動詞の直後に置かれ、動詞〔語幹〕と“着 zhe”とのあいだにほかの要素を入れることはできない。（次に見るように、(15)は表面上は“着 zhe”と目的語の位置を取りかえているので、原則 III による判定でもある。しかし、原則 II と III は実質的には同じ基準である。）

(15) a. 他 穿着 红色的 衣服 → \*他穿红色的衣服着。

tā chuānzhe hóngsède yīfu  
 彼 着る-dur 赤色-の 服  
 彼は赤い服を着ている

b. 他 正 大口 吃着 西瓜 → \*他正大口吃西瓜着

tā zhèng dàkǒu chīzhe xīguā  
 彼 ~している ほおぼって 食べる-dur スイカ  
 彼はちょうどスイカをほおぼって食べているところだ

c. 老人 讲着 过去的 故事 → \*老人讲过去的故事着

lǎorén jiǎngzhe guòqùde gùshi  
 老人 話す-dur 過去-の 話  
 お年寄りが昔の話を話している

原則 III は次のとおりであった。「結びついた二つの形式が互いに位置を取りかえて現れ得る場合には、両者ともに自由形式である」。服部は、日本語の次のような例を挙げている（服部 1950 [1960: 478]。音素表記のみ）。

(16) *watasi ni dake, watasi dake ni* [私 ニ ダケ、私 ダケ ニ]

*hito o bakari, hito bakari o* [人 ヲ バカリ、人 バカリ ヲ]

*doko e ka, doko ka e* [ドコ ヘ カ、ドコ カ ヘ]

そして、補注3)には次のように書かれている。「これは、厳密には、たとえば「*dake* は *watasi* にも *watasi ni* にもつき、*ni* は *watasi* にも *watasi dake* にもつく」などと言うべきものである。」(p. 490)

だから、これは原理は原則 II と同じものである。*watasi* と結合する *ni* と *dake* の独立性を二つ同時に測っているのである。

中国語では、たとえば、いわゆる「複合方向補語」が挙げられる<sup>注39</sup>。(Li & Thompson 1981:63<sup>注40</sup>)

- (17) a. 他 端上来了 一碗 汤  
tā duānshànglái le yī wǎn tāng  
彼 持つ-あがる-来る-pfv 一 類別詞 スープ  
彼はスープを一杯運んであがってきた
- b. 他 端了 一碗 汤 上 来了  
tā duān le yī wǎn tāng shàng lái le  
彼 持つ-pfv 一 類別詞 スープ あがる 来る 終助詞  
同上
- c. 他 端 上 一碗 汤 来了  
tā duān shàng yī wǎn tāng lái le  
彼 持つ あがる 一 類別詞 スープ 来る 終助詞  
同上

(17a)の“端上来了”はいつけん語としてまとまっているように見える。しかし、(17b, c)のように、目的語フレーズ“一碗汤”が各要素のあいだに入り込むことができる。したがって、この言語形式は複合語ではなく、語結合である。少なくとも、複合語よりは結合のゆるい結合体である<sup>注41</sup>。

### 3.6. 語と語より大きい単位との区別

影山(1993)や郡司(2002)において、語と語より大きい単位との判別方法が述べられている。また、中国語に関しては、San Duanmu(2000: Ch. 5)で論じられている。両者とも、他の単位とは異なる語特有の性質を述べることによって、ある形態素連続(つまり、複数の形態素から成る言語形式連合)が語であるか語より大きい単位であるかを判定する方法をとっている。影山(1993)や郡司(2002)で述べられている方法は、日本語と英語が素材として使われている。しかし、想定されているのは、通言語的(cross-linguistically)・普遍的な判定方法である。ここでは中国語(の特に複合語)にこの方法を適用する。それによって、従来、直観的に複合語(あるいは句)と分析されてきた言語形式の「語性(wordhood)」を判定する。

郡司は、まず、語の性質を「内部の緊密性」と「外部からの孤立」という二面に分けて記述している。しかし、これは二つの異なった(外延の分離した)性質ではなく、ひとつの性質を異なった側面から見たもの

<sup>注39</sup> 移動の方向を表す動詞“上 shàng《～にあがる》, 下 xià《～から／にさがる》, 进 jìn《入る》, 出 chū《出る》, 回 huí《戻る》, 过 guò《すぎる》, 起 qǐ《～からあがる》”と“来 lái《話者の方向に来る》, 去 qù《話者から離れる》”とを組み合わせ主体あるいは客体の動く方向を表す言語形式を「方向補語」と呼ぶ。「方向補語」を、さらに具体的な動作を表す動詞・形容詞の後ろに置くことによって、主体や客体の動きとその方向を表す言語形式を「複合方向補語」と呼ぶ。

<sup>注40</sup> (13c)は、インフォーマントによるとあまり言わない文であるそうである。より適切には終助詞の“了”をとって、“他端上一碗汤来”とすればいいそうである。

<sup>注41</sup> 「複合方向補語」と目的語の語順決定は、かなり複雑であり、すべての「複合方向補語」が(15a,b,c)のような語順をとれるわけではない。語順決定には、次のような要因がかかわっている。(a) 目的語が《持ち運びできるもの、自分の力で動けるもの》を表すか、《その場に固定されたもの、場所》を表すか。(b) 目的語の定・不定。(c) 文が表す意味が、《現在まだ実現していない事象》であるか、《現在起こりつつある事象、またはすでに実現済みの事象》であるか。

である。そして、それぞれに (18)(19) のような具体的な性質を列挙している。影山 (1993: 7-13) でも、語の性質について述べられている。影山が挙げているのは、大まかには次の四つである。(a) 語彙化と意味の慣習化、(b) 語形成の生産性と語彙的制限、(c) 形態的な緊密性、(d) 二叉枝分かれ構造の制約。このうち、(c) 形態的な緊密性には、(18) で挙げている制約がふくまれる（ただし、「意味の不透明性」と「音韻的緊密性」は除く）。「(a) 語彙化と意味の慣習化」は、郡司の (18c) 「意味の不透明性」に対応する性質である。

(18) 内部の緊密性

- (a) 内部への挿入の不可
- (b) 音韻的緊密性
- (c) 意味の不透明性
- (d) 照応表現の存在の不可
- (e) 内部的形態変化の不可

(19) 外部からの孤立

- (a) 内部への修飾の不可
- (b) 内部へ言及する照応表現の不可
- (c) 内部からの「取り出し」の不可
- (d) 内部の等位接続の不可

3.6.1. 内部の緊密性

語は非常に結合度の強い言語形式（あるいは言語形式連合）である。(18)「内部の緊密性」は、そのような結合度の強さの現れである。(18a)の「内部への挿入の不可」は、語を構成する各形態素間にはほかの形態素を入れることができないという制約である。これは、上でみた服部の原則 II に対応する。たとえば、「白熊 báixióng」《シロクマ、北極グマ》の“白 bái”と“熊 xióng”のあいだに“大 dà”《大きい》を入れて“\*白大熊”とすることはできない。この基準によって、いわゆる「離合詞」や「方向補語」は単語結合、つまり句であるとされる（「方向補語」については (17) を参照）。中国語の「動詞+目的語 (V-O)」型複合動詞のなかには、動詞性語幹 (V) と名詞性語幹 (O) とのあいだに別の語を置いて、VとOを分離することができるものが多くある。これを、中国語学では「離合〔動〕詞」と呼んでいる。次の例のような形式である。（朱德熙 1982: 113）

- (20) a. 吃亏 chīkuī 《損をする》 → 吃点亏 chī diǎn kuī 《少し損をする》
- b. 招生 zhāoshēng 《新入生を募集する》 → 招一次生 zhāo yí cì shēng 《新入生を一回募集する》
- c. 制图 zhìtú 《製図する》 → 制一张图 zhì yì zhāng tú 《一枚製図する》
- d. 失火 shīhuǒ 《失火する》 → 失了几次火 shī-le jǐ cì huǒ 《何度か火事を出した》
- e. 阅卷 yuèjuàn 《答案の採点をする》 → 阅过卷没有 yuè-guo juàn méiyǒu 《答案の採点をしたことが

あるか》

f. 起草 qǐcǎo 《起草する》→ 起个草 qǐ ge cǎo 《ちょっと草稿を起こす》

(20a) では、V “吃-” と O “-亏” のあいだに類別詞 (classifier、“量詞”) “点” が挟まっている。動詞性語幹である“吃-”は自由形態素 (擬似独立形式) である。名詞性語幹である“-亏”は拘束形態素である。類別詞は拘束形態素 (付属語) である<sup>注42</sup>。指示詞または数詞、あるいは「指示詞+数詞」に後接してのみ現れ得る (その後ろに名詞も置かれ得る)<sup>注43</sup>。ここでの“点”はまず“亏”と結合している。(20b) では、V “招” (自由形態素) と O “生” (拘束形態素) のあいだに数詞 “一” と類別詞 “次” から成る類別詞句が挟まっている。この類別詞句は、名詞性語幹 “生” と結合して名詞句を形成している。(20c) も V と O のあいだに類別詞句 “一张” が挟まっている点では同様である。しかし、この場合、V “制” が拘束形態素、O “图” が自由形態素である。同様に(20d) も、V “失” が拘束形態素、O “火” が自由形態素である。V と O のあいだに類別詞句が挟まっているほかに、完了・実現・状況の変化などを表す接辞 “-了” が V に後接している。(20e, f) を構成する要素はともに拘束形態素である。(20e) では、過去の経験を表す接辞 “-过” が V “阅” に後接している。そして、さらに副詞 “没有” が続いて、節全体を《～したことがあるか》という疑問の意味にしている。(20f) では、類別詞 “个” が O “草” と結合して、《ちょっと～する》というように意味を軽くしている。

このように、離合詞は V と O のあいだにさまざまな要素の挿入を許す。だから、(18a) の基準に照らした場合、上で挙げた離合詞は句 (語連続) であるということになる。しかし、朱徳熙 (1982: 113) は、拡張する (ほかの要素を挿入する) 前の形式 (矢印の左側) は複合語であり、拡張した後の形式 (矢印の右側) は句 (“组合式述宾结构”) であるという趣旨を述べている。たしかに、離合詞のなかには、名詞性語幹 O のふるまいが、一般的な「動詞 (述語) + 名詞 (目的語)」構造の名詞 (目的語) のふるまいとは異なるものがある。朱は言う (p. 113)。「動詞 [V] と目的語 [O] とはしばしば分離することができず、“失了一次火”とは言えるが、“失了一次”とは言えない。“起了草”や“起了个草”とは言えるが、“一个草”とは言えない。」しかし、“吃亏”と“制图”は、“连～都～”のとりたて構文に用いて、O だけをとりたてることができる。O が自由形態素か拘束形態素かに関係はないようである。この事実から、“失火”と“起草”は、かなり「単語化」が進んでいると解釈することができる。“招生”と“阅卷”はそれに準じて結合度が高い。ただし、V に屈折接辞 “-了” を付けることができるので、後述する (18e) からは、完全に一語にはなっていないとも言える。このように、「離合詞」と呼ばれる形式は、その結合度にかかなりの幅があり、語と違ってよいものから、句に近いものまでである、と記述すべきだろう。下でみる(18d)の基準に照らしても、結合相手にかかなり厳しい制約があることから (そもそも単独で現れることのない形態素と結合する)、語と句との中間に位置づけられるのかもしれない。

(21) a. 我连那种亏都吃过

wǒ lián nà zhǒng kuī dōu chīguo

私 ~さえあれ 類別詞 損 も 被る-経験

私はあるな損な目にさえあった

<sup>注42</sup> 類別詞を付属形式 (接辞) とするか、付属語 (接語) とするかは意見が分かれている。ここでは、付属語としておく。

<sup>注43</sup> 数詞を NUM、類別詞 (量詞) を CL、指示詞を D、名詞を N とすると、類別詞をふくむフレーズには次のような現れ方のパターンがある (類別詞の重複形はのぞく)。(a) NUM+CL [+N]、(b) D+CL [+N]、(c) D+NUM+CL [+N]、(d) CL+N。

- b. ??我们 连 生 都 没 招  
 wǒmen lián shēng dōu méi zhāo  
 私たち ~さえ 学生 も ~なかった 募集する  
 我々は学生すらも募集しなかった
- c. 他 连 图 都 制 不 了  
 tā lián tú dōu zhìbuliǎo  
 彼 ~さえ 図面 も 造る~ない-終える  
 彼は図面すら引くことができない
- d. \*他们 连 火 都 失 了  
 tāmen lián huǒ dōu shīle  
 彼ら ~さえ 火 も し損なう-完了  
 彼らは火事すら出した
- e. ??我 连 卷 都 阅 不 了  
 wǒ lián juàn dōu yuèbuliǎo  
 私 ~さえ 答案 も 調べる~ない-終える  
 私は答案でさえ採点することができない<sup>注44</sup>
- f. \*我 连 草 都 起 不 了  
 wǒ lián cǎo dōu qǐbuliǎo  
 私 ~さえ 草稿 も つくる~ない-終える  
 私は草稿すらつくることができない

(18b)「音韻的緊密性」は、中国語の複合語すべてに当てはまるわけではない。中国語には、後ろの語幹の声調がなくなっている（「轻声」という）複合語がある。しかし、すべての複合語が轻声化を起こしているわけではない。上で日本語の例でも述べたように、音韻的な変異はその言語形式の結合度の強さをしめす十分条件であるが必要条件ではない。

(18c)「意味の不透明性」は、多かれ少なかれ、中国語の複合語にも起こっている。たとえば、“白眼 bái yǎn”《軽蔑した目つき》や“黑板 hēi bǎn”《黒板》などである。しかし、この論文で対象とする動補型複合動詞は、（従来、句と分析されていただけに）「不透明性」の程度は低い（なかには、かなり「不透明性」の高い語も存在するが）。郡司は、次のように言う（p. 44）。「このような意味的な不透明性は、句であつても慣用句には見られるので、必ずしも単語と句を決定的に区別する基準ではない。」さらに、逆に複合語であつても、「透明性」のあるものもある。つまり、各要素の意味の足し算によって全体の意味が決まる複合語もある。ゆえに、意味の不透明性は、語と語でないものを区別する決定的な基準ではない。このような決定力の弱さは、「（不）透明性」という概念が定量的でないことから起こる。つまり、複合語どうしを比べて、どちらがどれくらい意味の「透明性」が高いかを客観的・数量的に決める基準がないのである。このような判断は母語話者の直観にゆだねられる。しかも、その直観においても定量的な判断はほとんどできない。また、このような意味による語認定のあいまいさは、「透明」「不透明」の境界条件がはつきりし

<sup>注44</sup> インフォーマントによると、答案が目の前にあつて話し手が何を指し示しているのか聞き手に明瞭である場合や、聞き手も答案の採点の経験があり、“阅卷”がどういう事象を表しているのかよく知っている場合には、このような言い方ができるそうである。そうでなければ、“卷”は“试卷 shìjuàn”《試験の答案》と独立形式の形にしなければならない。

ないことから起こる。しかし、境界条件がはっきりするような二値的な概念ならば、「～性」という命名は不適切である。いずれにせよ、意味は語認定の決定的な条件にはならないのである。

(18d)「照応表現の存在の不可」について。句では、その句内部の語を照応表現（代名詞等）で置き換えることができる。しかし、語の場合はその内部の要素を照応表現で置き換えることはできない。たとえば、郡司は日本語の例として次の文を挙げている（p. 44）。

- (22) a. 雪が降ってきた。白いそれは故郷で待つ人を思い出させた。  
b. 雪が降ってきた。\*白それは故郷で待つ人を思い出させた。

(22a)の句「白いそれ」の場合は、前の文の「雪」を「それ」で受けて言うことができる。しかし、(22b)のように、語である「白雪」の内部にある「-雪」を「-それ」で受けて言うことはできない。ただ、「白いそれ」という表現は、翻訳（直訳？）調あるいは文学的である。郡司は、「英語の教師と英語の教室」の後ろの「英語」を照応表現で受けた句「英語の教師とそれの教室」を挙げている（p. 45）。しかし、私には違和感のある表現である。いずれにせよ、日本語で「\*それ釣り（cf. 魚釣り）」「\*そこ破り（cf. 道場破り）」「\*彼さらい（cf. 人さらい）」などの語は不可能である。中国語でも“報名 bàomíng”《申し込む》に対して“\*報它 bàotā”、“签字 qiānzì”《サインする》にたいして“\*签它 qiāntā”のように、「離合詞」の名詞性語幹を指示代名詞“它”《それ》に替えることはできない。

ただし、影山も述べているが、この制約にはかなり例外がある。「どこ行きのバスですか」における「どこ行き」、ものの用途をきいて「何用に使いますか」の「何用」、ほかにも「ここ止まり」「あそこ経由」「それ次第」といった表現が可能である。人称代名詞では、さらに造語しやすくなる。「彼好み」「あなた思い」「私宛」などである（ただし、「私」「あなた」「彼」などを英語の I, you, he などと同じ人称代名詞とするのには疑問がある。これらはむしろ純粋な名詞である。）

(18e)「内部的形態変化の不可」は、複合語・派生語を構成している語幹・接辞を形態変化させることができないという制約である。特に時制要素は厳格に排除される。「上り坂」を「\*上った坂（ざか）」、「作り笑い」を「\*作った笑い（ツクッタワライ<sup>注45</sup>）」とは言えない。中国語では、“犯罪〔案件〕”《犯罪〔事件〕》という名詞は、“\*犯了罪〔案件〕”とは言えない。

影山(1993: 10-11)は、この「内部的形態変化の不可」という制約を「統語的要素の排除」として説明している。影山の理論的立場に立てば、統語的要素とは句、格助詞、時制などである。これらの要素が語の内部に入ることはできない。たとえば、句の排除をしめす例として影山の挙げているのは、「店じまい」に対して「\*[はやらない店]じまい」、「滑稽さ」に対して「\*[たいへん滑稽]さ」、「改革する」に対して「\*[税制の改革]する」、「山登り」「岩登り」に対して「\*[山と岩]登り」である。これは次節の(19a)「内部への修飾の不可」ともかかわっている。つまり、例でしめした「はやらない」「たいへん」「税制の」が語の外側にあったとしても、語の性質に反するということである。これに対して、「[弱いもの]いじめ」「[銀行の頭取]宅」「[幽霊を見た]さに……」を語として認め、例外（句の包摂）として考察している（影山 1993: 第6章）。しかし、宮岡(2002: 36)はこれらの表現を語ではなく句としている<sup>注46</sup>。

<sup>注45</sup> 「ツク」ツタワライ」というアクセントならば句である。

<sup>注46</sup> 宮岡は、= を後倚辞の左端、+ を複合語内部の形態素境界、# を音声上の休止をとともわなない音韻句内部の形態素境界をしめす、としている。なお、宮岡は前倚辞を proclitic、後倚辞を enclitic の訳語として用いている。

句のレベルでのミスマッチについてみると、「金ガ欲シサ（ノ犯行）」、「先祖ノ墓参り」は、意味的には、{{金ガ欲シ（イ）}-サ}、{{先祖ノ墓}参り}であるが、いずれも一語ではない。形態法的には、「金=ガ=欲シ-サ」、「先祖=ノ#墓+参り」であって、ともに名詞句（+は語基複合であることを示す）。後者をたとえば、例外的に外部から複合語の一部を修飾しているというように、意味・統語構造から「語」を捉えるようなことをはじめると、“例外”はどこまでも増え、文法の手には負えなくなる。

また、生成文法では、受身の「られ」や使役の「させ」も統語構造に生じる形態素とされている。そのため、影山は、これらの派生接辞も語の内部には生じないとしており、「いじめられっ子」「やらせ」を臨時的な造語としている。しかし、臨時的な造語にしては「打たれ強い」「かませ犬」「やられ役」など生産性が高く、語彙として定着したものも多い。〈屈折接辞のみが語内部から排除される〉と記述すべきだろう。

### 3.6.2. 外部からの孤立

(19)「外部からの孤立」という性質は、語が「統語論的に不可視 (syntactically invisible)」であるという特徴の現れである。(19a)の「内部への修飾の不可」は、語内部の構成要素（つまり、語の一部）だけを、語の外側から修飾できないという制約である。“大楼 dàlóu”《ビル》の“大”だけを修飾するために“\*很大楼”（“很 hěn”《とても》）とは言うことはできない。

(19b)「内部へ言及する照応表現の不可」とは、(18d)とは逆向きの制約である。つまり、日本語では、「昨日、私は魚<sub>i</sub>を二匹釣って、それ<sub>i</sub>を自分で料理した」とは言えるが、「?昨日、私は魚<sub>i</sub>釣りをして、それ<sub>i</sub>を自分で料理した」というのは奇異に感じる。「魚」を「それ」で受けることはできる。しかし、「魚釣り」の内部にある「魚-」を「それ」で受けることはできない。つまり、語全体を「それ」等の照応表現で受けることはできるが、語の一部を照応表現で受けることはできないのである。ただし、郡司(2002: 47-49)でも述べられているように、(18d)にせよ(19b)にせよ（語の内部と関わる）照応表現を用いた文は、談話的な推論が働けば容認可能である。話者によってもかなり判断が割れるテストであろう。それゆえ、あまり決定的な制約とは言えなさそうである。

(19c)「内部からの「取り出し」の不可」は、語を統語的に分断することができないという制約である。「あの方は、永年国語教師をしていらした」を「\*あの方が永年\_\_\_\_教師をしていらしたのは、国語だ」とか、「彼は朝から雪搔きを続けている」を「\*雪は、彼が朝から\_\_\_\_搔きを続けている」と変換することは不可能である。しかし、このテストも、語の内部から「取り出し」ているという意図を話者が汲み取らなければ、「あの方が永年教師をしていらしたのは、国語だ」という文を容認可能であると判断する話者はかなりいそうである。（このテストの意図を正しく汲めるのは、言語学、特に生成文法の訓練を受けた者だけではないか。）また、「\*雪は、彼が朝から\_\_\_\_搔きを続けている」という文は、おそらくすべての日本語話者が、不可能であると判断するであろう。しかし、不可能であるのは、「雪」を「雪搔き」という語の内部から取り出したという理由からではなくて、「搔き」という形態そのものが単独では用いられないという理由からかもしれない。（おそらく、後者の理由からの判断が大部分であろう。）したがって、このテストもあまり有用なものではない。

(19d)「内部の等位接続の不可」は、不安定な（話者によって判断の異なる）制約である。そして、この場合も、形態（音韻）と意味とのミスマッチを考える必要がある。郡司は、この制約の例として次のようなものを挙げている（p. 50）。

- (23) a. 英語およびフランス語の教師  
b. \*英語およびフランス語教師

しかし、影山であれば(23b)の例を容認するはずである。なぜなら、語レベルどうしの結合の場合、「ないし」または「および」という接続詞を取り込んで拡張することが可能であるとしているからである(1.3.を参照)。(23b)における「英語教師」「フランス語教師」の構成要素となっている「英語-」「フランス語-」「-教師」は、影山に従えば「語」である。「教師」は、語である「英国人」「フランス人」(英国+人、フランス+人〔語幹+語幹=語])と結合して「英国人教師」「フランス人教師」となるから語であり、その「教師」と結合する「英語」「フランス語」も(語幹ではなく)語ということになる。もし、影山が(7b)を(郡司と同様に)不可能だと判定するならば、「英語」「フランス語」「教師」はそれぞれ語幹だということになる。このように、「内部の等位接続の不可」制約は、日本語の場合、話者により判断が異なる(あるいは結合する基体の形態論的単位によってかかり方が異なる)という厄介な制約である。むしろ、このような現象も、形態と意味とのミスマッチととらえるべきではないか。つまり、(23b)は(意味解釈にかかわらず形態法上は)「英語#および#フランス語+教師」という句の構造をしているのである。これを(影山流に)《英語教師およびフランス語教師》と解釈するのは、言語外世界の知識を用いていることになる。あるいは文脈上からも、フランス語教師という人物あるいは職業と、英語という言語とを同等に並べることが不適切であると解釈されれば、英語教師とフランス語教師を並べているという解釈が選択されるだろう。

中国語の場合も、“英语和法语广播 yīngyǔ hé fǎyǔ guǎngbō”《英語放送とフランス語放送》，“中央和地方政府 zhōngyāng hé dìfāng zhèngfǔ”《中央政府と地方政府》という表現は可能である。しかし、形態法上、“英语#和#法语#广播”“中央#和#地方#政府”という語境界を設定すべきだろう。つまり、まず“英语#和#法语”“中央#和#地方”という結び付き方をして、これらがそれぞれ“广播”“政府”と結び付いているのである。したがって、この「内部の等位接続の不可」も有効な判断基準ではない。

なお、この「内部の等位接続の不可」という制約は、(もし成立するとしても)その形式が語であることの必要条件ではあるが十分条件ではない。たとえば、「形容詞+名詞」という句の場合でも、修飾要素を等位接続して「若いおよび年取った社員」とするのは、「若年および中高年の社員」よりも許容度が下がる。「\*若いと年取った社員」は完全に非文法的である。中国語でも、“\*年轻和老教师”とは言えない。“年轻”《若い》も“老”《年とった》もともに連体修飾語としても述語としても自由に用いることができるが、“年轻教师和老教师 niánqīngjiàoshī hé lǎojiàoshī”とするしかない。その形式が句であるから、内部要素を等位接続できるとはかぎらないのである。

以上の考察から分かるのは、語と語連続とを見分ける絶対的な基準は存在せず、上で見たような基準から総合的に判断するしかないということである。

### 3.7. V-V型複合動詞か派生形式か

ここまで、ある形態素連続が語であるかいないかを判定する基準について述べてきた。ここでは、同じ判定基準を用いても、理論的立場を異にすることで違った結果が導き出されるという事例を述べる。例として挙げるのは、影山(1993)と宮岡(2002)の「～始める」「～続ける」等の形式に関する議論である。どちらも、「～始める」「～続ける」等を「～上げる」「～倒す」「～かける」等とは異なる型の形式であるという点では一致している。しかし、影山が「～始める」等を複合動詞の後項であるとしているのに対して、宮岡はこれらを派生接辞だとしている。この違いはなぜ生じてしまうのだろうか。

影山(1993:75-97)はV-V型の複合動詞を語彙的複合動詞と統語的複合動詞とに分ける。語彙的複合動詞は、「飛び上がる、押し開く、泣き叫ぶ、売り払う、受け継ぐ」のような動詞である。統語的複合動詞は、「払い終える、話し終わる、しゃべり続ける、食べすぎる、助け合う」のような動詞である。両者はともに語である。このことは、副助詞「も」が前項と後項のあいだに挿入できないことから分かる(\*飛びも上がる、\*押しも開く、\*払いも終える、\*話しも終える)。しかし、語彙的複合動詞と統語的複合動詞は次の諸点で違いがあると影山は言う。(a) 意味的透明性と、それにとまなう生産性。(b) 代用形「そうする」との結合を許すか。(c) 主語尊敬語「お～になる」という形が可能か。(d) 前部要素を受身形にできるか。(e) 前部要素にサ変動詞が立てるか。(f) 前部要素を「～(連用形)に～」の形にできるか。

語彙的複合動詞は、さまざまな程度に意味の不透明化や語彙化が進んでいる。そのため、結合相手も個別に決まっている度合いが高い(\*飛び下がる」「震え歩く」など言ってもよさそうなのに言えない)。また、「持ち上げる」を「\*そうし上げる」、「閉じ込める」を「\*そうし込める」、「踏み荒らす」を「\*そうし荒らす」のように、前部要素を照応形「そうし」にすることはできない。これは(18b)でみた制約と同様である。また、語彙的複合動詞は、前部要素のみを主語尊敬語「お～になる」という形にすることができない。「繰り返す」を「\*お繰り返になり返す」としたり、「売り払う」を「\*お売りになり払う」としたりすることはできない。適格な形は、「お繰り返しになる」「お売り払いになる」である。これは語の形態的緊密性から、当然のふるまいであろう。また、前部要素を受身「～られ」の形にすることもできない。「吹き上げる」を「\*吹かれ上がる」、「殴り倒す」を「\*殴られ倒れる」などとは言えない。「～られ」は語全体と結合し、「吹き上げられる」「殴り倒される」となる。そして、前部要素としてサ変動詞を置くことはできない。「\*殴打し殺す(cf. 殴り殺す)」「\*走行し回る(cf. 走り回る)」「\*飲食し歩く(cf. 食べ歩く、飲み歩く)」などの例がある。さらに、この型の複合動詞では、前部要素を「書きに書く」「飲みに飲む」といった「重複構文」にすることができない。「\*書きに書き写す」「\*待ちに待ち望む」などと言うことができないのである。

これに対し、統語的複合動詞は語彙的複合動詞とは反対のふるまいをする。(a)……意味的には、透明度が高く、生産性も語彙的複合動詞より高い。つまり、結合相手の制限がより少なく、どのような相手と結合するかが意味論的に説明付けられやすいのである。(b)……前部要素を「そうする」にすることができる。「そうし始める」「そうし続ける」「そうし終わる」。(c)……前部要素を主語尊敬語「お～になる」にすることができる。「お話しになり始める」「お書きになり続ける」「お歌いになり終わる」。(d)……前部要素を受身「～られ」形にすることができる。「呼ばれ始める」「見られ続ける」「殴られすぎる」。(e)……前部要素にサ変動詞が立つことができる。「想像し始める」「保管し忘れる」「休憩しかける」。(f)……前部要素を「～(連用形)に～」の形にすることができる。「歩きに歩き続ける」「しゃべりにしゃべりまくる」「走りに走

り抜く」。そして、影山は、このような特徴は統語レベルでの現象と共通するため、これらの複合動詞は統語部門で派生されるものであるという旨を述べている。

いっぽう、宮岡 (2002:93-99) は、「～始める」「～続ける」「～終わる」といった形式を派生接辞であるとしている<sup>註47</sup>。その理由として挙げているのは、(c) と「迂言的構造」の作り方の違いである。(c) については、上で述べているのと同様に、前部要素を「お～になる」にする主語尊敬の作り方が、願望の「-たい」や可能動詞を派生する -e (ru) と同じであり、複合動詞とは異なるという趣旨を述べている。「書きたい」は「お書きになりたい」となり、可能動詞「書ける」は「お書きになれる」となる。これは「書き始める」が「お書きになり始める」となるのと同じふるまいである。「-たい」や -e- は「純接辞」であるから、「～始める」も形態法の種別としては接辞と同種であるということになる。

「迂言的構造」とは、副助詞「は」「も」「さえ」「とか」「こそ」などで接尾辞連続をいったん「中断」し、再び、「支柱」的な形式動詞「スル」を語基にして、動詞を「再立ちあげ」し、残りの接尾辞をそれに続けていくという構成 (p. 97) のことである。宮岡の表記法で書けば、「書カ-セ-ラレ-タ-ガリ-ハジメル」を「=モ=」で中断すると、次のようになる (p. 97)。

- (24) a. 書カ-セ-ラレ-タ-ガリ-ハジメ=モ=スル  
b. 書カ-セ-ラレ-タ-ガリ=モ=シ-ハジメル  
c. 書カ-セ-ラレ=モ=シ-タ-ガリ-ハジメル  
d. 書カ-セ=モ=サ-レ-タ-ガリ-ハジメル  
e. 書キ=モ=サ-セ-ラレ-タ-ガリ-ハジメル

このように、「-ガリ」の前以外はいずれにも「も」を挿入することができる。「-ガリ」の前に挿入できないのは、「-ガル」が形容詞性語幹と結合する接辞であるからであろう。この点で、「～始める」はその他の派生接辞と異なるふるまいをしない。以上を根拠として、宮岡は「～始める」のような、従来複合動詞の後項とみなされてきた形式を派生接辞であるとする。おそらくは、影山が挙げたほかの (a)-(f) における現象も、宮岡の主張に抵触することはないだろう。それでは、なぜ同じ形式を一方は統語部門で派生されたものだとし、一方は純粋な接辞と同種であるとするのだろうか。それは、影山の理論的立場によるのである。影山の立場では、屈折辞「-た」や派生接辞「-られ」「-させ」「-た (い)」などは統語部門に属する形式である (柴谷 1978:第3章)。それゆえ、「-られ」「-させ」「-た (い)」などと同じふるまいをする「～始める」等も統語部門に属すると考えられているのである。

本稿では、次のように考える。「～始める」は「純接尾辞」とまったく同等にふるまうわけではない。(c) において、「-たい」や -e (ru) が上で見たような辞順しかとれないのに対し、「～始める」は「お書きになり始める」だけでなく「お書き始めになる」という言い方もできる (\*お書きたくなる、\*お書けになる)。また、「書カ-セ-ラレ-タ-ガリ-ハジメル」は「書き-始め-させ-られ-た-がる」とも言える (意味は異なるが)。ほかにも「書か-せ-られ-続け-た」「書か-せ-続け-られ-た」「書き-続け-さ-せ-られ-た」のような辞順が可能であるが、ほかの派生接辞にはこのような自由はない。したがって、「～始める」のような形式は付属形式 (擬似独立形式) ではあるものの、純粋な派生接辞よりは独立性が高い形式であるとする。

<sup>註47</sup> 宮岡 (2002:74) は、このような接尾辞を、自立語が付属形式化した「二次的接尾辞」と呼んでいる。

### 3.8. 結論

以上の議論から、語の認定の基準をまとめる。

独立形式がさらに形態素に分析できる場合、その形態素どうしの結合がある程度以上緊密であれば、その独立形式全体を語と認定する。緊密であるということは、その形態素それぞれの独立性が低いということである。服部、影山、郡司、宮岡の基準を総合して、もっとも強い基準は、「内部への挿入の不可」基準であろう。語の内部に語よりも大きな形式は生じ得ないという基準である。この基準を意味的・統語的基準とどうかねあわせるかによって四者の立場は微妙に異なる。本稿では、この基準をかなり強くとっている。

また、独立性が比較的低く、つねに何かほかの言語形式と結合してでなくては現れ得ない言語形式があるとする。しかし、上の基準によっては、結合して現れるものと一緒に一語になっているとは認定しづらい場合、それを付属語とする。つまり、結合相手とのあいだにほかの独立形式が生じ得るのである。また、この言語形式が異なる範疇の言語形式と結合する場合も、独立性はかなり高い。これは、おもに服部 (1950) で論じられた。

なお、本稿では語と語でないもののあいだは連続的であり、その境界線を引くとしても、同一言語内においてもその境界は動揺しているという立場をとった。たとえば、「勉強する」は、「勉強はする」「勉強もする」「勉強さえする」のように付属語が内部に生じることができる。しかし、一方で「勉強しはする」「勉強しもする」「勉強しさえする」という形もある。「勉強する」と「勉強#する」との二つの言語形式を認めるべきなのだろうか。この場合、実際にテキスト上で「勉強する」という語形が現れた場合、一語なのか二語なのか判定する基準は無い。語の認定には、このような難しさがある。

第一章で、動補型複合動詞をA類～C類に分けた基準は、ここで検討した語認定の基準を用いている。①V1とV2のあいだにほかの形式が挿入可能であるか否か、②意味の透明性、③結合相手の範疇がかぎられているか、さらに④V1、V2のメンバーがつくる範疇は開いているか閉じているか、などを基準としてV1とV2のあいだの結合度の強さをはかった。つまり、語であると認定される形式の内部も、その結合度の強さにおいて多様性があるということである。

## 第四章 動詞分類と範疇選択

この章では、第一章で導入した動補型複合動詞がV1、V2にどのような範疇を選択して形成されるかを考察する。V1、V2となる言語形式（擬似独立形式）が所属する範疇を、語のレベルにおける範疇と区別して擬似範疇と呼ぶ。ただし、語の構成要素が必ず何らかの擬似範疇に属していなければならないと主張しているわけではない。本稿では、次の作業仮説をたてる。

〈語の構成要素（擬似独立形式）は、それが対応する語の意味・機能を、やむを得ない事情が無いかぎり、なるべくそのまま引き継ごうとする。〉

〈やむを得ない事情が無いかぎり〉という留保をつけた。〈やむを得ない事情〉とは、語が語としてまとまろうとするときに構成要素にかかる圧力をしめしている。語は、文中で統語的にふるまうときにはその内部が不可視になる。つまり、構成要素がもともと持っていた機能を消し去る方向に圧力がかかるのである。また、意味的にも語全体で一つのまとまった意味になろうとする圧力がかかる。その圧力によって、構成要素のもともと持っていた意味が軽くなり、意味の不透明性が高くなる。このような圧力に対して、語の構成要素は、もともと持っていた対応する語の意味と機能をそのまま保持しようとするのである。これを作業仮説として、本章での考察を進める。

### 4.1. 日本語における範疇選択の問題

動補型複合動詞のV1とV2の組み合わせは、個別的にきまっている。しかし、一方でV1、V2の擬似範疇によってもかなりの部分が規定されている。これは、日本語の複合語にも当てはまる。日本語について考えてみよう。野村(1977: 265-271)では、複合語（複合動詞・複合形容詞・複合名詞〔複合動名詞・複合形容名詞〕）の構成パターンを、「語基」の類と構成成分間の関係とから分類している。野村は、「語基」を次の四つに分けている。

- (1) 〈A類（体言類）〉……山・鳥・人間・地球・文化・トマト・テレビ  
〈B類（相言類）〉……青（い）・早（い）・うれし（い）・別（な）・急（な）・貴重・簡単・スマート・フレッシュ  
〈C類（用言類）〉……寝（る）・切り（る）・休み・相談・発見・スタート・ミックス  
〈D類（副言類）〉……また・ちょっと・ふらり・一斉・突然・絶対

そのうえで、複合動詞の語構成パターンを三つに分けている。前項がそれぞれA類、B類、C類であるパターンである（後項はすべてC類である）。A+C型の意味を「Aガ（=ヲ・ニ・デ）Cスル」、B+C型の意味を「Bノ状態デ（=ニ）Cスル」、C+C型の意味を「Cシタ状態デCスル」と記述し、それぞれ次のような例を挙げている。

- (2) a. A+C型……目-ざめる、気-づく／名-づける、夢-見る／冬-ごもる、くし-けずる、耳-なれる  
 b. B+C型……青-ざめる、遠-のく、長-びく、若-がえる、高-鳴る  
 c. C+C型……撃ち-落とす、掃き-出す、踏み-抜く、出-向かえる、泣き-暮らす

複合形容詞には、前項にA類からD類までがすべてそろっている（後項はすべてB類である）。A+B型の例には、「幅-広い、名-高い、腹-黒い、末-恐ろしい、興味-深い、人-なつこい、耳-新しい」が挙げられている。以下それぞれ、B+B型には「暑-苦しい、甘-酸っぱい、細-長い、ずる-賢い、青-白い」、C+B型には「蒸し-暑い、まわり-くどい、こげ-くさい、聞き-苦しい、ねばり-強い」、D+B型には「ひよろ-長い、うすら-寒い、むず-がゆい、ほろ-苦い」が例示されている。

このように、複合動詞と複合形容詞は、後項の語幹（擬似独立形式）の擬似範疇がそれぞれ〈動詞〉〈形容詞〉である。前項にたつ語幹の擬似範疇には〈名詞〉〈動詞〉〈形容詞〉〈形容名詞〉〈動名詞〉がある<sup>注48</sup>。ただし、複合形容詞のD+B型の場合、前項にたつ語幹（=語根。「ひよろ-」「うすら-」「むず-」「ほろ-」）はどの擬似範疇にも属していない。あえて言えば、「ひよろ-」が「ひよろりと」「ひよろつと」という副詞の語根であり、「むず-」が「むずと」という副詞の語根、「ほろ-」が「ほろりと」「ほろつと」の語根であることから、〈副詞〉に属しているかもしれない。しかし、「うすら-」は何か接辞を付けて副詞にすることはできない（「うっすら」の語根としていいかどうか自信が無い。「やはり」>「やっぱり」参照）。このように合成語の語幹となる言語形式がすべていずれかの擬似範疇に属するとは限らない。また、すべての語幹が擬似範疇に属している必要も無いのである。文の中で一次的に機能しているのは語であり、語がなんらかの範疇に属してさえいればいいのである。

複合名詞は複雑である。複合名詞の場合は、後項の語幹が〈名詞〉である必要がない（いわゆる二次複合語）。野村は、複合名詞を六つの類に分類している。〔第五類〕と〔第六類〕は、それぞれ並列型（「朝-晩」「すき-きらい」「自由-自在」「読み-書き」「比較-対照」）、重複型（「ひと-びと」「なが-なが」「思い-思い」）なので措くとして、〔第一類〕と〔第二類〕が二次複合語、〔第三類〕と〔第四類〕が一次複合語である<sup>注49</sup>。

また、語を構成する語幹どうしがどのように結合しているかを、統語レベルにおける語どうしの結合のあり方と等しいとみなして分析している研究も非常に多い。たとえば、「はえたたき」「卵焼き」「ねじ回し」「魚釣り」を、「はえをたたく」「卵を焼く」「ねじを回す」「魚を釣る」という構造と同じであるとみなして「直接目的語+他動詞」型と分析する類いである。上で挙げた例では、(2a) A+C型の「目ざめる」「気づく」における「目-」と「-ざめる」、「気-」と「-づく」の結合のしかたは、「目がざめる」「気がつく」にお

<sup>注48</sup> 形容名詞と動名詞については、影山(1993: 22-40)を参照。

<sup>注49</sup> 野村(1977:267-8)はそれぞれ次のような例を挙げている。

〔第一類〕①<A>+<B>……色-白、身-軽、胴-長、物価-高、栄養-豊富、素行-不良、胃酸-過多。②<C>+<B>……話-べた、待ち-遠、望み-薄、実現-可能。③<A>+<C>……雨-上がり、日-暮れ、動脈-硬化、地盤-沈下／種-まき、ねじ-回し、原価-計算、地震-予知／寺-参り、内政-干渉、記者-会見／昼-寝、早期-発見、年内-解散／川-遊び、山-歩き、ドイツ-製、海外-公演、街頭-募金／バター-いため、のり-づけ、水力-発電、しごと-疲れ、薬物-中毒／政治-献金、航空-協定。

〔第二類〕④<B>+<C>……早-起き、うれし-泣き、薄-着、深-追い、急-上昇、偏-微分、特別-参加、完全-消毒。⑤<C>+<C>……立ち-読み、見-習い、食い-逃げ、乱-反射、徐行-運転、継続-審議、徹夜-観測。⑥<D>+<C>……ほろ-酔い、にわか-じこみ、再-検討、最-優先、一時-停止、一斉-捜査、突然-変異。

〔第三類〕⑦<B>+<A>……丸-顔、若-者、高-げた、甘-納豆、有名人、怪-文書、特殊-兵器、温暖-前線、必要-条件。⑧<C>+<A>……打ち-傷、渡り-鳥、空き-ビン、乱れ-髪、流れ-作業、睡眠-薬、入学-金、救援-投手、消費-電力、合成-肥料。

〔第四類〕⑨<A>+<A>……山-道、本-箱、晩-飯、チフス-菌、朝-火事、核-兵器、性-細胞、会社-員、動物-園、電気-スタンド、青年-医師、大学-病院、新年-宴会、原子-爆弾、政治-危機、大衆-演芸。

ける「目が」と「さめる」、「気が」と「つく」の結合のしかたに等しいとして分析する方法である。これを統語的分析と呼ぼう。野村による複合語の構成パターンの分類も、この統合的分析に相当する。たとえば、うえで見た複合動詞の体言類と用言類の複合(A+C型)は「Aガ(=ヲ・ニ・デ)Cスル」という結合関係を持つと、野村は記述している。つまり、AとCのあいだには(統語レベルでの)項関係が埋め込まれていることになる。同様に、B+C型「Bノ状態デ(=ニ)Cスル」とC+C型「Cシタ状態デCスル」は、修飾関係(右側主要部の関係)が埋め込まれているのである<sup>注50</sup>。ただし、野村は記述していないが、C+C型の複合動詞には「CスルコトヲCスル」という補文関係が埋め込まれているパターンもある。複合語全体の文法的範疇を考慮せずに、語幹の擬似範疇と、語幹どうしのあいだに埋め込まれている統語レベルでの関係を挙げると、次のようになる。

- (3) a. N+N (a) 並列関係 (b) 修飾関係  
 N+V (a) 並列関係 (b) 修飾関係 (c) 項関係  
 V+V (a) 並列関係 (b) 右側主要部の関係 (c) 補文関係

Nは体言類、Vは用言類・相言類・副言類を表す。用言類・相言類・副言類をひとつにまとめてしまったのは、語幹どうしのあいだに埋め込まれている統語関係という点では、いずれも同じ関係を持っているとみなせるからである。ここで「N+V」は形態素の並び順を表しているわけではない。複合語全体が用言(動詞・形容詞)の場合はN-Vだけれども、名詞の場合はV-NあるいはN-Vという順序になる。修飾関係(右側主要部の関係)の例としては、「まる顔(cf. まるい顔)」「早起き(cf. はやく起きる)」「振り混ぜる(cf. 振って混ぜる)」「絞め殺す(cf. 絞めて殺す)」などがある。項関係(補文関係)の例としては、「卵焼き(cf. 卵を焼く)」「水たまり(cf. 水がたまる)」「水拭き(cf. 水で拭く)」「置き忘れる(cf. 置いたのを忘れる/置くのを忘れる)」などがある。しかし、すべての複合語がこのように統語レベルの形式(句など)にパラフレーズできるわけではない。たとえば、「みみず腫れ(みみずのように腫れる?)」「犬死に」「口答え」「跳ね上がる」「響き渡る」「行き違う」などは、どのようにパラフレーズしていいかわからない。このことから、統語的分析はむしろ結合型の意味(それぞれの語幹が意味として表す事象のあいだの関係)を記述していると言えるかもしれない<sup>注51</sup>。

#### 4.2. 従来の動詞分類

松村(1997a, b)では、「結果補語」を持つ動詞と「結果補語」になる動詞の意味特徴をそれぞれ挙げている。「結果補語」を持つ動詞(つまり、V1)の意味特徴は、【はじまり】と【持続】である。逆に、【結果】【瞬間的発生】【状態】【瞬間的完成】【非持続】等の意味特徴を持った動詞は、「結果補語」を持つことができない。「結果補語」になる動詞(つまり、V2)は、【おわり】という意味特徴を持っている必要がある。しかし、ここで提出されている【はじまり】【持続】【おわり】【結果】【瞬間的発生】【状態】【瞬間的完成】【非持続】といった概念は、同じ平面上に並ぶような概念ではない。つまり、外延の分

<sup>注50</sup> 厳密には、日本語の複合用言の場合、「右側主要部の関係」は「項構造の関係」にも当てはまる。しかし、ここでは「右側主要部の関係」を「修飾関係」と同義としている。

<sup>注51</sup> 中国語でも、複合名詞のそれぞれの語幹が表す事象のあいだの関係は多様である。Li & Thompson (1981: 49-53) は、複合名詞の語幹 N1、N2の関係を二十一の類型に分類している。

離した選言的な概念ではない。【はじまり】【持続】【おわり】は、動詞が表す事象の時間的局面に対応する概念である。この【はじまり】【持続】【おわり】のあり方、あるいは三者間のさまざまな関係に対応した概念が、【結果】【瞬間的発生】……等の概念である。だから、まずは【はじまり】【持続】【おわり】のあり方と、そのあり方に対応する言語現象を調べる必要がある。以下、本章では、【はじまり】を開始局面、【持続】を持続局面、【おわり】を終結局面と呼ぶ。そして、〈動詞が表す事象の時間的局面に対応する意味〉をアスペクト的意味、あるいは語彙的アスペクトと呼ぶ。金子(2003, 1995i)による述語の事態表示のモデルにならうと、その動詞が表す事象の時間的局面において、開始局面より前が「前状況」、終結局面より後が「後状況」、開始局面と終結局面のあいだが「表示状況」ということになる。「前状況」と「後状況」は、動詞の意味そのものにはふくまれない。動詞が表す意味に対応する事象が含意しているものである。

#### 4.2.1. 日本語動詞のアスペクト的分類

日本語で、アスペクト的意味から動詞を下位分類した研究として代表的なものに、金田一春彦(1950 [1976: 5-26])の「国語動詞の一分類」がある。金田一は「～ている」がつくかどうか、ついた場合、その意味がどうなるかによって動詞を次のように分類した。(引用部分の下波線は省略した。)

- (4) a. 状態動詞……「「状態を表わす」と言うべき動詞で、通常、時間を超越した観念を表わす動詞である。」「——ている」をつけることがない」(p. 7)。  
ある(「机がある」「本箱がある」)、ある(「我輩は猫である」)、ござる、( possible ) できる、切れる、話せる、見える、要する、値する、大きすぎる、……
- b. 継続動詞……「ある時間内続いて行われる種類の」「動作・作用を表わす」動詞。「——ている」をつけることが出来、若しつけば、その動作が進行中であることを表す(p. 8)。  
読む、書く、笑う、泣く、しゃべる、歌う、見る、聞く、食う、飲む、なめる、吸う、押す、引く、歩く、駆ける、滑る、泳ぐ、刈る、剃る、縫う、拭く、掃く、働く、散る、降る、揺れる、燃える、……
- c. 瞬間動詞……「瞬間に終わってしまう動作・作用」を表す動詞。「——ている」をつけるとその動作・作用が終わってその結果が残存していることを表わす。(p. 8)  
死ぬ、〔電灯が〕つく、消える、さわる、届く、離れる、決まる、見つかる、〔目が〕覚める、止まる、始まる、終わる、出発する、到着する、〔病気が〕なおる、やむ、やめる、結婚する、卒業する、残る、尽きる、失う、忘れる……
- d. 第四種の動詞……「時間の観念を含まない」「ある状態を帯びることを表わす」動詞。「いつも「——ている」の形で状態を表わすのに用い」る。(pp. 8-9)  
そびえる、すぐれる、おもだつ、ずばぬける、ありふれる、富む、似る……

また、金田一はいろいろな屈折的範疇(「語幹+屈折接辞」)や派生的範疇(「語幹+派生接辞」)の意味も、語幹にどの類の動詞が来るかによって異なるとして、その意味の違いを考察している。

金田一の「状態動詞」は、開始局面も終結局面も存在しない事象に対応している。あるいは、開始局面が

前状況に対して開いていて、かつ終結局面が後状況に対して開いている事象に対応しているとも言える。つまり、前状況・表示状況・後状況それぞれに対応する事象が等しいとみなされているのである。「継続動詞」は、開始局面・終結局面がともに存在する事象に対応している（開始局面が前状況に対して閉じていて、かつ終結局面が後状況に対して閉じている事象に対応している）。つまり、前状況と表示状況、表示状況と後状況の対応する事象が異なっている事態である。「動く」の意味が対応する事象《動く》においては、《動く》の前状況と後状況はともに《動いていない》事象をしめしている。「瞬間動詞」は、開始局面があり、終結局面が無い事象に対応している（開始局面が前状況に対して閉じていて、かつ終結局面が後状況に対して開いている事象に対応している）。一般に、「瞬間動詞」の表す意味が対応している事象には持続局面が無いと考えられている。しかし、より厳密に言うと、言語使用者が、持続局面が無いものとしてとらえている事象に対応している動詞が「瞬間動詞」である。だから、「瞬間動詞」が対応する事象に対して、言語使用者が持続局面があるとみなせば、「～ている」をつけてその事象が進行していることを表すことができる。たとえば、蛍光灯の寿命が残り少なく、スイッチを入れても点灯するまでに明滅をしばらく繰り返している状況を指して、多少破格かもしれないが、「蛍光灯がいま点いている（から、もう少し待つて）」と言うことができる<sup>註52</sup>。このように「瞬間動詞」は前状況に対応する事象（《点いていない》）と表示状況（後状況）に対応する事象（《点いている》）の違いを意味として表すのであって、前状況から表示状況へ移行する事象を（通常は）描写してはいない。描写していないのであって、存在していないわけではないから、言語使用者がこの移行部分をことさらに取り立てて表現することもできるのである。だから、「瞬間動詞」という名称は適切ではない。「変化動詞」と言うべきであろう（奥田 1977[1985]を参照）。

「第四種の動詞」は、開始局面が前状況に対して「半分閉じて」いて、終結局面が後状況に対して開いている。「半分閉じて」いるというのは、形の上でつねに「～ている」をつけて表すことに反映されている。つまり、「～ている」をつけていない形（たとえば、「似る」「そびえる」）が対応する事象は、過去に「～」でない状態から「～」である状態に変化したことを含意していないのである。「似る」は、《似ていない》状態から《似ている》状態への変化が起きるという事態を意味として表していない。そして、終結局面が後状況に対して開いているというのは、「～ている」が結果の残存を表していることに反映されている。

上で述べたことを、次のように図式化する。下の図では、（前状況）>（表示状況・持続局面）>（後状況）をしめしている。Vは動詞が対応する事象、-Vはその事象が存在していないことを表す。(5)を見ると、「～ている」の付加が可能な範疇は、-V>V>...部分を持ち、「～ている」の意味が持続局面（表示状況）を指し示している範疇（「継続動詞」）は、...>V>-V部分を持っていることが分かる。

- (5) a. 「状態動詞」：V>V>V  
 b. 「継続動詞」：-V>V>-V  
 c. 「瞬間動詞」：-V>V>V  
 d. 「第四種の動詞」：(-V)>V>V

#### 4.2.2. 中国語動詞のアスペクト的分類

中国語動詞も、このようにある一つの（統語意味的、あるいは形態意味的）基準を用いて、動詞を下位範

<sup>註52</sup> 「蛍光灯がいま点いているところだ」と、「ところだ」をつければ許容度が上がる。

疇に分けることができる。基準をたくさん適用すれば、さらに細かな分類が可能であり、そのように分類を押し進めていけば、最終的には一つの語にたどり着く。そこまでの分類基準の総体がその語の意味である。

中国語の動詞を分類した研究には、荒川 (1981)、马 (1981)、郭 (1993) などがある。

荒川 (1981) は対をなす八つの範疇に動詞を分類している。「動作／状態」、「変化／静態」、「形態／移動」、「行為／結果」である。また、さまざまな統語意味的指標を用いて、それぞれの範疇内をさらに細かく分けてもいる。「動作／状態」は時制の意味による分類である。「変化／静態」は、生き物の姿勢や体勢を表す動詞群を分けた範疇である。このようないわゆる姿勢動詞は、そのまま（はだかの形）では状態動詞に近い機能・意味を持つが、起動的な（動作動詞的な）意味を表すためには動作の方向を表す〔複合〕動詞（あるいは動詞語幹）と結合して動詞句（あるいは複合動詞）とならなければならない。「変化／静態」の「変化」とは、よく日本語のアスペクト研究で用いられている「動作動詞／変化動詞」のそれではなく、起動相が表すような意味のことを指している。「静態動詞は静態を表わすのが主で、その静態に移る変化（過程）を積極的には表わさない」（p. 7）と言っていることから明らかだろう。「形態／移動」は、動作や活動を表す動詞のうち、「移動」の意味を含意するかどうかを分類の基準にしている。「形態／移動」の内部は大きく三つに分けられる。「移動」のみを表す動詞、「移動」と「形態」（移動をふくまない動作）をともに表す動詞、「形態」のみを表す動詞の三つである。「行為／結果」は、単用される動作動詞と、動作とその結果を表す複合動詞（結果補語をともなう動詞）とを分ける範疇である。荒川 (1981) は、各範疇内部を分ける基準は明示しているのだが、動詞全体を「動作／状態」「変化／静態」「形態／移動」「行為／結果」の四つに分ける統一的な基準はしめていない。

马 (1981) は、ある特定の環境に入り得る動詞を分類している。だから、中国語動詞の全体を分類しているわけではない。つまり、次のような三つの文型で使われたときに実現する意味の違いによって動詞を分類しているのである（马 1981: 86）。

- (6) C1: V+T                    看三天 kàn sān tiān    《三日間見る》  
C2: V+了+T                  看了三天 kànle sān tiān    《三日間見た》  
C3: V+(了)+T+了          看（了）三天了 kàn(le) sān tiān le    《三日間見た》（最初の“了”は随意）

まず、動作の結果の持続を表す接辞“-着”が付くか否かで二つに分ける。“-着”が付き得ない動詞を「非持続性動詞（Vaと表記）」と呼び、“-着”が付き得る動詞を「持続性動詞（Vbと表記）」と呼ぶ。Vaは(7)のように単独ではC1、C2で使えない。それに対し、Vbは(8)のように単独でC1、C2で使うことができる。（P. 86）

- (7) a. \*死三天    《\*三日間死ぬ》  
      b. \*他死了三天    《\*彼は三日間死んだ》  
(8) a. （这本书）看三天 (zhè běn shū) kàn sān tiān    《（この本は）三日間読む》  
      b. （这本书）看了三天 (zhè běn shū) kànle sān tiān    《（この本は）三日間読んだ》

Vaは、(9)(10)のように単独でもC3では使うことができる。また、(11)-(14)のようにC1、C2が複文の従属節である場合にも使うことができる。そのときには、《動作が完了してからの経過時間》を表す (p. 87)。

(9) 已经 死了 三天 了

yǐjīng sǐle sān tiān le  
すでに死ぬ-pfv 三 日 終助詞  
死んでもう三日になる

(10) 手表 已经 丢了 两天 了

shǒubiǎo yǐjīng diūle liǎng tiān le  
腕時計 すでに なくす-pfv 二 日 終助詞  
腕時計をなくして三日になる

(11) 刚 死 一天 就 火化 了

gāng sǐ yì tiān jiù huǒhuà le  
~ばかり死ぬ 一日 すぐに火葬にする 終助詞  
死んで一日経っただけで埋葬した

(12) 手表 丢 两天 又 找着了

shǒubiǎo diū liǎng tiān yòu zhǎozhāole  
腕時計 なくす 二 日 また 探す+達成する-pfv  
腕時計をなくして二日してまた見つけた

(13) 刚 死了 一天 就 火化了

gāng sǐle yì tiān jiù huǒhuàle  
~ばかり死ぬ-pfv 一日 すぐに火葬にする-pfv  
死んで一日経っただけで埋葬した

(14) 手表 丢了 两天 又 找着了

shǒubiǎo diūle liǎng tiān yòu zhǎozhāole  
腕時計 なくす-pfv 二 日 また 探す-達成する-pfv  
腕時計をなくして二日してまた見つけた

Vbをさらに二つに分ける。C3で用いたときに多義性を持たない型を「強い持続性動詞 (Vb1)」、多義性を持つ型を「弱い持続性動詞 (Vb2)」とする。Vb2をC3で用いると、(15)(16)のように《動作開始からの経過時間》と《動作終了からの経過時間》という二つの意味を持ち得る。いっぽう、Vb1をC3で用いると、(17)(18)のように《動作・行為の持続時間》のみを表し、二つの意味を持ち得ない (p. 87)。

(15) 吃了 半个 钟头 了

chīle bàn ge zhōngtóu le  
食べる-pfv 半 類別詞 時間 終助詞  
食べ (始め) て半時間になる / 食べ (終え) て半時間になる

(16) 扫了 半个 钟头 了

sǎole bàn ge zhōngtóu le  
掃除する-pfv 半 類別詞 時間 終助詞  
掃除をし（始め）て半時間になる／掃除をし（終え）て半時間になる

(17) 等了 三天了  
děngle sān tiān le  
待つ-pfv 三 日 終助詞  
三日間待った

(18) 坐了 半天 了  
zuòle bàntiān le  
座る-pfv しばらく 終助詞  
しばらく座っていた

Vb2はさらに二つに分けられる。C1で用いられたときに、一義的に《動作・行為の持続》を表す類をVb21とする。また、C1で用いられたときに二義性を生じ、《動作・行為の持続》((21a, 22a))とともに《動作・行為がもたらした状態の持続》((21b, 22b))をも表す類をVb22とする。(p. 88)<sup>注53</sup>

(19) 这本书 看 三天  
zhè běn shū kàn sān tiān  
これ 類別詞 本 読む 三 日  
この本は三日間読む

(20) 我 跟 你 说 一会儿  
wǒ gēn nǐ shuō yíhuǐr  
私 ~と あなた 話す 少しのあいだ  
君とちょっと話そう

(21) a. 这么多肉, 要 腌 三天 才能 腌完  
zhème duō ròu, yào yān sān tiān cái néng yānwán  
こんな 多い 肉 必要である 塩漬けにする 三 日 やっと できる 漬ける+終わる  
こんなに多くの肉を塩漬け（し終え）るのに三日はかかる

b. 腌 三天 就 可以 吃了  
yān sān tiān jiù kěyǐ chīle  
漬ける 三 日 すると できる 食べる-pfv  
塩漬けして三日経ったら食べられる

(22) a. 挂 半天 才 挂 上去  
guà bàntiān cái guà shàng qù  
掛ける しばらく やっと 掛ける 上がる 行く  
しばらく掛けてやっと掛かった

b. 刚 挂 半天 就 摘 下来了  
gāng guà bàntiān jiù zhāi xià láile

<sup>注53</sup> Vb21とVb22は“着”を伴ったときの振る舞いも異なる。前者は一義的で《動作・行為の持続》を表すのみであるが、後者は《動作・行為の持続》を表せるだけでなく、存現文の文型において《動作・行為のもたらした状態の持続》をも表すことができる。

～ばかり掛けるしばらくすぐに外す 下ろす 来る-pfv  
しばらく掛けただけで外した

以上の分類をまとめてしめすと次のようになる。

(23) Va…… “死” 類 (「非持続性動詞」)

Vb: Vb1…… “等” 類 (「持続性動詞」 「強い持続性動詞」)

Vb2: Vb21…… “看” 類 (「弱い持続性動詞」 「一義的」)

Vb22…… “挂” 類 (「弱い持続性動詞」 「二義的」)

郭(1993)では、動詞を、その意味構造が“起点” (起点、inception)、“终点” (終結点、finish)、“续段” (持続段階、duration) を持つか否かという基準によって、十個に分類している。その分類基準を確かめるテストとして、次の六つを挙げている。これらの基準には適用の階層性 (基準の強弱) は無く、総合的に判断するようである。

- a. 《完了・実現》を表す“-了”をとるか。とる場合、(i)動作がすでに始まっていることを表すか、(ii)終了したことを表すか。…… (i)なら起点を持ち、(ii)なら終結点を持つ。
- b. 後ろに時量詞句 (時量目的語)をとるか。とる場合、(i)動作の持続時間を表すか、(ii)動作終了後の経過時間を表すか。…… (i)なら起点と持続段階を持ち、(ii)なら終結点を持つ。
- c. 《動作の進行・状態の持続》を表す“-着”をとるか。<sup>註54</sup> ……とる場合、持続段階を持つ。
- d. 時間副詞“正/正在” 《ちょうど～している》をとるか。……とる場合、持続段階を持つ。
- e. 《～したことがある》という意味 (経験相) の“-过”をとるか。……とる場合、終結点を持つ。
- f. a-e のいずれをもとり得ないか。→持続を表せるならば、持続段階を持つ。

まず、大きくVa～Veの五つの型に分類している。さらに、Vcを五つに、Vdを二つに下位分類している。分類の結果は下の表のようになる。表において「+」とあるのは当該の形を取り得ることを、「-」とあるのは当該の形を取り得ないことをしめす。「I」は当該の形を取り得て、かつその形のときに動作の持続時間を表すことをしめす。「F」は当該の形を取り得て、かつその形のときに動作終了後の経過時間を表すことをしめす。

このようなテストの結果から分類された各範疇は、次のような事象に対応している。Va “无限结构” “無限構造” は、開始時点も終了時点も持たない事象に対応している。Vb “前限结构” “前限構造” は開始時点は持つが、終了時点は持たない事象に対応している。Vc “双限结构” “両限構造” は開始時点と終了時点とをともに持つ事象、Vd “后限结构” “後限構造” は終了時点は持つが開始時点を持たない事象、Ve “点结构” “点構造” は開始時点と終了時点が一点に収束している事象に、それぞれ対応している。「点

<sup>註54</sup> 郭(1993)は、ここでの“着”を次の(a, b)における“着”に限定している。(c, d)のような“着”を排除している。(郭は(c, d)の“着”を「表示动作结束后留下的状态的固定的“着3”」と説明している。)

- (a) 吃着饭呢。「御飯を食べているところだ」
- (b) 门口坐着一个人。「玄関口に人が一人座っている」
- (c) 地下扔着一双鞋。「地面に靴が一足放り投げてある」
- (d) 他剪着短发。「彼は短髪にしてある」

構造」は、開始したと同時に終了するような「瞬間的」な事象に対応している構造である。

おおまかに言うと、郭のVaとVb、それにVc1とVc2が荒川の「状態動詞」にあたる。そして、Vc3、Vc4のなかに「静態動詞」にあたる動詞がある。「静態動詞」は、馬のVb1のなかに対応する動詞がふくまれる。「行為動詞」とでも呼べるような動詞はVc5とVc4に分布していて、馬のVb2にふくまれる動詞に多く対応する。「結果動詞」はVd、Veに対応する。馬のVaが「結果動詞」にあたる。日本語のアスペクト研究で使われる「瞬間動詞」「変化動詞」に意味的に対応する動詞が「結果動詞」にあたる。

		图示		-了	v时量	-着	在/正在	-过	例
Va	无限结构	→		-	-	-	-	-	是, 等于, 以为, 作为, 当
Vb	前限结构	•→		I*	I	-	-	-	认识, 知道, 熟悉, 当心
Vc	双限结构	•→•	1	I	I	-	-	+	相信, 喜欢, 懂, 姓, 重视
			2	I	I	+	-	+	有, 瞎, 信任, 爱护, 希望
			3	I,F*	I	+	-	+	坐, 住, 爱, 病, 依靠, 醉
			4	I,F	I	+	+	+	等, 端, 战斗, 敲, 工作
			5	I,F	I,F	+	+	+	吃, 烧, 搬, 看, 修改
Vd	后限结构	→•	1	F	F	+	+	+	产生, 提高, 消失, 增加
			2	F	F	-	+	+	离开, 灭亡, 消除, 实现
Ve	点结构	•		F	F	-	-	+	来, 忘, 看见, 收到, 开始

\* Iは動作の持続時間を、Fは動作終了後の経過時間を意味することをしめす。

表 中国語動詞の過程構造 (郭(1993:413)より)

#### 4.3. 本稿における中国語動詞分類

以上の先行研究を考慮して、ここでは、動補型複合動詞のV1あるいはV2となることが出来る語幹（擬似独立形式）と対応する動詞（独立形式）が、どのような意味的な特性を持っているかということを知るのに必要な分類を行う。

中国語動詞を四つの下位範疇に分類する。日本語の金田一分類と同様に、動詞の対応する事象が持っている時間的局面的構造にしたがって分類する。簡単に言うと、アスペクト的な意味にもとづいた分類である。つまり、1. 状態動詞、2. 変化動詞、3. 静態動詞、4. 動作動詞の四類である。

このように分類する基準には、三つの統語的指標がある。次の三つである。

- (i) 《動作の進行、状態の持続》を表す接辞“-着”との結合の可否。また、結合した場合の意味。
- (ii) 《完了・実現》を表す接辞“-了”との結合の可否。また、結合した場合の意味。
- (iii) 動詞の後ろに時量詞をともなった場合の節全体の意味。つまり、動作の継続時間を表すか、動作実現後の経過時間を表すかである。

“-着”と結合することができない範疇が状態動詞・変化動詞であり、結合できるのが静態動詞・動作動詞である。“-着”と結合できない二類のうち、“-了”と結合し得ないか、結合した場合に動作・状態の実

現局面を表す範疇を状態動詞とし、“-了”と結合することができ、結合した場合に《動作完成の状態への到達、動作が完成した後の結果の残存》を表す範疇を変化動詞とする。“-着”と結合できる静態動詞・動作動詞のうち、動詞の後ろに時量詞を置いた場合、《動作の継続時間》のみを表す範疇を静態動詞とし、《動作の継続時間》《動作完成後の経過時間》をともに表すこのできる範疇を動作動詞とする<sup>注55</sup>。静態動詞と動作動詞は、“-了”と結合した場合の意味が《動作が開始したこと》《動作が終結したこと》の二義を表し得る<sup>注56</sup>。

状態動詞は、動作の開始局面・終結局面がともに無い（つまり、開始局面が前状況に対して開いていて、終結局面が後状況に対して開いている）事象に対応している。持続局面（表示状況）には関心がない。これは日本語の「状態動詞」にほぼ対応している。変化動詞は、動作の開始局面があり、終結局面が無い（つまり、開始局面が前状況に対して閉じていて、終結局面が後状況に対して開いている）事象に対応している。静態動詞・動作動詞は、開始局面・終結局面をともに持つ（開始局面と終結局面がそれぞれ前状況と後状況に対して閉じている）。つまり、表示状況の両端が閉じているのである。違いは持続局面（表示状況）にある。静態動詞は、前状況に対応する事象から表示状況に対応する事象まで（観念上は）ほぼ瞬間的に移行するととらえられる。だから、表示状況がしめす事象は、動作完成後の状態が残存しているという事象である。あるいは、開始局面で始まった動作が表示状況で進行し、終結局面で完成する。そして、後状況でその完成した状態が残存している。動作動詞は、開始局面で始まった動作は表示状況で進行し、終結局面で完了する。もちろん、後状況ではその動作は行われていない。変化動詞が表す事象は、日本語の「瞬間動詞」あるいは「変化動詞」に対応する事象に似ている。動作動詞が表す事象は、日本語の「継続動詞」に対応する事象に似ている。

これを日本語と同様に図式化してみよう。(24)を見ると、動作の開始・動作の完成(=到達)は  $-V > V > \dots$  の部分に対応していて、動作の終結といった事象は  $\dots > V > -V$  の部分に対応していることが分かる。

- (24) a. 状態動詞： $V > V > V$   
 b. 変化動詞： $-V > (\text{到達})V(\text{残存}) > V$   
 c. 静態動詞： $-V > (\text{到達})V(\text{残存}) > -V$   
 d. 動作動詞： $-V > (\text{開始})V(\text{終結}) > -V$

このような範疇のあいだどうしは連続的につながっていて、中間的な（どちらの範疇にも属する、あるいはどちらの範疇にも属しないとみえる）語が存在する。これは、日本語の動詞分類にも言えることである。同じ音形を持ちながら、表す意味によって別の範疇に属することもある（ただし、これらを同音異義語とすかどうかは、理論的立場によって異なるであろう）。以下に挙げる語についても、しめしてある意味以外の意味で用いられる場合には（つまり、文脈によっては）、異なる範疇に属する語もある。後で、この中間的な語については言及する。以下に、それぞれの範疇をくわしく検討する。

#### 4.3.1. 状態動詞

状態動詞は、《進行・持続》を表す“-着”と結合することができず、《完了・実現》を表す“-了”とも

<sup>注55</sup> もちろん、具体的な文脈においては、どちらかの意味に一義的に決まる。二つの意味をとる可能性があるということである。

<sup>注56</sup> これには、例外がある。それについては、5.5.で述べる。

結合することができないか、結合した場合に動作・状態が実現するという局面を表す範疇である。

荒川(1981)は、はだかの形の動詞が(文の述語に使われたときに)現在を表すか未来を表すかで、状態動詞と動作動詞とをわけ<sup>注57</sup>。現在を表すものが状態動詞であり、未来(未然・将然の動作)を表すものが動作動詞である。

次に、状態動詞に属する主な動詞を列挙する。

所有・存在を表す……在 zài 《ある、いる》

事象間の関係を表す……是 shì 《～だ》、叫 jiào 《～という》、姓 xìng 《～という姓だ》、算 suàn 《～と見なされる》、象/像 xiàng 《～に似ている》、等于 dēngyú 《～と等しい》、以为 yǐwéi 《～とみなす》、作为 zuòwéi 《～とする》、舍得 shěde 《惜しくない》、能够 nénggòu 《～できる》、敢 gǎn 《思いきって～する》、企图 qǐtú 《企てる》、记得 jìde 《覚えている》、需要 xūyào 《要る》、值得 zhíde 《～に見合う》、总计 zǒngjì 《合計する》、显得 xiǎnde 《～のように見える》

心理・認識・知覚的状态や活動を表す……怕 pà 《怖い》、放心 fāngxīn 《安心する》、害怕 hàipà 《怖がる》、懂 dǒng 《わかる》、忽视 hūshì 《無視する》、讲究 jiǎngjiū 《重んじる》、明白 míngmái 《わかる》、轻视 qīngshì 《軽視する》、顺从 shùncóng 《服従する》、误解 wùjiě 《誤解する》、拥护 yōnghù 《擁護する》、准许 zhǔnxǔ 《許可する》、重视 zhòngshì 《重視する》、爱护 àihù 《大事に守る》、保持 bǎochí 《維持する》、保留 bǎoliú 《保存する、保留する》、打算 dǎsuàn 《～するつもりである》、跟随 gēnsuí 《付き従う》、留心 liúxīn 《気をつける》、盼望 pànwàng 《待ちこがれる》、佩服 pèifu 《敬服する》、热爱 rè'ài 《心から愛する》、体贴 tǐtiē 《細かく配慮する》、希望 xīwàng 《願う》、依赖 yīlài 《頼る》、指望 zhǐwàng 《当てにする》、懂得 dǒngde 《わかる》、了解 liǎojiě 《よく知っている》、熟悉 shóuxī 《よく知っている》、认识 rènshi 《見知っている》、关心 guānxīn 《関心を寄せている》、认得 rènde 《知っている》、知道 zhīdào 《知っている》、晓得 xiǎode 《知っている》、当心 dāngxīn 《気をつける》

#### 4.3.2. 変化動詞

変化動詞は、“-着”と結合することはできないが、“-了”と結合することができ、結合した場合に《動作が完成した後の結果の残存》を表す範疇である。また、この動詞は後ろに時間の範囲を表す句(時量詞句)を置いた場合に、動作が完成した後の経過時間を表す。変化動詞には、马(1981)の言う非持続性の動詞(Va)が相当する。

死 sǐ 《死ぬ》、伤 shāng 《負傷する》、断 duàn 《断つ》、熄 xī 《消す》、完 wán 《終わる》、了 liǎo 《終える》、丢 diū 《なくす》、来 lái 《来る》、去 qù 《行く》、回 huí 《戻る》、到 dào 《着く》、塌 tā 《崩れる》、懂 dǒng 《分かる》、中 zhòng 《あたる》、入(入党) rù(rùdǎng) 《入る(入党す)

<sup>注57</sup> 金田一(1950 [1976: 12-13])も日本語動詞の「-る」形(「終止形」)の意味に関して同様の趣旨を述べている。

る)》、立(立春) lì (lìchūn)《立つ(立春になる)》、散(散会) sǎn (sǎnhuì)《解散する(閉会する)》、免(免職) miǎn (miǎnzhi)《免ずる(免職する)》、溜(溜走) liú (liúzǒu)《逃げる(逃げ去る)》、熟 shú《熟する》、败 bài《負ける》、并(合并) bìng (hébing)《合わせる(合併する)》、落(落价) luò (luòjià)《下がる(値が下がる)》、结婚 jiéhūn《結婚する》、没 mò《沈む》、垮 kuǎ《崩れる》、忌 jì《やめる》、原谅 yuánliàng《許す》、成立 chénglì《成立する》、批准 pīzhǔn《許可する》、出嫁 chūjià《嫁ぐ》、投降 tóuxiáng《投降する》、提拔 tíbá《拔擢する》、产生 chǎnshēng《産み出す》、改 gǎi《変える》、毕业 bìyè《卒業する》、发明 fāming《発明する》、获得 huòdé《獲得する》、开始 kāishǐ《始める》、抛弃 pāoqì《捨てる》、失败 shībài《失敗する》、忘 wàng《忘れる》、牺牲 xīshēng《犠牲になる》

動補型複合動詞も、この範疇に属する。

损失 sǔnshī《損をする》、完成 wánchéng《完成する》、碰见 pèngjiàn《出くわす》、取得 qǔdé《得る》、放松 fāngsōng《ゆるめる》、建立 jiànli《建てる》、解放 jiěfàng《解放する》、离开 líkāi《離れる》、灭亡 mièwáng《滅ぼす》、丧失 sàngshī《なくす》、实现 shíxiàn《実現する》、消除 xiāochú《取り除く》、削弱 xuēruò《力が弱まる》、结束 jiéshù《終了する》、看见 kànjiàn《見える》、听见 tīngjiàn《聞こえる》、遇见 yùjiàn《会う》、解开 jiěkāi《解く》、分开 fēnkāi《分ける》、办成 bànchéng《成し遂げる》、画成 huàchéng《描く》、记住 jìzhù《覚える》、提出 tíchū《提出する》、修好 xiūhǎo《直る》、学会 xuéhuì《マスターする》、钓着 diào zháo《釣れる》、吃饱 chībào《充分食べる》、叫醒 jiàoxǐng《起こす》、写完 xiěwán《書き終える》、干完 gànwán《し終える》、说明白 shuōmíngbái《はっきりと言う》、打扫干净 dǎosǎogānjìng《きれいに掃除する》、变化 biànhuà《変わる》、达到 dá dào《到達する》、改变 gǎibiàn《変わる》、改正 gǎizhèng《改正する》、恢复 huīfù《回復する》、减少 jiǎnshǎo《減少する》、缩小 suōxiǎo《縮む》、提高 tígāo《上げる》、下降 xiàjiàng《降がる》、消失 xiāoshī《消える》、形成 xíngchéng《形成する》、增加 zēngjiā《ふえる》、打破 dǎpò《たたき壊す》

動作の方向を表す複合動詞も、この範疇に属する。

起来 qǐlái《起きる》、上来 shànglái《上がってくる》、进来 jìnlái《入ってくる》、出来 chūlái《出てくる》、回来 huílái《帰ってくる》、上去 shàngqù《上がっていく》、下去 xiàqù《降りていく》、出去 chūqù《出ていく》、进出 jìrchū《入っていく》、回去 huíqù《帰っていく》、出来 chūlái《出てくる》

### 4.3.3. 静態動詞

静態動詞は、“-着”と結合でき、結合した場合の意味が《動作完成後の状態の残存》を表す動詞である。また、“-了”と結合することができ、結合した場合の意味が《動作が開始したこと（実現したこと）》《動作が終結したこと（残存もしていない）》の二義を表し得る。そして、動詞の後ろに時量詞を置いた場合、《動作の継続時間》のみを表す。

この範疇には、荒川の「静態動詞」がほぼ相当する。「変化／静態」の範疇は、荒川によると、ほぼ「状態動詞」に等しい。ただし、「動量詞を伴えば命令文になるなど、語彙的にも文法的にも1の『状態動詞』とはちがったものである。」（荒川 1981: 7、例文も同様。）

(25) 你 再 坐 一会儿 吧

nǐ zài zuò yíhuìr ba

あなたもう 座る 少し 終助詞

もう少し腰をかけていたら→もう少しゆっくりしていったら

(26) 你 躺 一会儿 歇歇 吧

nǐ tǎng yíhuìr xiēxiē ba

あなた横になる 少し 休む・重複 終助詞

しばらく横になって休んだら

しかし、これらの動詞は静止状態を表しているなので、形態的变化をとまわずに《その静止状態にいたるまでの動作・活動（起動相）》を表すことはできない。起動相を表すためには、動作の方向を意味として表す動詞語幹をつけて複合動詞化（あるいは連語化）しなければならない。次のように、“～起来”や“～下（来）”を付加するのである。

(27) 坐下 zuòxià 《立っている状態から座ってる状態に移行する、腰を下ろす》

坐起来 zuòqilái 《寝ている状態から座っている状態に（話し手のほうへ）移行する、体を起こす》

躺下来 tǎngxiàlái 《寝ている状態に（話し手のほうへ）移行する、横になる》

站起来 zhànqilái 《立っている状態に（話し手のほうへ）移行する、立ち上がる》

趴下来 pāxiàlái 《這って（話し手のほうへ）降りていく、這い降りてくる》

蹲下 dūnxià 《立っている状態からしゃがむ状態に移行する、しゃがむ》

この分類で、荒川の「静態動詞」に対応するような動詞は、馬分類のVb1に属する動詞の一部にある。馬によれば、これらの動詞は[-完了][+持続]という特徴を付与されている。[-完了]というのは、瞬間的に完了する動作を表さないということをしめしている。この点で変化動詞とは異なるということであろう。私の規定では、変化動詞は終結局面以降の後状況においても、表示状況における事象（《残存》）がそのまま引き継がれるが、静態動詞は終結局面で表示状況における事象（《残存》）を終わらせることができる。変化動詞も静態動詞も、表示状況が対応する事象は等しい。つまり、動作完成後の状態が残存しているという事象である。しかし、いま述べた後状況が対応する事象の違いによって、この二類は区別されるのである。

静態動詞に属する動詞は、次のとおりである。

坐 zuò 《座る》、站 zhàn 《立つ》、躺 tǎng 《横になる》、等děng 《待つ》、盼 pàn 《待ち望む》、睡 shuì 《寝る》、歇 xiē 《休む》、病 bìng 《病気になる》、哭 kū 《泣く》、笑 xiào 《笑う》、恨 hèn 《恨む》、忍 rěn 《我慢する》、闷 mēn 《閉じこもる》、管 guǎn 《取り締まる》、躲 duǒ 《逃げる》、避 bì 《避ける》、防 fáng 《防ぐ》、当（当班长）dāng (dāng bānzhǎng) 《担当する（班長になる）》、该（该他十块钱）gāi (gāi tā shí kuài qián) 《借金する（彼に十元借りがある）》、想 xiǎng 《思う》、盯 dīng 《見つめる》、玩儿 wánr 《遊ぶ》、追 zhuī 《追う》、跟 gēn 《ついていく》、上（上学）shàng (shàng xué) 《通う（学校に通う）》、占 zhàn 《占める》、使 shǐ 《使う》、用 yòng 《用いる》、住（住平房）zhù (zhù píngfáng) 《住む（平屋に住む）》、攥 zuàn 《握る》、握 wò 《握る》、捂 wǔ 《手で覆う》、搀 chān 《手を貸す》、拄 zhǔ 《つく》、扶 fú 《寄りかかる》、搂 lōu 《抱く》、抱 bào 《抱く》、捧 pěng 《（すくうように）持つ》、托 tuō 《（支えるように）持つ》、挺 tǐng 《突き出す》、吊 diào 《吊るす》、悬 xuán 《掛ける》、找 zhǎo 《探す》、养（养鸡）yǎng (yǎng jī) 《育てる（鶏を育てる）》、胀 zhàng 《腹が張る》、惯（惯孩子）guàn (guàn hái zi) 《甘やかす（子供を甘やかす）》、攒（攒钱）zǎn (zǎn qián) 《溜める（お金をためる）》、陪 péi 《お供する》、轮 lún 《番が回ってくる》、蒙 méng 《被る》、转 zhuàn 《回る》、淹 yān 《水浸しになる》、抬 tái 《（二人以上で）かつぐ》、举（举手）jǔ (jǔ shǒu) 《挙げる（手を挙げる）》、端 duān 《持つ》、押 yā 《押さえる》、帮 bāng 《手伝う》、拿 ná 《（手で）持つ》、带 dài 《持つ》、挑 tiāo 《（棒の両端にかけて）かつぐ》、扛 káng 《（銃をかつぐように）かつぐ》、背 bāi 《背負う》

#### 4.3.4. 動作動詞

動作動詞は、“-着”“-了”と結合でき、“-了”と結合した場合の意味が《動作が開始したこと》《動作が終結したこと》の二義を表し得、かつ、動詞の後ろに時量詞を置いた場合、《動作の継続時間》《動作完成後の経過時間》をともに表すこのできる範疇である。

看 kàn 《見る》、听 tīng 《聞く》、说 shuō 《話す》、学 xué 《学ぶ》、问 wèn 《訊く》、教 jiāo 《教える》、叫 jiào 《叫ぶ》、改 gǎi 《改める》、做 zuò 《やる》、干 gàn 《する》、吃 chī 《食べる》、喝 hē 《飲む》、弄 nòng 《やる》、运 yùn 《運ぶ》、买 mǎi 《買う》、搬 bān 《（荷物を）運ぶ》、送 sòng 《届ける》、掏 tāo 《かきだす》、造 zào 《作る》、打 dǎ 《打つ》、偷 tōu 《盗む》、挖 wā 《掘る》、洗 xǐ 《洗う》、洒 sǎ 《撒く》、扫 sǎo 《掃く》、擦 cā 《拭く》、浇 jiào 《（水を）やる》、摘 zhāi 《摘む》、修 xiū 《直す》、翻 fān 《ひっくり返す》、拉 lā 《引く》、推 tuī 《押す》、剪 jiǎn 《切る》、裁 cāi 《裁つ》、抹 mǒ 《塗る》、花 huā 《費やす》、削 xiāo 《削る》、敲 qiāo 《敲く》、碰 pèng 《ぶつかる》、摔 shuāi 《投げ付ける》、砍 kǎn 《切る》、砸 zá 《突く》、扔 rēng 《投げ

る》、投 tóu 《投げる》、踢 tī 《蹴る》、射 shè 《射る》、抽 chōu 《吸う》、收拾 shōushi 《片付ける》、打扫 dǎosǎo 《掃除する》、扒拉 pāla 《掻き分ける》、查 chá 《調べる》、吵 chǎo 《言い争う》、骂 mà 《罵る》、喊 hǎn 《呼ぶ》、商量 shāngliàng 《相談する》、告诉 gàosu 《教える》、分析 fēnxī 《分析する》、比较 bǐjiào 《比較する》、研究 yánjiū 《研究する》、介绍 jièshào 《紹介する》、举行 jǔxíng 《行う》、批评 pīpíng 《批判する》、表扬 biǎoyáng 《誉める》、答应 dáying 《答える》、安慰 ānwèi 《慰める》、广播 guǎngbō 《放送する》、求 qiú 《求める》、演 yǎn 《演じる》、尝 cháng 《味わう》、钻 zuān 《狭い空間を通過する》、爬 pá 《這う、のぼる》、闪 shǎn 《光る》、跳 tiào 《飛ぶ》、咳嗽 késou 《咳をする》、挂 guà 《掛ける》、搁 gē 《置く》、插 chā 《差す》、贴 tiē 《貼る》、装 zhuāng 《積み込む》、铺 pū 《敷く》、开 kāi 《開く》、关 guān 《閉める》、挤 qī 《押し合う》、存 cún 《預ける》、租 zū 《レンタルする》、腌 yān 《塩漬けにする》、包 bāo 《包む》、捆 kǔn 《くくる》、绑 bàng 《くくりつける》、盖 gāi 《覆い被せる》、种 zhòng 《植える》、塞 sài 《塞ぐ》、踩 cǎi 《踏む》、写 xiě 《書く》、印 yìn 《印刷する》、叠 dié 《畳む》、点 (炉子) diǎn lúzi 《(ストーブに) 点火する》、穿 chuān 《着る》、戴 dài 《かぶる》、披 pī 《羽織る》、系 xì 《結ぶ》

#### 4.4. 動詞範疇とV2

ここでは、V2がどのような範疇のV1につき得るかを検討する。まず、状態動詞にはV2はつき得ない。平行型・交差型のV2は、V1の動作の〈持続局面（動作の完成後）～終結局面（の状態）〉を描写する。だから、動作の終結局面を持たない状態動詞にはV2はつき得ない。評価型のV2は、V1の動作の（時間の推移による）変化の様態を説明ないし限定する。だから、（動作ではなく属性を描写するのだから当たり前だが）時間の推移による変化を描写しない状態動詞には、評価型のV2はつきえない。

心理活動を表す状態動詞には評価型のV2がつく。たとえば、次の例である。

(28) 难道 我 爱 他 爱错了 吗?

nándào wǒ ài tā àicuòle ma

まさか 私 愛する 彼 愛する+間違える-pfv 疑問

まさか私が彼を愛したのは間違いだったわけではあるまい〔侯精一等編著 2001:2〕

(29) 恨成 这个 样子

hèchéng zhè ge yàngzi

憎む+〜になる これ 類別詞 ようす

憎んでこんなになった〔同上:212〕

(30) 相信 别人 相信惯了

xiāngxìn biérén xiāngxìnguànle

信じる 他人 信じる+慣れる-助詞

他人を信じることに慣れている〔同上:501〕

“～錯”《～し間違える》、“～成”《～して～になる》、“～慣”《～し慣れる》、いずれも評価型である。

変化動詞には、ごく一部の語にV2がつき得るほかは、動補型複合動詞になることはない（“死絶 sǐjué”《死に絶える》など）。ただし、変化動詞はほとんどの語がV2になることができる。これは、変化動詞が表す事象（持続局面）が《動作完成後の状態の残存》だからである。また、変化動詞のうち、すでに動補型複合動詞になっているものは、これ以上V2をとらないし、V2になることもない。これも、音節上の制約のほかに、ある結果状態とそれをもたらした複数の事態を、一つの語が対応する事象としては表せないという事象構造上の制約があるからなのかもしれない。

静態動詞には、次のようにV2と結合して、平行型・交差型・評価型それぞれになることができる。これは、静態動詞が表す事象に終結局面があるためであろう。平行型・交差型は、この終結局面にV2が表す事象が組み込まれることによって、動補型複合動詞の表す事象が構成されているのである。評価型には、V2によって持続局面の様態を説明・限定するものと、終結局面の様態を説明・限定するものがある。また、一部の静態動詞（病 bìng《病気になる》、哭 kū《泣く》、笑 xiào《笑う》など）は、V2になることもできる。

(31) 平行型：站累 zhànlei《立ち疲れる》、趴累 pālèi《腹ばいになって疲れる》、蹲累 dūnlèi《しゃがみ疲れる》、躺膩 tāngnì《臥せているのに飽きる》

交差型：坐坏 zuòhuài《座って壊す》、坐麻 zuómá《座ってしびれる》、躺坏 tānghuài《横たわって壊す》、躺塌 tāngtā《横になってつぶす》、躺脏 tāngzāng《横になって汚す》、站麻 zhàn má《立ちつづけてしびれる》、蹲麻 dūnmá《しゃがみつづけてしびれる》

評価型：坐直 zuòzhí《姿勢よく座る》、坐错 zuòcuò《座り間違う》、坐久 zuòjiǔ《長いあいだ座る》、躺平 tāngpíng《平らに寝かせる》、趴好 pāhǎo《ちゃんと腹ばいになる》、蹲够 dūngòu《しゃがむのに飽きる》、蹲好 dūnhǎo《ちゃんとしゃがむ》、站惯 zhànguàn《立ち慣れる》、站齐 zhànqí《そろって立つ》、趴惯 pāguàn《腹ばいに慣れる》

動作動詞にも、V2がついて平行型・交差型・評価型の各種の動補型複合動詞を形成することができる。この二種類の動詞が表す事象も終結局面を持つ。したがって、終結局面を持たない状態動詞・変化動詞はV2と結合しづらく（逆にV2になりやすく）、終結局面を持つ静態動詞・動作動詞はV2を結合しやすい、ということになる。

	V1の事象構造			V2との結合の可否
	開始局面 (前状況)	持続局面 (表示状況)	終結局面 (後状況)	
状態動詞	無し (開)	無関心	無し (開)	×
変化動詞	あり (閉)	無し (到達→残存)	無し (開)	△ (わずかに) V2になれる
静態動詞	あり (閉)	無し (到達→維持)	あり (閉)	○
動作動詞	あり (閉)	あり (継続→終結)	あり (閉)	○

表：V1の語彙アスペクトと範疇選択

#### 4.5 中国語動詞の下位範疇分類に関する若干の問題点

##### 4.5.1. 状態動詞と変化動詞

実は、動詞の下位範疇をきめる基準の適用に関して、例外がある。“-着”の結合に関してである。意味上、そしてほかの基準から状態動詞に所属すると考えられる語のなかには、“-着”と結合し得るものがある。(上の基準では、状態動詞は“-着”と結合しないはずである。)たとえば、“有 yǒu”《ある、持っている》、“喜欢 xǐhuan”《好きだ》、“爱 ài”《愛している》、“恨 hèn”《憎い》、“顺从 shùncóng”《服従する》、“信任 xìnrèn”《信用する》などである。このように心理的な状態をしめしながらも、具体的な行為を想起しやすい意味を持つ動詞は“-着”との結合ができるようである。

また、変化動詞に所属すると考えられる動詞のなかに“-着”と結合し得る語がある。たとえば、“恢复 huīfù”《回復する》、“减少 jiǎnshǎo”《減少する》、“缩小 suōxiǎo”《縮む》、“提高 tígāo”《上げる》、“下降 xiàjiàng”《降がる》などである。これらは持続局面で漸増、漸減しながら完成状態に到達する。常に変化しつつあるという事象を意味としてふくんでいる。このような動きのある事象に対応する語は“-着”と馴染む。

このようにいくつかの基準を立てて動詞を下位分類していても、必ずその基準に合わない語が見つかる。これは、その基準が意味にかかわるものであるかぎり避けることはできない。細かく分類していけば、最終的には、一つの語に行き着くのである。ここでは、このことと分類の目的が動補型複合動詞の範疇選択であることを考慮して、うえのような語をそれぞれ状態動詞、変化動詞にふくめた。

#### 4.5.2. 動詞の意味範囲：結果の含意に関して

中国語の動作動詞が表す意味範囲に関して、従来の研究においてしばしば次のように言われてきた。

「〔……〕中国語はたとえ“杀”（殺す）のような動詞でも、変化結果はその意味範囲に含まれず、専ら行為のみに重点を置いた表現になっている。」（石村1999:147）この事実は、次のような中国語の文とそれにはほぼ対応する日本語の文のペアによってしめされる。（例文は、荒川 1981:20）

(33) 开了, 可是 没 开开 ——? (ドアを) 開けたが、開かなかった

kāile, kěshì méi kāikai  
開ける-pfv しかし ~しなかった 開ける+分かれる

(34) 揭了, 可是 没 揭 下 来 ——? (掲示を) はがしたが、はがれなかった

jiēle, kěshì méi jiē xià lái  
はがす-pfv しかし ~しなかった はがす おろす 来る

(35) 抓了, 可是 没 抓住 ——? (泥棒を) 捕まえたが、捕まえられなかった

zhuāle, kěshì méi zhuāzhù  
つかむ-pfv しかし ~しなかった つかむ+固定する

(36) 看了, 可是 没 看完 ——? 読んだが、読み終わっていない

kànle, kěshì méi kànwán  
読む-pfv しかし ~しなかった 読む+終わる

この例文から、中国語動詞は“V了”の形（まえの節の動詞）では行為のみをしめし、結果まではしめさないことがわかる。逆に日本語文の対応する動詞は、結果まで含意するので、後ろの節でそれを否定すると奇妙な文になる。ただし、荒川は、動詞の意味が結果を含意するかどうかは、動詞が文中で置かれる「syntagmatic な環境」によるとし、「例えば、行為に重点がある動詞でも、目的語がその行為によって生み出されたものである時は、全体として結果の表現になる」（p. 21）と述べ、次のような例を挙げる。

(37) 兰兰 想了 个 好 办法

lánlán xiǎngle ge hǎo bànfǎ  
蘭々 考える-pfv 類別詞 よい 方法  
蘭々はいいい方法を考えた

(38) 兰兰 捏了 几 只 水果

lánlán niēle jǐ zhī shuǐguǒ  
蘭々 こねる-pfv いくつか 類別詞 果物  
蘭々は、(粘土で) 果物いくつか (こねて) つくった

(37)は“兰兰想出来了个好办法”という文に相当する。(38)は“兰兰捏成了几只水果。”という文に相当する。つまり、動詞が生産動詞（動作・行為の所産を目的語としてとる動詞を便宜的にこう呼ぶ）のような意味を担っているのである。具体的にどのような「syntagmatic な環境」において結果が含意されるかについては、中川 (1995) の研究がある。それによると、次の四つの要因によって、節が結果を含意する意味を持つかどうかが決まる。

- (a) “(...) V了 目的語 (...)” という環境において結果含意的解釈をするのが自然な文になる（後ろの節に否定的な意味を持つ節をとると不自然な文になる）。
- (b) 動詞が表す動作の対象を表す名詞を文頭に置いた文“(有) 名詞 [対象] V了 (...)”では、結果含意の解釈も、結果含意でない解釈も、ともに可能である。つまり、後ろに肯定の意味を持つ節をとっても、否定の意味を持つ節をとっても、ともに自然な文になるのである。
- (c) (b)以外の環境（対象を表す名詞が動詞の後ろに置かれる文）においては、動作の対象が不定であることが統語的に明示されている場合、必ず結果含意の解釈となる。「動作の対象が不定であること」は、“一+類別詞”を名詞の前に置くことでしめされる。
- (d) 環境にかかわらず、動詞の後ろに動量詞句あるいは時量詞句（“数詞+類別詞”でしめされる、動作の回数や動作の継続時間を表す文節範疇）が置かれる場合には、結果を含意しない解釈となる。

(c) で述べられているような目的語の定・不定による結果含意の解釈の違いは、荒川 (1981: 21) にも少しだけ触れられている。

- (38) 抓了 那 只 蝴蝶, 可是 没 抓住  
 zhuāle nà zhī húdié kěshì méi zhuāzhù  
 捕まえる-pfv あれ 類別詞 蝶 しかし ~しなかった つかむ+固定する  
 ?その蝶を捕まえたけれど、捕まらなかった

- (39) \*抓了 一 只 蝴蝶, 可是 没 抓住  
 zhuāle yì zhī húdié kěshì méi zhuāzhù  
 捕まえる-pfv 一 類別詞 蝶 しかし ~しなかった 捕まえる+固定する  
 ?蝶を捕まえたけれど、捕まらなかった

- (40) \*我 找了 一 本 参考书, 可是 没 找到  
 wǒ zhǎole yì běn cānkǎoshū, kěshì méi zhǎodào  
 私 探す-pfv 一 類別詞 参考書 しかし ~しなかった 探す+達成する  
 参考書を探したけれど、見つからなかった

- (41) \*我 要了 一 个 苹果, 可是 他 不 给  
 wǒ yàole yí ge píngguǒ, kěshì tā bù gěi  
 私 要求する-pfv 一 類別詞 林檎 しかし 彼 ~しない あげる  
 リンゴが欲しいと言ったが、彼はくれなかった

(38)は目的語が“那只”で修飾されていて、定のものであることが形式上明示されている。この場合、前節は結果を含意しない。しかし、目的語が不定のものである(39)~(41)の文では、前節全体が結果を含意するため、後節でそれを否定している文全体が容認できなくなっている。

このように、中国語の動作動詞は、動量詞や時量詞によって動詞の表す動作の回数や継続時間が描写されている文や、動詞に“-了”がつかず（つまり動作がまだ実現していないことを表し）、目的語名詞が不特定のものを表さない文に置かれている場合、動作そのものを表しその動作による結果を含意しない。

したがって、動作の結果まで表現したい場合には、上で例示してきた文の後ろの節の述語のように、V1+V2の動補型複合動詞にしなければならない。

つまり、従来言われてきているように、動詞そのものが結果含意しているか否かではなく、“V”や“V了”が述語として置かれる節の統語的環境や語用論的環境によって、節全体の意味が結果を含意するかしないかが決まってくる。それに対して、V1+V2は形式の上から結果を含意することが意味として表されているのである。

#### 4.5.3. 荒川 (1986) における動詞の意味の段階説

動作動詞のうち、生き物の姿勢や体勢を表す動詞（荒川の「静態動詞」）には、表す時間的的局面が二種類ある。起動相と結果相である。これは、動詞の後ろに時量詞をおいた文（節）の意味の違いに反映される。荒川 (1986) は、中国語動詞の意味に「潜在的（予備的）段階」と「顕在的（本来的）段階」があることを仮定することによって、この違いを説明している（荒川1986:32）。

(41) a. 关<sub>α</sub>了 半天 才 关上<sup>注58</sup>

guānle      bàntiān      cái      guānshang  
閉める-pfv      しばらく      やっと      閉める+くつつく  
しばらく閉めようとしていて、やっと閉まった

b. 关<sub>β</sub>了 半天 才 开开

guānle      bàntiān      cái      kāikāi  
閉める-pfv      しばらく      やっと      開ける+分かれる  
しばらく閉まっていて、やっと開いた

(42) a. 开<sub>α</sub>了 半天 才 开开

kāile      bàntiān      cái      kāikāi  
開ける-pfv      しばらく      やっと      開ける+分かれる  
しばらく開けようとしていて、やっと開いた

b. 开<sub>β</sub>了 半天 才 关上

kāile      bàntiān      cái      guānshang  
開ける-pfv      しばらく      やっと      閉める+くつつく  
しばらく開いていて、やっと閉まった

(43) a. 举<sub>α</sub>了 半天 也 举不动

jǔle      bàntiān      yě      jǔbudòng  
挙げる-pfv      しばらく      ~も      挙げる-ない-動く  
しばらく持ち上げようとしていても、上がらなかった

b. 举<sub>β</sub>了 半天 才 放下

jǔle      bàntiān      cái      fàngxià  
挙げる-pfv      しばらく      やっと      置く+下ろす  
しばらく持ち上げていたが、やっと降ろした

<sup>注58</sup> 原文では、「关<sub>1</sub>、关<sub>2</sub>」という表記だが、混乱を避けるため本稿ではαとβを用いた。

例文でしめされるように、 $V_{\alpha}$ 類は「変化にいたる段階」（潜在的段階）を表していて、 $V_{\beta}$ 類は「ある一定状態を維持する動作の段階」（顕在的段階）を表している。後ろの節の述語である動補型複合動詞  $V1+V2$ は、(44) にしめたように、 $V_{\alpha}$ から $V_{\beta}$ への変化を意味として表している。このような二段階（多義性）は、動作動詞と静態動詞にのみ見られる。動補型複合動詞はその多義性を中和する機能を持っていると言えるだろう。

(44) 关 $_{\alpha}$ -----关上-----关 $_{\beta}$       开 $_{\alpha}$ -----开开-----开 $_{\beta}$       举 $_{\alpha}$ -----举起来-----举 $_{\beta}$

#### 4.5.4. 静態動詞と動作動詞

静態動詞には、“坐 zuò”《座る》、“站 zhàn”《立つ》、“躺 tǎng”《横になる》、“等děng”《待つ》といった動詞が入る。静態動詞は、“-着”“-了”と結合でき、“-了”と結合したときの意味が《動作が開始したこと》《動作が終結したこと》の二義を表し得るという点で動作動詞と共通している。しかし、“坐”などの動詞は《ちょうど～しているところだ》という意味の動作の進行を表す副詞“正”“正在”と共起できないという点で状態動詞や一部の变化動詞と共通している。また、“等”や“端 duān”《両手で持つ》などの動詞も、後ろに時量詞をともなったときに、ある状態のままている時間（動作の継続時間）のみを表すという点で、多くの状態動詞と共通している。それでは、静態動詞を特徴づける事象とは何だろうか。次のようなことが考えられる。

“静態動詞-着”の意味は、“動作動詞-着”の意味と異なり、《結果の持続》とでもとらえるべきである。（日本語のアスペクト論において、たとえば、金田一(1950)は、「立つ」を「瞬間動詞」としている。ただし、「笑う」は「継続動詞」に入れている。）これについては、静態動詞と結合する“-着”と動作動詞と結合する“-着”とは異なる“-着”（同音異義）であるとする考え方である。これに似た考え方は、木村英樹(1981)で述べられている。ただし、木村は二つの“-着”がどのような動詞語幹につくかは、動詞語幹の意味によるとする。木村は“-着”を純粋な進行相アスペクトを表す接辞“-着p”と、意味的にも機能的にも「結果補語」（動補型複合動詞のV2）に近い“-着d”とに分けている。そして、“-着d”が結合するのは、動詞が表す動作によって対象を何かに「付着」させたり「留存」させたりする結果をもたらすものでなければならない。いっぽう“-着p”は、対象をある場所から「消失」あるいは「離脱」させてしまうような結果をもたらす動作を表す動詞と結合しなければならない。马(1981)では、“動詞+時量詞”の意味が《動作終了からの経過時間》を表せない、ということが「静態動詞（Vb1）」をそのほかの動詞類から分ける基準であった。しかし、郭(1993)では、その基準は十分条件でしかなく、必要条件ではないことがしめされている。“相信”《信じる》や“爱护”《愛護する》といった動詞も同じ基準を満たすが、これらは静態動詞にはふくめない。

このように、静態動詞は一部で動作動詞と、一部で状態動詞と特徴を共有している。事象の構造から言えば、動作動詞と共有しているのは開始局面と終結局面を持つという特徴であり、状態動詞と共有しているのは、持続局面での状態的な事象であろう。つまり、静態動詞は持続局面で動作が限界点に到達し、それを維持している局面に焦点が当たっているのである。このため、動作動詞と異なり、起動の意味を表すためには、動作の方向を表すV2をつけて複合動詞化（あるいは連語化）する必要がある。

## 第五章 構文

### 5.1. 本章の目的

この章では、動補型複合動詞が述語として用いられる構文に注目して、動補型複合動詞がどのような構文に用いられるのか、用いられ方に違いがあるのか、あるとしたらそれは何故か等を考察していく。

検討する構文は、次の通りである。これらの構文は、述語が動補型複合動詞であることがその構文の成立条件のひとつとなっているものである。

- (a) 自然被動文：名詞項をひとつとる文である。述語の表す動作による状態変化をこうむる対象が、主語となっている。
- (b) 処置文（“把”構文）：前置詞句“把+名詞”によって、状態変化をこうむる対象が導入されている。前置詞句“把+名詞”を項とみなし、主語、前置詞句と最低でも二つの項を持つ文である（もう一つ項を持つ場合もある）。
- (c) 重動文（動詞コピー構文）：目的語項が、述語であるV1+V2のV1をともなって述語の前に現れる構文である。一文内に同じ動詞が二つ現れるので、重動文あるいは動詞コピー構文と称される。これも一応、二項文ということにしておく。

以下、それぞれについて詳しく見ていく。

### 5.2. 自然被動文

自然被動文と呼ばれる文は、次のような構造をしている。

主語〔名詞：受動者／受益者〕＋述語〔動詞＋付加成分〕

また、自然被動文が成立するためには、次のような条件が要る。

- I. 〔述語〕動詞は、単純な形のものであってはならない。
- II. 主語は、定的 (definite) なものである。<sup>注59</sup>〔朱1982: 189〕

これに加えて、木村（1981）は一般被動文と同様に、「結果補語の付加」を被動文成立の条件としている。

自然被動文は、しばしば「受動者主語文」とも呼ばれる。それは、次の(1)-(8)のように、主語項に付与される意味役割がV1の対象だからである（馬 1987:424）。

- (1) 衣裳 晾干  
yīshang liàngānle  
服 干す+乾く-pfv

<sup>注59</sup> II. の条件は、“把”構文における“把”の導く対象の条件にも当てはまる。しかし、ここではこの条件についてはこれ以上立ち入らない。

服が干されて乾いた

- (2) 孩子 哄着了

háizi hǒngzháole

子供 あやす+達成する-pfv

子供があやされて寝付いた

- (3) 灯 点着了

dēng diǎnzháole

明り 点ける+達成する-pfv

明りがつけられて灯った

- (4) 袖子 染红了

xiùzi rǎnhóngle

そで 染める+赤い-pfv

そでが染められて赤くなった

- (5) 茶 沏酪了

chá qīyànle

茶 入れる+濃い-pfv

お茶が濃く入れられた

- (6) 刀 磨坏了

dāo móhuàile

包丁 研ぐ+壊れる-pfv

包丁が研がれてだめになった

- (7) 树 放倒了

shù fàngdǎole

木 倒す+倒れる-pfv

木が伐り倒された

- (8) 帽子 吹掉了

màozi chuīdiào

帽子 吹く+落ちる-pfv

帽子が吹き落とされた

(1)では、V1“晾”《干す》と主語“衣裳”《服》との関係は、動作と客体(対象)の関係になっている。実際、“晾衣裳”という句や節が成立するのである。(2)-(8)の主語とV1との関係も同様である。だから、この種の構文は「受動者主語文」と呼ばれこともあるのである。しかし、この構文におけるV1と主語との関係は、動作・客体関係だけではない。(9)-(12)は動作主・動作関係、(13)-(15)は道具・動作関係、(16)-(19)は、马(1987:424)はどう呼ぶべきか分からないと言っているが、実際、主語とV1とのあいだには直接的な関係が無い。間接的な関係はあるように見えるが、それは結果として含意される意味とでも言うべきものである。言語そのものが担っている意味ではない。

- (a) 主体・動作関係

(9) 小王 洗累了

xiǎowáng xǐlèile

王君 洗う+疲れる-pfv

王君が洗い疲れた

(10) 树 长斜了

shù zhǎngxiéle

木 育つ+斜めである-pfv

木が斜めに伸びた

(11) 老师 讲烦了

lǎoshī jiǎngfánle

先生 話す+飽きる-pfv

先生は話し飽きた

(12) 孩子 睡着了

háizi shuìzháole

子供 眠る+達成する-pfv

子供が寝付いた

(b) 道具・動作関係

(13) 刀 切钝了

dāo qièdùnle

包丁 切る+鈍い-pfv

包丁が使われてなまくらになった

(14) 铅笔 写折了

qiānbǐ xiěshéle

鉛筆 書く+折れる-pfv

鉛筆が書くことによって折れた

(15) 肩膀 扛红了

jiānbǎng kánghóngle

肩 担ぐ+赤い-pfv

肩が(物を)担いで赤くなった

(c) 関係不明

(16) 头发 愁白了

tóufà chóubáile

髪 悩む+白い-pfv

髪が、悩んで白くなった

(17) 嘴 气歪了

zuì qìwāile

口 怒る+歪む-pfv  
口が怒りで歪んだ

(18) 肚子 笑痛了

dùzi xiàotòngle  
腹 笑う+痛い-pfv  
おなか、笑って痛くなった

(19) 鞋 洗湿了

xié xǐshīle  
靴 洗う+ぬれる-pfv  
靴が洗うことによってぬれた

(19)では、V1“洗”《洗う》対象は主語“鞋”《靴》ではない。何か別のものを洗っていて、その結果靴がぬれたという状況を表している。

このように、主語とV1の関係はさまざまであり、一定していない。このような事実から、馬は、主語と真に関係するのはV1ではなくV2であるとしている<sup>注60</sup>。この文型をとる動補型複合動詞には、平行型も交差型も評価型もある。しかし、形の上だけからではその区別をすることはできない。

### 5.3. SVO構文と処置文（“把”構文）

中国語は、類型論的にSVO型言語とされる。つまり、“主語+述語+目的語”が基本語順とされる。動補型複合動詞もこの語順の文の述語になることができる。しかし、この文の述語の後ろの位置にたつ名詞句（目的語）には、いくつか制約がある。たとえば、目的語は基本的に（ほかの条件が無ければ）“数詞+類別詞+名詞”でなければならない。つまり、不定の指示物でなければならないとされる（馬 1987:437-441）。また、主語となる項に「致使力」が乏しい場合にも、この構文は使いづらい。「致使力」とは、「主体Aが、対象Bに対する動作Vの遂行によって、結果の事態Rを無理なく（極めて高い予見可能性を以て）引き起こすことのできる能力ないし威力」と定義される（木村英樹 1992:13）。

たとえば、木村 (1992:12) は次の例を挙げている。

(20) a. 小王 被 石头 绊倒了

xiǎowáng bèi shítou bāndǎole  
王君 ~される 石 ひっかける+倒れる-pfv  
王君は石にひっかけられて（つまづいて）倒れた

b. ??石头 绊倒了 小王

shítou bāndǎole xiǎowáng  
石 ひっかける+倒れる-pfv 王君

(21) a. 衣服 被 小李 洗脏了

yīfu bèi xiǎolǐ xǐzāngle  
服 ~される 李君 洗う+汚い-pfv  
服は李君に洗い汚された

<sup>注60</sup> 馬 (1987:425)は、「N+V1V2了」が「N+V2了」からの「拡張（“拡張”）」であるという趣旨を述べている。ある文（あるいは文型）に何か語を加えて新たな文（文型）が得られたとき、語と語のあいだの関係が不変であれば、新しくできた文（文型）をもとの文（文型）の拡張と呼ぶ。

b. ??小李 洗脏了 衣服

xiǎoli xǐzāngle yīfu  
李君 洗う+汚い-pfv 服

(20b)における“石头”は王君を転ばせるという事象に対する「致使力」を欠く。これは“石头”が単に無生物であるという理由によるのではない。なぜなら、同じ無生物主語文でも“冷箭射死了小王 lěngjiàn shèsǐle xiǎowáng”《不意の矢が王君を射殺した》のような文は成立するからである。この場合、矢が人に刺されれば人が死ぬということは極めて高い予見性を持って言える。したがって、この文における“冷箭”には高い「致使力」があると言えるのである。(21b)における、服を洗ってその結果服が汚れるという事象は、一般には予見性の極めて低いものである。このような予見性の低い事象に対しては、主体が有生物であっても「致使力」は弱い。ただし、複数のインフォーマントによると、“洗脏”という語そのものが認められないそうである。洗濯することによって、じゅうぶん予見される結果をともなう“洗干净 xǐgānjing”《洗ってきれいになる》、“洗花 xǐhuā”《洗って色むらができる》、“洗褪色 xǐtùisè”《洗って色褪せる》といった語は可能である。

一般に「処置文」あるいは「“把”構文」と呼ばれている構文は、次のような構造をしている。

主語〔名詞：動作主〕+ “把”〔前置詞〕+ 目的語〔名詞：対象〕+ 述語〔動詞+付加成分〕

“把”構文の成立には、一般に次のような必要条件があるとされている。(a) 前置詞“把”の目的語となる名詞(句)は、定(definite)あるいは総称(generic)でなければならない。(b) 述語の表す意味は、“把+名詞”句が表す事象に対してなんらかの処置(disposal)を表していなければならない。(b)の処置を表すには、次のような形式上の手段がとられる(杉村1994: 181)。

(22) 処置文の場合、述語の前か後ろに次の二つのうちのいずれかを表す成分を伴わなければならない。

I. 行為者の意志・積極性を反映する成分。

II. 処置対象の変化(状态的、状況的、位置的)を反映する成分。

I.の「行為者の意志・積極性」は、典型的には、動詞を重ね型にしたり、数量表現を付加したりすることによって表すことができる((23)-(26)は杉村1994: 182)。

重ね型：

(23) 你 把 这 道 题 再 想想 看  
nǐ bǎ zhè dào tí zài xiǎngxiang kàn  
あなた ~を これ 類別詞 問題 また 考える.重複 見る  
この問題をもう一度考えてみなさい

(24) 他 把 那 封 信 看了 又 看  
tā bǎ nà fēng xìn kànle yòu kàn

彼 ～を それ 類別詞 手紙 読む-pfv また 読む  
彼はその手紙を繰り返し読んだ

数量表現：

(25) 我 把 金魚 缸 的 水 換 一 下 儿

wǒ bǎ jīnyú gāng de shuǐ huàn yíxiàr  
私 ～を 金魚 鉢 の 水 替える ちょっと  
私は金魚鉢の水を取り替える

(26) 他 把 学 过 的 语 法 一 课 一 课 地 都 复 习 了 一 遍

tā bǎ xuéguo de yǔfǎ yí kè yí kè de dōu fùxíle yí biàn  
彼 ～を 学ぶ-exp の 文法 一 課 一 課 助詞 みな 復習する-pfv 一 度  
彼は既習の文法を一課ずつ一通り復習した

II.の処置対象の状態・状況・位置などの変化は、動詞を結果複合動詞にしたり、その他の派生的手段（「方向補語」、「様態補語」）を用いたりするによって表す。

(27) 把 儿 子 高 大 的 身 影 也 融 到 了 墙 的 那 边 （彭见明《那山 那人 那狗》）

bǎ érzi gāodà de shēnyǐng yě róngdào le qiáng de nàbiān  
～を 息子 大きい 助詞 人影 も 融ける+到達する-pfv 壁 の あそこ  
背の高い息子の姿も壁と見分けがつかなくなった

(28) 把 脚 下 的 踏 板 踩 得 像 一 面 铁 皮 鼓 （毕淑敏《一厘米》）

bǎ jiǎoxià de tàbǎn duòde xiàng yí miàn tiěpí gǔ  
～を 足許 の 踏板 足踏みする-非述語化 ～のようだ 一 類別詞 ブリキ 太鼓  
足許の踏板をブリキ製の太鼓のように踏み鳴らした

(29) 先 把 儿 子 抱 上 去 ， …… （《一厘米》）

xiān bǎ érzi bào shàng qù  
まず ～を 息子 抱く 上がる 行く  
まず、息子を抱いて上らせて、……

(27)は結果複合動詞、(28)はいわゆる「様態補語」、(29)はいわゆる「方向補語」である。これらの成分がないと、不適格であったり ((31))、主文として言い切ることが不自然であったり ((32))、未然の出来事を表す表現ができなかったりする ((33))（木村英樹 2000: 29）。<sup>注61</sup>

(30) 小 红 把 小 明 拽 倒 了

xiǎohóng bǎ xiǎomíng zhuàidǎole  
紅君 ～を 明君 引っ張る+倒れる-pfv  
紅くんは明くんを引き倒した

(31) \*小红把小明拽了

<sup>注61</sup> 安井 (1999) は、“把”構文を成立させるために述語が持つ必要条件として、＜動作の限界性＞を挙げている。

(32) ??小红 把 筷子 一 放  
 xiǎohóng bǎ kuàizi yí fàng  
 紅君 ~を はし ひとたび 置く  
 紅くんは箸を置くと……

(33) \*你 快 把 大衣 脱!<sup>注62</sup>  
 nǐ kuài bǎ dàyī tuō  
 あなた 早く ~を 外套 脱ぐ  
 はやくコートを脱ぎなさい

しかし、逆にどんな動補型複合動詞でも“把”構文をつくれるというわけではない。当然ながら、V1+V2全体が自動詞として機能する語は、“把”構文には用いられない、と予想される ((34)-(36)は李臨定 1980: 94)。

(34) 你 长胖了  
 nǐ zhǎngpàngle  
 あなた 育つ+肥っている-pfv  
 君は肥った

(35) 你 胆子 变小了  
 nǐ dǎnzi biǎnxiǎole  
 あなた 肝っ玉 変わる+小さい-pfv  
 君は度胸がなくなった

(36) 姑姑, 该 睡醒了  
 gūgu, gāi shuìxǐngle  
 おばさん ~すべきだ 眠る+目覚める-pfv  
 おばさん、起きなよ

このようなタイプには、“走累”《歩き疲れる》や“冻病”《凍えて病気になる》などの平行型の一部があてはまる。李臨定(1980)によれば、これらの結果複合動詞は“把”構文や“被”構文にすることはできない。しかし、石村(2000)によれば、これら自動詞として働く結果複合動詞は、「自分で自分がある結果状態にする」という再帰的な意味構造によって捉えることができ、「使役主を変化対象と同一視することで自動詞化を行なっている」(p.150)のである。だから、「原因主」を主語に導入することによって他動詞文にすることができる。たとえば、石村の挙げる<D類>が、原因主を導入した例にあたる。(第四章(44)を再掲する。下線部(木村による)が原因主。)

(37) a. 敲 门 声 惊醒了 莉莉  
 qiāo mén shēng jīngxǐngle lìlì  
 叩く 扉 音 驚く+目覚める-pfv 莉莉  
 莉莉はノックの音に驚いて目を醒ました←ノックの音が莉莉を驚かして目を覚めさせた

b. 冰冷 的 河水 冻木了 我 的 脚  
 bīnglěng de héshuǐ dòngmùle wǒ de jiǎo  
 冷たい の 川の水 凍える+しびれる-pfv わたし の 足

<sup>注62</sup> インフォーマントによると、“你快把大衣脱了!”と、文末に“了”を置けば的確な文になるそうである。

氷のように冷たい川の水で私の足はかじかんだ←氷のように冷たい川の水が私の脚をしびれさせた

c. 多年 的 辛苦 累倒了 他

duōnián de xīnkǔ lèidǎole tā

永年 の 辛苦 疲れる+倒れる-pfv 彼

彼は永年の辛苦で倒れた←永年の辛苦が彼を疲れて倒れさせた

しかし、(37)のような「原因主」を主語にとる構文は無制限に許されるわけではない。鈴木 (2004:181) は、“把”構文ではなくSVO構文ではあるものの、「自然発生的出来事、背景状況、時間的推移、事態発生 の環境など、状況的出来事を意味する名詞句が使役主になる」文が扱われている。このような文でも、木村 の言う「致使力」のある事象が主語になることが求められる。つまり、(37a-c)はそれぞれ、《ノックの音》が《莉莉が目を覚ます》ことに対して、《ひどく冷たい川の水》が《足がかじかむ》ことに対して、《永年の辛苦》が《彼が倒れる》ことに対して「致使力」を持っているのである。

このような型の文では、(38)-(40)のように、“他”や“张三”といった動作主体（つまり、個体）を表す語が主語になった文は非文になる。これに対して、ある行為の過程を表したり、そのような過程を含意する時間（つまり、事象）を表したりする句が主語になった文は成立する。また、(40)の“袭人的寒気”のように、その実体が機能することによって、何かに状態変化を引き起こすような事態を容易に想起させるものを表す名詞（句）が主語になった文も成立する。このような現象にも、上のように木村の「致使力」による説明があてはまるだろう。つまり、平行型の一部を他動詞的に用いる場合、述語が描写する事象はその引き起こし手（主語）に「致使力」が備わっていることを求めるのである。この場合、個体・個物というものは「致使力」が弱い、あるいは無いとみなされる。ある事象を表すものほど「致使力」が強いとみなされるのである。

(38) a. \*他 闲死 我 了

tā xiánsǐ wǒ le  
彼 暇である+死ぬ 私 終助詞

彼が私を死ぬほど暇にさせた

b. 一 天 没 几 件 活 好 干, 闲死 我 了

yì tiān méi jǐ jiàn huó hǎo gàn, xiánsǐ wǒ le  
一 日 無い いくつか 類別詞 仕事 いい する 暇である+死ぬ 私 終助詞

一日ほとんどうろくな仕事がないことが私を死ぬほど閑にさせた

(39) a. \*张三 羞红了 巩俐 的脸

zhāngsān xiūhóngle gǒnglì de liǎn

张三 恥ずかしい+赤い-pfv コンリー の 顔

張三がコンリーの顔を恥ずかしがらせて赤面させた

b. 成都 男孩 激情 一 吻, 羞红了 巩俐 的脸

chéngdū nánhái jīqíng yì wěn, xiūhóngle gǒnglì de liǎn

成都 男の子 情熱的に ひとたび キスをする 恥ずかしい+赤い-pfv コンリー の 顔

成都の男の子が情熱的にキスをしたことがコンリーの顔を恥ずかしがらせて赤面させた

(40) a. \*他 冷醒了 我  
 tā lěngxǐngle wǒ  
 彼 冷やす+目覚める-pfv 私  
 彼が私を冷やして目を覚まさせた

b. 袭人 的 寒气 冷醒了 我  
 xírén de hánqì lěngxǐngle wǒ  
 人を襲う の 寒気 冷やす+目覚める-pfv 私  
 ひどい寒気が私を冷やして目覚めさせた

交差型においては、主語で表されるV1の動作主が、「“把”+名詞」の「名詞」が表す対象に動作を行い、対象はその動作の影響を直接受けて変化する。(42)(43)のように、「意図しない結果」を表すこともある。以下、例文は王红旗(2001)からの引用である。

(41) 他们 把 小偷 打死了  
 tāmen bǎ xiǎotōu dǎsǐle  
 彼ら ~を こそ泥 殴る+死ぬ-pfv.  
 彼らはこそ泥を殴り殺した

(42) 我 把 羊肉 冻硬了  
 wǒ bǎ yáng ròu dòngyǐngle  
 私 ~を 羊肉 凍る+硬い-pfv  
 私は羊肉を凍らせて硬くした

(43) 他 俩 把 扁担 抬折了  
 tā liǎ bǎ biǎndan táishéle  
 彼 二人 ~を 天秤棒 担ぐ+折れる-pfv  
 彼ら二人は天秤棒を担いで折ってしまった

「“把”+名詞」の「名詞」が受ける変化は、状態の変化に限らず、位置の変化であることもある。

(44) 司机 把 车 开走了  
 sījī bǎ chē kāizǒule  
 運転手 ~を 車 運転する+去る-pfv  
 運転手は車を走らせていった

V1は対象に物理的な力を加える動作であるとは限らない。

(45) 几 个 孩子 把 老师 问愣了  
 jǐ ge hái zǐ bǎ lǎoshī wèn lèngle  
 いくつか 類別詞 子供 ~を 教師 聞く+あきれる-pfv  
 幾人かの子供が教師に質問してあきれさせた

V2がV1の表す動作の結果として生じたというよりは、V1の動作の様態（どのように動作を行なったか）を表している場合もある。

(46) 我 把 这 线条 画直了

wǒ bǎ zhè xiàntiáo huàzhíle  
私 ~を これ 線 描く+まっすぐ-pfv  
私はこの輪郭のラインをまっすぐに引いた

V1の表す動作が、「“把”+名詞」の「名詞」が表すものを対象としていない文もある。次の文では、「“把”+名詞」の「名詞」が表すのは、V1の直接の対象というよりはV1の動作の行なわれる場所とでも解釈すべきものである。なお、“跳 tiào”という動詞は二項動詞であり、後ろに場所を表す名詞のほかに、道具を表す“绳 shéng”「繩」、「皮筋 píjīn」「ゴムひも」、「杆 gān」「さお」なども直接置くことができる。

(47) 孩子 把 房顶 跳塌了

háizi bǎ fángdǐng tiàotāle  
子供 ~を 屋根 跳ぶ+崩れる-pfv  
子供が跳ねて屋根が抜けた

(文中には表されていないか、主語で表される) V1の動作主が、(主語で表されるか、文中には表されていない) 対象に動作を行うが、状態変化するのは動作を直接受けた対象(主語で表されるもの)ではなく、それ以外の(「“把”+名詞」の「名詞」で表される)人や物である。この文型の場合、主語で表されるものは、V1の動作主か対象かのいずれかである。主語がV1の動作主を表している場合、V1の動作の対象は文中には表されない。逆に、主語がV1の動作の対象を表している場合、V1の動作主は文中には表されない。

まず、主語がV1の動作主を表している例を挙げる。

(48) 你们 把 院子 刨乱了

nǐmen bǎ yuànzi páoluànle  
あなたたち ~を 庭 掘る+秩序の無い-pfv  
君らが(木を)掘り返して庭を散らかした

(49) 老太太 把 眼 哭瞎了

lǎotàitai bǎ yǎn kūxiāle  
おばあさん ~を 目 泣く+失明する-pfv  
おばあさんは泣いて目が見えなくなった

(50) 他 把 这 一村 吃怕了

tā bǎ zhè yì cūn chīpàle  
彼 ~を これ 一村 食べる+恐れる-pfv  
彼は食べてこの村を恐れさせた

次に、主語がV1の動作の対象を表している例である。

(51) 这 些 牛肉 把 刀 都 切钝了

zhè xiē niúròu bǎ dāo dōu qiēdùnle

これ 類別詞 牛肉 ～を 包丁 すっかり 切る+切れ味が悪い-pfv  
これらの牛肉を切って包丁がすっかりなまくらになってしまった

#### 5.4. 重動文（動詞コピー構文）

重動文（動詞コピー構文）には、次のような性質がある（Li & Thompson 1981:Ch.13）。

- I. 第一動詞（はじめに現れる動詞）の目的語名詞が表すのは、指示的（referential）・有情物（animate）・定（definite）ではいけない。
- II. 第一動詞には、“了 -le”や“过 -guo”などのアスペクト接辞がつかない。第二動詞（後ろに置かれる動詞）につく。
- III. 否定を表す副詞“不 bù”や“没 méi”は第一動詞の前には置かれず、第二動詞の直前に置かれる。
- IV. “只 zhǐ”「～だけ」、 “还 hái”「まだ、ほどほどに」、 “也 yě”「～も」といったある種の副詞は、第二動詞の直前にのみ置かれ、第一動詞の前には置かれない。

王红旗 (2001) は、V2の表すものが文中のほかのどの言語形式（たとえば名詞句）と意味的に関係づけられているか（王はこれを“语义指向”と呼んでいる。）ということと、V1+V2がどのような構文をとるかということに相関関係があるという趣旨を述べている。王 (2001) では、“把”構文と重動文に限って、このことを論じている。

王はまず、“把”構文と重動文とを次のように分類している。

- “把”構文 甲類：主語+“把”+目的語 $\alpha$ +V1+V2（目的語 $\alpha$ がV1の動作主以外）  
乙類：主語+“把”+目的語 $\beta$ +V1+V2（目的語 $\beta$ がV1の動作主）  
（例外：主語+“把”+目的語 $\gamma$ +V1+V2（目的語 $\gamma$ がV1の対象、主語がV2の対象・経験者等）
- 重動文 甲類（主語 $\beta$ がV1の動作主）  
甲1類：主語 $\beta$ +V1+目的語+V1+V2（V1+V2の後ろに目的語なし）  
甲2類：主語 $\beta$ +V1+目的語1+V1+V2+目的語2（V1+V2の後ろに目的語あり）  
乙類：主語 $\alpha$ +V1+目的語+V1+V2（主語 $\alpha$ がV1の動作主以外）

まず、“把”構文が甲乙の二類に分けられる。甲類は、前置詞“把”の目的語が表すものが、V1の動作主（“施事”）以外を表す（この意味関係を仮に $\alpha$ で表しておく）。乙類は、前置詞“把”の目的語が、V1の動作主を表す（この意味関係を仮に $\beta$ で表しておく）。重動文も大きく甲乙の二類に分けられる。重動文の場合は、“把”構文と異なり、（目的語ではなく）主語がV1の動作主を表す場合（= $\beta$ 、甲類）と動作主以外を表す場合（= $\alpha$ 、乙類）とに分けられている。そして、述語（V1+V2）の後ろに“把”の目的語とは別の目的語が置かれるか否かで、甲類をさらに甲1類と甲2類とに分けている。王の分類は“把”構文と重動文とで甲乙の意味関係が逆になっていることに注意してほしい。この点で分かりづらくなっている。

このように分類した構文において、それぞれどのような型のV1+V2が述語となり得るか。“把”構文・甲類をとり得るV1+V2は、V2の表す状態がV1の表す動作の対象（“客体”）と関係づけられている場合（第一類）と、V2の表す状態がV1の表す動作の直接の対象とは異なるもの（“辅体”）と関係づけられている場合（第二類）とがある。“把”構文・乙類をとり得るV1+V2は、V2の表す状態がV1の表す動作の主体（“施事”）と関係づけられている（ただし、これには例外があり、全てがそうであるわけではない。後述）。重動文・甲1類をとり得るV1+V2は、“把”構文・乙類と同様に、V2の表す状態がV1の表す動作の主体と関係づけられているものである。重動文・甲2類と乙類をとり得るV1+V2は、V2の表す状態がV1の表す動作の直接の対象とは異なるものと関係づけられているものである。これを王(2001:10)は次のような表にまとめている。「(+)」は例外があること（当該の構文をとれないV1+V2があること）をしめす。表中の「補語」とは、V2のことである。

文型／ 分布  補語の “语义指向”	“把”構文		重動文		
	甲類	乙類	甲類		乙類
			甲1類	甲2類	
動作主体（“施事”）	—	(+)	(+)	—	—
動作客体（“客体”）	+	—	—	—	—
その他の参与者 （“辅体”）	+	—	—	+	+

以下に例文を挙げる。“把”構文の例は、5.3節で挙げたので、ここでは、重動文の例を挙げる。

甲1類は、文末（述語の後ろ）に目的語を持たない文型である。主語が表すのは、V1の表す動作の主体であるとともに、V2の表す状態の対象である。つまり、平行型のV1+V2を述語とする文型である。

(52) 我们 俩 逛 商店 逛累了

wǒmen liǎ guāng shāngdiàn guānglèile

私たち二人 ぶらつく 店 ぶらつく+疲れる-pfv.

私たちは二人はお店をぶらぶら観て回って疲れた

(53) 她 看书 看烦了

tā kàn shū kànfanle

彼女 見る 本 見る+煩わしい-pfv.

彼女は本を読むのが煩わしくなった

(54) 他们 爬山 爬怵了

tāmen pá shān páchùle

彼ら 登る 山 登る+脅える-pfv.

彼らは山に登るのに怖じ気づいた

(55) 她 想 孩子 想疯了

tā xiǎng háizi xiǎngfēngle

彼女 考える 子供 考える+気が狂う-pfv.

彼女は子供のことを思って気が変になった

(56) 老师 讲 故事 讲哭了

lǎoshī jiǎng gùshi jiǎngkūle

先生 話す 物語 話す+泣く-pfv.

先生はお話をして泣いてしまった

甲2類は、文末（述語の後ろ）に目的語を持つ文型である。主語で表されるのは、V1の表す動作の主体である。V2の表す状態の対象が、V1の表す動作の主体でも対象でもない参与者（“辅体”）である。V1の表す動作主の身体部位や装身具であることが多い。つまり、交差型のV1+V2を述語とする文型である。V1の表す動作の直接の対象は、「第一動詞+名詞」の「名詞」が表している。

(57) 她 切 菜 切破 手指头了

tā qiē cài qiēpò shǒuzhǐtóu le

彼女 切る 野菜 切る+壊す 手の指 終助詞

彼女は野菜を切っていて指を傷つけてしまった

(58) 她 哭 儿子 哭瞎了 一只眼

tā kū érzi kūxiále yì zhī yǎn

彼女 泣く 息子 泣く+失明する-pfv. 一量詞目

彼女は息子のために泣いて片方の目を失明した

(59) 老太太 盼 媳妇 盼白了 头了

lǎotàitai pàn xīfu pànbáile tóu le

母親 待ち望む 息子の嫁 待ち望む+白い-pfv. 頭 語気助詞

母親は嫁取りを待ち焦がれて白髪頭になった

(60) 他 唱 歌唱哑了 嗓子了

tā chàng gē chàngyǎle sǎngzi le

彼 歌う 歌 歌う+嗄れる-pfv. のど 語気助詞

彼は歌を歌ってのどを嗄らした

(61) 孩子 洗 衣服 洗湿 鞋了

háizi xǐ yīfu xǐshī xié le

子供 洗う 服 洗う+濡れる 靴 語気助詞

子供は服を洗って靴を濡らした

(62) 爸爸 剁 牛肉 剁钝了 两把刀

bàba duō niúròu duōdùnle liǎng bǎ dāo

父 刻む 牛肉 刻む+切れ味が悪い-pfv. 二 類別詞 包丁

父は牛肉を切り刻んで包丁を二丁鈍らにした

(63) 他 讲 故事 讲哭了 好几个 学生

tā jiǎng gùshi jiǎngkūle hǎo jǐ ge xuésheng

彼 話す 物語 話す+泣く-pfv. とても いくつか 類別詞 学生  
彼が語って何人もの学生が泣いた

- (64) 我 揭 邮票 揭破了 信封 了  
wǒ jiē yóupiào jiēpòle xìnfēng le  
私 剥がす 切手 剥がす+破る-pfv. 封筒 語気助詞  
私は切手を剥がして封筒を破ってしまった

(57)-(60)では、述語の後ろに置かれる名詞句は、V1の動作主（主語で表される）の身体部位であると解釈される。(61)では、述語の後ろに置かれる名詞「鞋」「靴」は、V1の動作主が身につけているものであると解釈される。

(62)-(64)のように、述語の後ろに置かれる名詞句が、主語の表すもの（V1の動作主）の身体部位や装身具ではない文もある。(62)の場合、“两把刀”「二丁の包丁」はV1“剃”するときに必要な不可欠な道具である。“剃”は《包丁などを振り下ろして、（食材などを）切る、刻む》という動作を意味として表すからである。包丁類を用いるということが意味にふくまれているのである。だから、次のような文は奇妙である。(63)の場合、“好几个学生”「何人もの学生」はV1“讲”「話す」の「相手」とでも記述できる関係である。“讲”を単独の述語動詞として用いた場合、後ろに目的語として従えるのは、話す内容を表す名詞（句）や節である。話す相手は、“跟～”「～と」というように「前置詞+名詞」という形式で表される。この形式は文中の必須の要素ではない（この形式が無くても、文は成立する）。その点では、“好几个学生”の表すものは“讲”の表す事態にとって必要不可欠なものではない。しかし、複合したV1+V2“讲哭”が表す事態にとっては、“好几个学生”が表すものは必須であると考えられる。“讲哭”が表すのは、《（何かが）話された結果として、誰かが泣く》という事態であり、《誰かが泣く》の《誰か》を表す形式が文中に示される必要があるからである。もし、表されなければ、《誰か》はV1“讲”の動作主であると解釈される。

(64)の場合、述語の後ろに置かれる名詞“信封”「封筒」は、V1“揭”が表す動作が直接の対象としていた“邮票”「切手」が貼られていたものである。“揭”の表す動作が行なわれる前には、“邮票”と“信封”はくっついていてと解釈される。この文における“揭”の意味は、概略《切手に力を加えて、切手をそれが貼られている封筒から分離する動作》と記述できる。このような意味が表す事態における“揭”と“信封”の関係は、おおよそ「直接の対象に準じて影響を受ける対象」とでも規定できそうである。簡潔に「準対象」と呼んでおく。さらに、複合したV1+V2“揭破”が意味として表すのは、《何かをAから剥がした結果として、Aが破れる》という事態である。この場合、直接の（変化の）対象となるのは、Aである“信封”である。つまり、V1“揭”においては「準対象」であった“信封”が、V1+V2“揭破”では直接の対象となっているのである。

以上のように、述語の後ろに置かれる名詞（句）が主語が表す動作主の身体部位や装身具でない場合、主体が動作（V1で表される）を行なうのに必要不可欠な道具（例62）、主体が行なう動作の相手（例63）、あるいは、主体が行なう動作の直接の対象にくっついていてのもの（準対象、例64）を表すのである。このような多様なものを表す名詞句が、文の目的語として置かれるのは、いずれもがV2の表す変化の対象であるという共通の（述語の表す意味との）関係を持っているからであろう。

重動文・乙類では、主語の表すものがV1の表す動作の主体でも対象でもない参与者である。V2の表す状

態の対象が、主語の表すものに等しい。つまり、V1の表す動作の主体でも対象でもない参与者である。したがって、乙類も甲2類と同様に交差型のV1+V2を述語とする文型である。V1の表す動作の主体は、文上に現れない。

(65) 手指头切 菜 切破了

shǒuzhǐtóu qiē cài qiēpòle

手の指 切る 野菜 切る+壊す-pfv.

指は野菜を切っていて傷つけてしまった

(66) 嗓子唱 歌 唱哑了

sǎngzi chàng gē chàngyǎle

のど 歌う 歌 歌う+嘎れる-pfv.

のどは歌を歌ってからしてしまった

(67) 左眼哭 儿子 哭瞎了

zuǒyǎn kū érzi kūxiāle

左目 泣く 息子 泣く+失明する-pfv.

左目は息子のために泣いて見えなくなってしまった

(68) 那把 刀 切 肉 切钝了

nà bǎ dāo qiē ròu qiēdùnle

それ 量詞 包丁 切る 肉 切る+切れ味が悪い-pfv.

その包丁は肉を切って鈍らになった

(69) 毛巾 擦 桌子 擦脏了

máojīn cā zhuōzi cāzāngle

タオル 拭く 机 拭く+汚い-pfv.

タオルは机を拭いて汚くなった

(70) 这 三 斤 线 织 毛衣 织完了

zhè sān jīn xiàn zhī máoyī zhīwánle

これ 三 斤 糸 編む セーター 編む+終わる-pfv.

この三斤の糸はセーターを編んで使い切った

(71) 头发 愁 房子 愁白了

tóufà chóu fángzi chóubáile

髪 悩む 家 悩む+白い-pfv.

髪が家のことを心配して白くなった

(72) 手腕子 剁 肉 剁酸了

shǒuwànzi duò ròu duòsuānle

手首 刻む 肉 刻む+だるい-pfv.

手首が肉を切って痛くなった

(73) 嗓子 喝 酒 喝哑了

sǎngzi hē jiǔ hēyǎle

のど 飲む 酒 飲む+嘎れる-pfv.

のどが酒を飲んで嘎れてしまった

(74) 这块山坡他<sub>(ママ)</sub>刨树刨乱了  
zhè kuài shānpó tā páo shù páoluànle  
これ 量詞 山の斜面 彼 掘る 木 掘る+乱れる-pfv.  
この山の斜面は彼が木を掘り起こして散らかした

(75) 左手缠毛线缠麻了  
zuǒshǒu chàn máoxiàn chàn mále  
左手 卷く 毛糸 卷く+しびれる-pfv.  
左手が毛糸を巻いてしびれた

(76) 戏台跳舞跳塌了  
xìtái tiàowǔ tiàotāle  
舞台 踊りを踊る 跳ねる+つぶれる-pfv.  
舞台は踊りを踊って踏み抜いた<sup>注63</sup>

(77) 棉鞋踩雪踩湿了  
miánxié cǎi xuě cǎishīle  
綿靴 踏む 雪 踏む+濡れる-pfv.  
綿入れの靴が雪を踏んで濡れた

(78) 衣服吃西瓜吃脏了  
yīfu chī xīguā chīzāngle  
服 食べる スイカ 食べる+汚い-pfv.  
服がスイカを食べて汚れた

(79) 钥匙跑步跑丢了  
yàoshi pǎobù pǎodiūle  
鍵 駆け足する 走る+失う-pfv.  
鍵はジョギングをして落としてしまった<sup>注64</sup>

これらの文は、VIのあらわす事象に対して、主語がその道具であったり、随伴物であったり、場所であったり、間接的な影響を受けるものであったりと、さまざまな関係を表している。ただ、これらを厳密に区別することは困難である。

以上、動補型複合動詞を述語とする重動文（動詞コピー構文）を見てきたが、この構文は形式と述語になりうる型の対応がかなりはっきりと分かる。つまり、述語の後ろに目的語2を持たない文は平行型が述語になっていて、述語の後ろに目的語2を持つ文は交差型が述語となっている。

<sup>注63</sup> “跳舞”は離合動詞である。3.6.1.参照。

<sup>注64</sup> “跑步”は離合動詞である。3.6.1.参照。

## 第六章 結論

本稿では、中国語の動補型複合動詞の分析・記述を通して、《言語において語とは何か、語をどのように認定すればいいか》という問いに迫ろうとした。しかし、その問いにどれだけ迫れたのか覚束ない気持ちである。中国語のように形態変化の乏しい言語においても、語というものは存在する。それは言語内の音韻・形態・統語・意味の各レベルで存在し、話者の心理的な実在としてもあるだろう。しかし、それらが必ずしも一致しないというところから、問題が複雑になる。本論でも述べたように、各レベルのミスマッチは、おそらくどの言語にも見られるであろうし、その意味で普遍的な現象であろう。しかし、ミスマッチの存在ゆえに、語の存在を否定することはすべきではない。形態素を結合させていった（あるいは文を分析していった）ある段階で、統語論という《規則》が支配するレベルと、形態論という《傾向》が支配するレベルの接点がある。しかし、それは同一言語内でも一定ではない。たとえば、日本語では、述部（動詞複合体）と「名詞+格助詞」という補語部分とに見られるだろう。

また、語はそれ自体で完結した構造体ではないということも分かった。語の構成要素は、付属形式でありながらも、それが独立形式由来のものであるならば、その文法的範疇・機能・意味をかなり色濃く引き継いでいる。ただし、それは語彙化の圧力にさらされながらではあるが。だから、形態的に語としてまとまろうとする圧力が強くかかるときには、それは現象の不規則性・個別性となって現れる。中国語では、形態的に語としてまとまろうとする圧力がかなり弱く、語の構成要素は、あたかもそれ自身が語であるかのようにふるまう。つまり、語と同等の範疇性、機能、意味の透明性などをしめすのである。本稿で見た動補型複合動詞のC類や評価型などがそれであろう。B類においても、擬似独立形式の独立性の高さは際立っている。だから、従来の研究で動補型複合動詞が句であると分析されてきたのも理由があることなのである。

動補型複合動詞は、結合の際にかなり強く範疇選択や意味選択を行う。しかし、それでいながら、その結合は臨時的である。本論の語例を見ても、中国語の動補型複合動詞がいかにバラエティー豊かにいろいろな語幹形式と結合するかということが分かるだろう。これらは時制やアスペクトの接辞形式を構成要素内に入れられないことから、語としてまとまっていると考えた。だが、この結合の臨時性を見せつけられると、これらが語彙化されていると考えるのには抵抗がある。また、時制やアスペクトの接辞形式を挿入できないにもかかわらず、“得”や“不”といった要素を間に入れることはできるのである。臨時性と結合度の高さ、また結合度の高さのむら。このような二面性が中国語の語認定、ひいては形態論を難しくしている。

従来から、動補型複合動詞はしばしば日本語のV-V複合動詞と比定され、対照研究されることが多い。しかし、本研究からは、むしろその違いのほうが目立つ。本論でも述べたように(3.7.)、日本語の複合動詞の後部要素は、かなり接辞化しているのである。これを複合動詞と認めない論者もいる(宮岡 2002)。それに比べると、中国語の複合動詞の構成要素は語そのものといってもいいほどの独立性を持っている。また、語としての機能(他動性、文型選択等)も保持している。これもある種の形態と統語のミスマッチと考えられる。

これからは、このような形態と統語のミスマッチともいえる現象が中国語の他の形式も起こっているのが課題となる。たとえば、「方向補語」や「程度補語」といわれる形式である。これらの形式を分析するに

は、中国語の形態論の全体像を視野に入れた研究がこれまで以上に必要となるだろう。

## 参考文献

〈日本語文献〉

- 秋山淳 (1996) 「非対格性と動詞分類」 『中国語学』 243, 28-38.
- 秋山淳 (1998) 「語彙概念構造と動補複合動詞」 『中国語学』 245, 32-41.
- 荒川清秀 (1981) 「中国語動詞にみられるいくつかのカテゴリー」 『愛知大学文学論叢』 65, 1-25.
- 荒川清秀 (1986) 「中国語動詞の意味における段階性」 『中国語』 9月号, 30-33.
- 石井正彦 (1983) 「現代語複合動詞の語構造分析における一観点」 『日本語学』 2巻8号, 明治書院, 79-90.
- 石村広 (1998) 「動補動詞の認知的視点」 『中国文化』 56, 11-22.
- 石村広 (1999) 「現代中国語の結果構文—日英語との比較を通じて—」 『文化女子大学紀要人文科学研究』 7, 141-155.
- 石村広 (2000) 「中国語結果構文の意味構造とヴォイス」 『中国語学』 247, 142-157.
- 今井敬子 (1985) 「「結果を表わす動補構造」の統辞法」 『中国語学』 232, 23-32.
- 上野善道 (1977) 「日本語のアクセント」 『岩波講座 日本語5 音韻』 岩波書店, 281-322.
- 上野善道 (1980) 「アクセントの構造」 柴田武編 『講座言語 第1巻 言語の構造』 大修館書店, 87-134.
- 上野善道 (2003) 「アクセントの体系と仕組み」 上野編 『朝倉日本語講座3 音声・音韻』 朝倉書店, 61-84.
- 大河内康憲編 (1992) 『日本語と中国語の対照研究論文集』 (上) くろしお出版.
- 太田辰夫 (1958) 『中国語歴史文法』 江南書院.
- 奥田靖雄 (1977) 「アスペクトの研究をめぐって—金田一的段階—」 『ことばの研究・序説』 (1985) むぎ書房, 85-104.
- 影山太郎 (1993) 『文法と語形成』 ひつじ書房.
- 影山太郎 (1996) 『動詞意味論—言語と認知の接点—』 くろしお出版.
- 風間伸次郎 (1992) 「接尾型言語の動詞複合体について：日本語を中心として」 宮岡編 (1992) 241-260 (第11章) 所収.
- 金子亨 (2003,1995<sup>1)</sup>) 『言語の時間表現』 ひつじ書房.
- 川本茂雄・國廣哲彌・林大 (1979) 『日本の言語学 第5巻 意味・語彙』 大修館書店.
- 金田一春彦 (1950) 「国語動詞の一分類」 『言語研究』 15 (金田一編 (1976) 5-26、所収) .
- 金田一春彦編 (1976) 『日本語動詞のアスペクト』 むぎ書房.
- 木村恵介 (2005a) 「現代中国語における結果複合動詞の意味と文法」 2004年度後期全体研究会レジュメ.
- 木村恵介 (2006) 「動補型複合動詞の構造」 『ユーラシア言語文化論集』 9 (千葉大学文学部ユーラシア言語文化論講座) , 77-92.
- 木村英樹 (1981a) 「被動と「結果」」 『日本語と中国語の対照研究』 5, 27-46.
- 木村英樹 (1981b) 「「付着」の“着/zhe/”と「消失」の“了/le/”」 『中国語』 No. 258, 24-27.
- 木村英樹 (1982) 「中国語」 『講座日本語学11 外国語との対照II』 明治書院, 19-39.
- 木村英樹 (1992) 「BEI受身文の意味と構造」 『中国語』 6, 10-15.

- 木村英樹 (2000) 「中国語ヴォイスの構造化とカテゴリ化」『中国語学』247, 19-39.
- 窪蘭晴夫 (1995) 『語形成と音韻構造』くろしお出版.
- 窪蘭晴夫 (1998) 『音声学・音韻論』(西光義弘編、日英語対照による英語学演習シリーズ1) くろしお出版.
- 窪蘭晴夫・太田聡 (1998) 『音韻構造とアクセント』(中右実編、日英語比較選書10) 研究社出版.
- 國廣哲彌 (1982) 『意味論の方法』大修館書店.
- 郡司隆男 (2002) 『単語と文の構造』(現代言語学入門3) 岩波書店.
- 香坂順一 (1983) 『中国語の単語の話—語彙の世界—』(中国語研究学習双書7) 光生館.
- 沈力 (1991) 「中国語の結果補語を取る [V-得] 文の構造について」『言語学研究』9 (京都大学), 58-92.
- 須賀一好 (2000) 「日本語動詞の自他対応における意味と形成との相関」(丸田・須賀編 (2000) 111-131、所収) .
- 柴谷方良 (1978) 『日本語の分析』大修館書店.
- 杉村博文 (1982) 「「被動と『結果』」拾遺」『日本語と中国語の対照研究』No. 7, 58-82.
- 杉村博文 (1992) 「可能補語の考え方」大河内康憲編 (1992) 213-232 所収.
- 杉村博文 (1994) 『中国語文法教室』大修館書店.
- 鈴木武生 (2004) 「中国語結果構文のイベント構造と使役交替」Proceedings of the Annual Meeting of the Kansai Linguistic Society, 24 (関西言語学会), 176-186.
- 田口善久 (1990) 「現代中国語の補語をともなう“得”の解釈について」『東京大学言語学論集 '89』217-223.
- 苞山武義 (1995) 「「V得R」結果補語の分類と構造」『中国語学』242, 96-103.
- 邓超群 (2006) 「中国語のV-V複合動詞について」千葉大学大学院文学研究科「北方言語論」2006年1月10日発表レジュメ.
- 童鳳環 (2002) 「中国語における自動詞・他動詞—使役主の取り付けと取り外し—の考察への試み」千葉大学大学院文学研究科授業「北方言語論b」2002年10月22日発表レジュメ.
- 藤堂明保・相原茂 (1985) 『新訂 中国語概論』大修館書店.
- 中川裕三 (1992a) 「使役義を表す動補動詞について—意味構造を中心に—」『人文学報』234, 東京都立大学人文学部中国文学研究室, 119-137.
- 中川裕三 (1992b) 「CR他動詞文について—認知言語学的視点から—」『中国語学』239, 76-85.
- 中川裕三 (1995) 「中国語の文法形式と結果含意」『中国語学』242, 1-11.
- 野村雅昭 (1977) 「造語法」『岩波講座 日本語9 語彙と意味』岩波書店, 245-284.
- 萩原裕子 (1998) 『脳にいだむ言語学』(岩波科学ライブラリー59) 岩波書店.
- 服部四郎 (1949) 「具体的言語単位と抽象的言語単位」服部 (1960) 447-460所収.
- 服部四郎 (1950) 「附属語と附属形式」服部 (1960) 461-491所収.
- 服部四郎 (1954) 「音韻論から見た国語のアクセント」服部 (1960) 240-272所収.
- 服部四郎 (1960) 『言語学の方法』岩波書店.
- 服部四郎 (1968) 「意味」『岩波講座哲学11 言語』岩波書店, 292-338. (川本他編 (1979) 47-90に再

録)

- 早田輝洋 (1992) 「東京方言におけるアクセントの担い手と複合の熟合度」早田 (2000) 197-207所収.  
早田輝洋 (2000) 『音調のタイポロジー』大修館書店.  
藤田糸恵 (1993) 「「完成」を表す“V好”と“V上”について」『お茶の水女子大学中国文学会報』12, pp.45-54.  
古川裕編注 (1997) 『中国現代小説系列 離婚指南 別れの手引き』東方書店.  
彭广陆 (2000) 「日中両国語における姿勢動詞の比較」『日中言語対照研究論集』2, 47-71.  
丸田忠雄・須賀一好編 (2000) 『日英語の自他の交替』ひつじ書房.  
宮岡伯人 (2002) 『「語」とはなにか エスキモー語から日本語をみる』三省堂.  
宮岡伯人編 (1992) 『北の言語：類型と歴史』三省堂.  
望月圭子 (1990a) 「日・中両語の結果を表す複合動詞」『東京外国語大学論集』40, 13-27.  
望月圭子 (1990b) 「動補動詞の形成」『中国語学』237, 128-137.  
望月八十吉 (1992) 「日中両国語における能格的表現」大河内康憲編 (1992) 49-67所収.  
安井二美子 (1999) 「“把”構文述部における必要条件」『中国語学』246, 154-164.  
山口直人 (1991) 「動補動詞の類型と形成について」『中国語学』238, 115-124.  
湯川恭敏 (1971) 『言語学の基本問題』大修館書店.  
湯川恭敏 (1999) 『言語学』ひつじ書房.  
Яхонтов, Сергей Е. (1957) Категория Глагола в Китайском Языке. Ленинград : Издательство Ленинградского Университета. [C・E・ヤーホントフ、橋本萬太郎訳 (1987) 『中国語動詞の研究』(中国語学研究双書3) 白帝社.]

〈中国語文献〉

- 郭锐 (1993) 〈汉语动词的过程结构〉《中国语文》6, 410-419.  
侯精一、徐枢、张光正、蔡文兰编著, 田中信一、西槇光正、武永尚子编著 (2001) 《中国语补语例解 (日文版)》商务印书馆。  
黄锦章 (1993) 〈行为类可能式V-R谓语句的逻辑结构与表层句法现象〉《现代语言学》第2期, 57-62.  
李临定 (1980) 〈动补格句式〉《中国语文》第2期, 93-102.  
李临定 (1984) 〈究竟哪个“补”哪个〉《汉语学习》第2期, 1-10.  
李临定 (1986) 《现代汉语句型》商务印书馆。  
刘月华等 (1983) 《实用现代汉语语法》，外语教学与研究出版社。〔相原茂監訳、片山博美、守屋宏則、平井和之訳 (1991) 『現代中国語文法総覧 (上) (下)』くろしお出版。〕  
魯曉琨 (1996) 〈“V完”和“V好”〉『中国語学』243, 49-55.  
吕叔湘 (1986) 〈汉语句法的灵活性〉《中国语文》第1期, 1-9.  
吕叔湘 (1987) 〈说“胜”和“败”〉《中国语文》第1期, 1-5.  
吕叔湘 (1999, 1980<sup>1</sup>) 《现代汉语八百词 (增订本)》商务印书馆。  
马庆株 (1981) 〈时量宾语和动词的类〉《中国语文》No. 2, 86-90.  
沈力 (1993) 〈关于汉语结果复合动词中参项结构的问题〉《语文研究》第3期, 12-21.

- 湯廷池 (2002) 〈漢語複合動詞的「使動與起動交替」〉 *Language and Linguistics* 3.3, 615-644.
- 王红旗 (1993) 〈谓词充当结果补语的语义限制〉 《语言学习》 第4期, 17-21.
- 王红旗 (2001) 〈动结式述补结构在把字句和重动句中的分布〉 《语文研究》 第1期, 6-11.
- 王力 (1943-44) 《中国现代语法》 (上/下) 商务印书馆. (中华书局 1979)
- 王力 (1944-45) 《中国语法理论》 (上/下) 商务印书馆. (中华书局 1955)
- 王砚农、焦群、庞编 (1987) 《汉语动词—结构补语搭配词典》 北京语言学院出版社.
- 詹人凤 (1989) 〈动结式短语的表述问题〉 《中国语文》 第2期, 105-111.
- 朱德熙 (1982) 《语法讲义》 商务印书馆. [杉村博文/木村英樹訳 (1995) 『文法講義—朱德熙教授の中国語文法要説』 白帝社.]

〈欧文文献〉

- 余霽芹 (1966) *Embedding Structures in Mandarin*. Project on Linguistic Analysis Report No. 12. Columbus: The Ohio State University Research Foundation.
- 余霽芹 (1971) *Mandarin Syntactic Structure*. Unicorn (Chi-Lin) No. 8. Princeton: Chinese Linguistics Project, Princeton University.
- 赵元任 (1965) *A Grammar of Spoken Chinese*, University of California Press.
- Duanmu, San (2000) *The Phonology of Standard Chinese*, Oxford University Press.
- Li, Yafei (1993) "Structural Head and Aspectuality," *Language* 69-3, 480-504.
- Bloomfield, Leonard (1935, 1933<sup>1</sup>) *Language*, George Allen & Unwin Ltd., London.
- Booij, Geert (2005) *The Grammar of Words*, Oxford University Press.
- Cheng, Lisa Lai-Shen, C.-T. James Huang. (1994) On the Argument Structure of Resultative Compound: *In honor of William S.-Y. Wang Interdisciplinary Studies on Language and Language Change*, ed. by Matthew Chen and Ovid Tzeng: 187-221. Taipei: Pyramid Press.
- Matthews, Stephen (2006) "On Serial Verb Constructions in Cantonese" in *Serial Verb Constructions: Cross-Linguistic Typology*, edited by Alexandra Y. Aikhenvald and R. M. W. Dixon, Oxford University Press, 69-87.
- Norman, Jerry (1988) *Chinese*, Cambridge University Press.
- Packard, Jerome L. (2000) *The Morphology of Chinese: A Linguistic and Cognitive Approach*, Cambridge University Press.
- Trask, R. L. (1993) *A Dictionary of Grammatical Term in Linguistics*. Routledge.